
力ち込め！ザフィーラさん

ライサンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力チ込め！ザフィーラさん

【NNコード】

N0734K

【作者名】

ライサンダー

【あらすじ】

現代を生きるとある会社員・・・彼が目覚めた場所は、見たことのない、しかしへこか見覚えある部屋だった。

そこに居たのは・・・

これはとある苦労人の一大叙事詩である・・・

会社員である必要が全くないことに気づいてしまいました

一応精神的大人であるので上下関係の折り合いが得意、といった
レベルです

まあ、気にせずお読み下さい

第一話　『みづみづ、 いい幼女』（前書き）

もう一つの連載も進んでないのになんかやり始めてしまいました

完全にノリです

勢いです

見切り発車です

後悔は少ししてくる

第一話　『つまつ、いい幼女』

深夜

「な、なんなんや」「レ・・・?」

とある街のある家で、独りの少女が目の前の事態に軽いパニックになっていた

彼女の名はハ神はやて（۹）

この時点では魔法なんか知らない、なんやかんや不幸な設定を背負う薄幸の美幼女である

現在彼女の前には一つの本が光を発しながら『浮いている』

そう、浮いているのだ

鎖で雁字搦めに封印された、見るからにアヤシい本だ

しかし、これから語ることに彼女達は関係ない。関係ないこともないが、この物語の主人公ではない

そう、今、まさに現れんとする『彼』こそが、この一大叙事詩の主人公である・・・

力チ込め!ザフイー「さん第一話　『うまつ、いい幼女』

意識が浮上する

明るい闇

見たことのない世界

そして、全てが鮮明になつてゆく

(・・・アン?」「は・・・?）

「・・・ら・闇の・・・」

「主・・・・参じ・・・」

(何だ?何言つて・・・!?)

耳に聞き覚えのない声が聞こえてきた
それにより意識をはつきりさせると、『彼』は見覚えのない部屋に
ひざまづいていた

未だに現実を把握しきつていない彼の目は、一人の女性と一人の幼
女が映る

そして自分に眼を落とすとなんかよくわからんがピッヂピチのタイプみたいな、犯罪チックな服を着せられていた

（はつ！？なんだコレ？ハーレム？いや、こんな奴隸みたいな服で？アレ？俺奴隸？『気がついたら全く知らない場所で女王様プレイを強制せられていた』・・・何？新手のイジメ！？）

「「「我らヴァルケンリッター、主の命に従い参上いたしました」」

混乱の極地にある彼の耳にどこか聞き覚えのある単語が入つてくる

『ヴァルケンリッター』

そう、とある叙情的な魔砲少女アニメに出てくる騎士団である

（え？え！？何？そういう設定のプレイ？確かにみんなソレっぽい人たちだけど、え？俺も？参加してんの？拉致られた上で更にアニメプレイ？これ何て変態？）

しかし未だに現実を理解できていなかつた

「・・・ねえねえ」

「おいヴィータ、主の御前だ、静かにしろ」

「でもさ、『イツ氣い失つてんじゃねえ？』

「ム？？？あつー」

「あらあら

そんな彼をよそに傍らではそんな会話が繰り広げられている

『彼』はこの状況にかなり予想が立っていた

一般的な会社員であつた『彼』がこよなく愛し、日夜ネットを見て読みあさつていた「一次小説」なるモノ・・・

その中に溢れるほど存在するシチュエーションだ

つまり、憑依・転生系のテンプレに沿つてると、感づいた

それならば

(聞いたことある会話キタコレーフーーことはこの人等は紅口リ、乳侍、女医さんか！アレ？てーことあ俺は・・・)

『彼』にも役割があるはずだ

「とにかく主をどうにかしなければ・・・」

ピンポン

「あら？誰か来たみたいよ？」

「主の御知人か？誰かは解らんが出るしかないだろ？

「・・・なあ、ザファイーラ、どうしたんだ？何時になく無口じやね
ーか？」

（ザ、ザファイーラ・・・だと？）

『彼』、『ザファイーラ』は、自らの置かれた状況を完全に呑
み込んだ

果たしてザファイーラとして目覚めた彼が、これから始まる物
語の主人公である

彼がこの世界で何を成すかは、今はまだ、誰も知らない

（・・・影、薄すぎるだろい）

続
<

第一話　『つまつ、いい幼女』（後書き）

更新できるだらうか・・・

第一話　『人としての尊厳』・・・あつ、俺犬か（前書き）

ザフイーラの一人称つて私だつたか、我だつたか・・・

あとはやての一人称つて私だつたか、ウチだつたか・・・

やべえ忘れた

誰か教えて

第一話　『人としての尊げ〃・・・あつ、俺犬か』

・・・こんにちは

ザファイーラです

いや、厳密に言えば違います
まあとりあえず、それは後にしよう・・・

問題は今の俺が置かれている状況なんだが

「じゃあ行つてくるよはやで！」

「行つてらつしゃへい。一人とも氣いつけやへ？」

「うん！よつし、行くぞザファイーラ！」

紅口リに首輪を繋がれ犬散歩プレイの真つ最中也・・・

力チ込め！ザファイーラさん第二話　　『人としての尊げ〃・・・あ
つ、俺犬か』

話は三日前にまで遡る

六月某日・深夜、海鳴総合病院にて

とある少女が目を覚ます

彼女の名は八神はやて（۹）、先ほどまで絶賛氣絶中だった

ふと周りに目をやれば見知った女医の顔が見える

「あれつ？ 石田先生・・・？」

「まつたく、はやてさんが急に倒れたって言つから心配したのよ？・
・で、あの人たちは何なの？ 聞かせてもらえるわよね・・・？」

石田医師に促されたところを見ると、黒いパツンパツンの服を
着た四人の男女が立っていた

皆無表情で・・・いや、一人、犬耳をつけた銀髪褐色の男性だけは
放心したように立っていた

なんで一人だけそんな顔しとるんや？と、思いながらも、はやては
石田医師に

『彼らは遠縁の親戚であり、自分の誕生日をサプライズで祝いに来て
くれたが、ビックリして氣を失つてしまつた』と、
子供でも解る苦しい言い訳で『まかしながら、帰宅許可を貰つた

一方、放心していた男性こと我らがザフイーラさんは、まさに放心していた

彼は状況を完全に理解し、ザフイーラとして演じることに決めた
しかし初っ端から最大の難関が立ちはだかる

彼はこのアニメは知っていたが、そこまで熱心なファンでもない

・・・そつ、肝心のザフイーラの活躍を覚えていないのだ

主に影が薄すぎて

・・・覚えている唯一の場面が第三期、六課の隊舎でシャマルさん
と一緒にボコられてた事だというのだから始末に負えない

（あー・・・なんだ、どんな奴だつたつけ、ザフイーラ・・・クソ
ッ、これは初っ端からヴォルケン達に不信感をもつてしまつ・・・
そうなると ）

『貴様！ザフイーラではないな！？本物のザフイーラをビヘヘやつ
た！』

『いや、待て、私は本モリ

』

『まさか主はやてに害為す輩か！？問答無用ー！切り捨てるー。』

『ちよ、ま、ギャアアアアアー！！』

b a d e n d • •

（あ、あり得すぎて困る・・・つ！？つうかシグナムさんレベルの強キャラなら思い出せんだけ！…どうせならシグナムさんに憑依したかった・・・あのおっぱい実にけしから（ゲヒングフンー）

若干焦りすぎて現実逃避気味だった

これをはやてに見咎められたのだが、幼女にはそんな内面までは見抜けなかつたのが幸いだった

家につくか着かないかという所まできで、ザフイーラはハツとした

前世といえる『彼』の意識が確かにこの体を操つている
しかし、何か『自分であつて自分ではない』記憶のようなものが頭
に浮かんでくることに気づいた

（「、これは・・・『記録』か？いや・・・）

無駄に回転する頭脳は一つの答えを見つけた

これはおもむりく、『ザフイーラ』といつ個体データに蓄積された、闇の書から送られる『ザフイーラの記憶』と書かれた『記録』なのだろう

ヴォルケンリッターはプログラム生命体だ
ならば『記憶』も『記録』として残り、更新された個体にフィードバックされてゆくのだろう

しかし、今はそんなことまでいともいい

何より彼にとって重要なのは

（キタ！キタコレ！これでザフイーラの行動わかんじやん……ひとまず命拾つた！これで勝つる……）

この事実で助かる道があるといつ事だ

思わず両手をあげて万歳してしまつぽんに浮かれていた

「……ザフイーラ、わざわざからなにやつてんだ？」

ビクッ……

すぐ前を歩く、ヴィータのジト田と声に思わずビクつてしまつザフイーラ

犬耳でガタイのいい兄ちゃんが幼女の声にびくつく様はショールで
すらある

「いじは冷静にと、『記録』にあるザフイークに回答をしておく

「いや・・・何でもない。気にするな」

「やうか・・・ま、いいや」

ヴィータは特に興味も失せたのか、ふい、と前に向き直る
ほつ、と、ザフイーラが一息吐いたといひでやつとハ神家に到着し
たらしい

はやてが嬉しそうに顔を中に案内する

ザフイーラは当面はしのげるだらうと樂観的に思い、シグナムたち
の後ろについて行った

先ほどのやつとりを、シャマルが真剣な顔をしながら見てい
たことに、ザフイーラは気づかなかつた

「じゃあ明日はみんなの服買いに行かななーーうふーーやうやーー」

ハ神家、深夜

「い、いえ我が主、我らにその様なことはしていただきなくとも…」

「

「いやー！ウチはみんなの主なんやろ？それならみんなの体を預かる家長つてわけや。ウチが責任もつて養つたるー」

「は、はあ…」

「それとな、主じやなくて、はやてつてが前で呼んでや？ウチらはもう家族みたいなもんやろ？」

「は、い、主はやで…」

「よしー！それでええよ。まんなり明日に備えて今日はもつ寝よか？」

シャマルに連れられぬやすみー、ヒ、部屋へと溢えてゆくはやて

「…なんかさ、変わったヤツだよな…」

「ひむ・・・しかし、悪いお方ではないだろ？」

今までの主達との違いに烈火の将と鉄槌の騎士はとまどいを隠せないようだ

しかし、ザフイーラは別のことと思つていた

（はー、じつかりしたええ子やなー…でも、見ず知らずのアヤ

シい四人組をいきなり家におくとか、防犯意識なさ過ぎじゃないか
？家族に食えてるとはいえ、無防備すぎるよつた気も・・・）

この間も無表情は崩さない

だいぶん『ザファイーラ』を理解してきたんじゃないか、と、自画自賛していた

しかし、そんな楽観は早くも碎かれることとなる

はやてを寝かせてきたシャマル今に帰つてくると、すこし深刻な顔で話を切りだした

「・・・みんな、少し気になることがあるのだけれど・・・」

（ん？こんな展開あつたか？）

「どうした、シャマル？」

「何か問題か？」

「・・・問題がどうかは解らないんですけど、少しね、闇の書に違和感があるの」

この流れに嫌な予感がMAXハートなザファイーラ既に変な汗が垂れ始めている

「違和感、だと？主に害為す類のモノか？」

騎士の鑑のシグナムさんがまずは確認をする

「いえ、それは大丈夫みたい。ただ、私にもよくわからないのだけど、闇の書に『何か』が入ったような感覚がするの・・・みんな、何か体に違和感は感じない?」

参謀として四人の中で最も闇の書に詳しいシャマルの言葉に一人も真剣に考え出したようだ

ザフィーラは無表情を貫き通す。

しかし、その顔には滝のように汗が流れている

(は?違和感?入った?・・・・・・・・・ちょ、ちょちょちょい!?!?これ俺のことじやね!?ヤベエ!早速バレタ!..早え、早えよシャマル!!そんな有能だったのかよお前ちょっとオオ!?第三期でその輝きを發揮しろよー!実にけしからん尻をしやがつ! (ゲヒングフン!)

内面は最高レベルに混乱している

「・・・アタシは特になんも、ねーぞ?」

「私もだ・・・これといって感じられん

答える一人とシャマルの眼が、押し黙るザフィーラに向けられる

(「うちを見るなあああああ——！——！」)

心中で大絶賛絶叫中のザフイーラ

「どうした、ザフイーラ？」

「……なあ、ザフイーラ。お前さ、さつきなんか変だつた、よな？」

三人の視線は強くなる一方だ

(ッ！ええい、まよー！)

これは逃げきれない、諦めるしかない、と、パニクる頭でなんとか乗り切ることにした

「・・・実を言つてだな・・・少しほど、記憶に混乱がある」

「やつぱつ！ ザワヤー ラー？」

「どうしたんだよ！大丈夫なのか！？」

ちらを見つめている

「JNJで止まつたらb a d e n d直行だと感じ、ザフィーラの口ハ丁
は止まらない

「いや、問題はないようだ……ただ、前回までの私とは少し異なる、らしさ」

「……へビーコウ」と?

「『闇の書の盾の守護獣・ザフィーラ』ということに変わりはない。
・・ただ、そのイリーガル（異分子）の影響か人格データが少し改
変されたようだ・・・」

「そんな・・・」

「だ、大丈夫なのか！？それ！！」

シャマルは絶句し、ヴィータは更に心配そうにしている

「どちらにしろ私には変わりない。問題は無いはずだ」

ザフィーラがそう言い切ると一囁場を沈黙が埋める

予想外の事態に皆困惑しているようだ

否、シグナムがおもむろにレヴァンティンを起動させ、腕を
組みながら立っているザフィーラに突きつける

「シグナム！？」

「おい、いきな 」

「少し黙つていろヴィータ……ザフィーラ、一つ聞く。お前のすべき使命は何だ……？」

少しの間

ザフィーラはシグナムから皿を返すとなく、口を開く

「 決まつている。我が身は盾。我是盾の守護獸。この身はただ、我らが主の盾として 身命を賭して守り抜くだけだ」

数拍 二人は睨み合つ

と、シグナムが笑みを漏らし、剣を納めた

「・・・どうやら、今のところは問題ないらしいな。すまなかつた、ザフィーラ。疑つよくな真似をして」

仲間に剣を突きつけたことを謝罪するシグナム

それに対しザフィーラは少し立ち位置をずらし、問題ないと眼を閉じる

「 いや、当然だ。謝らなくてもいい」

「そうか だが、お前が、お前の中の何ががいつか、我らの主を脅かすのなら 」

「解つている。その時は、私を切り捨ててくれ、我らが将」

代わる代わる言葉を交わす二人に緊張は去つたと感じたのか、残された二人はほっと安堵の息を漏らす

すぐさまヴィータが吠える

「てめー…ザフィーラー…心配させんじゃねー…！」

「何かあつたらすぐ言つてね？ 診察しますから」

空気も緩み、団欒が戻ってきたその場に反し、ザフィーラの心中はすこじことになっていた

（あつつつつつぶねええええいやいさあ…！…！助かった！？
乗り切つた！？あくまでも、心臓破裂するわ…！…？）

彼は命をつなぐために必死に無表情を繕い『頑なな盾の騎士・ザフィーラ』を演じきった

必死になれば、人間やればできるもんだと知ったが、彼からすれば一度とやりたくなかつた

心臓に悪すぎる

会話中は常に心拍数限界突破だ

シグナムに剣を突きつけられた辺りなんか思わず、
『うつひやい！？』と言つ情けない声が出そうになつたが、下腹部
に力を込めてなんとか呑み込んだ

本来の『彼』にはこんな胆力はない
オリジナルのザフィーラボディのハイスペックさには感謝感激狂喜
乱舞である

いや、別に踊らないが

「しかし」

シグナムがまた真面目な顔に戻る

ザフィーラはまだなんかあんの！？やめて！俺のS.A.N値はもうゼ
ロよ！？な気分だったが、顔には出さない

「ザフィーラがどうなつているか詳しくはわからない。その解析は
シャマルに任せるが、大まかな結果ができるまではなるべく誰かが常
に側にいた方がいいだろ？」「

「・・・そうね。もしもの場合もあるから・・・ザフィーラもそれでいいかしら」

「ああ・・・構わん。（なんだそんなことか・・・アレが、監視付きだがかまわんだろう？）ってことか？モーマンタイモーマンタイ！むしろ平穏な日常を謳歌できる！――）

はやてを守るためにもシグナム達はそうするべきだと思つてゐるらしいが、ザフィーラにはやてを傷付けるつもりなんかヒトカケラもないでの、斬られる心配もない

ザフィーラは己が未来を勝ち取つたことに思わず心からの笑みが浮かんだ

「「「「つ……」」」

「へ.どうした？」

みんなが一斉に固まつたことを、ザフィーラは不思議に思声を掛けり

三人は珍しそうな動物のあり得ない行動を見たように、眼をキョトノとさせていた

するとシャマルが恐る恐る言い出す

「ザ、ザフィーラが、微笑つた・・・？」

「・・・私とて笑いもするだろ？」

ザフィーラの『記録』によれば、数は少ないが、オリジナルのザフィーラが笑っていたことは有るはずだ

何がそんなに不思議なのか解らず、なんとなく不安になってきた

「い、いや、悪くねーんだけどよ・・・ただ・・・何といふか・・・

」

珍しく言葉が見つからぬようザフィーラ
それをシグナムが引き継ぐ

「・・・そんなに柔らかい笑みができるのだな・・・長い付き合い
だが知らなかつた。それにいつもより幾分か饒舌だ。これも改変の
影響・・・か?」

ザフィーラは合点が行つた

今までのザフィーラの笑いは、微笑みと書つより、ビニカーヒルな
笑い方が目立つていたのだ

今のザフィーラの心からの歓喜の笑みは、同じ顔だからこそ、彼女
達に与えるインパクトが違つたらしい

(いや、普通に笑つただけなんすけど・・・ザツフィーラんだけ無
愛想だつたんだ・・・)

こんな小さな違和でも大きく感じてしまひうら

ザフィーラは、何となく前途多難な気がして、微笑みを浮かべていた顔に、微妙な、ぶすっとしたしかめ面を浮かべた

「あつー、こつものザフィーラにもどつたー！」

「あら、やつぱつこつちの方が落ち着くわね」

「つむ、馴染みがないと、ビツも動搖してしまひ

“やつぱつこつちのしかめ面が本来のザフィーラの、コートラルらしい

い

今度こそ漠然たる不安を感じ、ザフィーラはしかめつ面を浮かべていた

これが三日前の夜

あれから三日達、一昨日は皆で服を買いに行き、昨日は皆で町を

散策しまくった

ヴィータ等はすっかりはやてに懐き、他の一人もハ神家になじみつ
つあるようだ

ザフィーラは昨日一昨日と人間の格好でいた

頭にはニット帽をかぶり、シックな黒いジャケットにデニムと言つ
た出で立ちで、すっかり父親、兄みたいな位置に収まつていた
まあザフィーラの落ち着き様とヴィータのはしゃぎっぷりを見たお
店のおばちゃんが、一人を親子と勘違いして一悶着あつたりもした
のだが

ザフィーラははやてを主と呼ぶ

そこは原作通りだが、原作よりも饒舌でよく笑みをこぼすザフィー
ラに、昔の彼を知らないはやてはもちろん、も他の三人も概ね受け
入れていた

よく考えたら、高身長、高能力、男として憧れる筋肉の持ち主であ
り、銀髪イケメンだ

見た目だけならどこぞの某運命の守護者にも似通う部分がある
しかも軽くハーレムであり、端から見たら間違いなく勝ち組である
(イヤッハ！たゞしすぐる！何このエロゲ主人公み
たいな環境！？生まれ変わつてよかつた！)

それを考え悦に漫ると、同じ存在のせすなの、原作ザフイークの不遇ぶりに涙が出そうになつた

(つて、アレ? 何でだ? なんで原作は・・・)

しかし、そこで少し嫌な予感はしていたのだ

今朝の1じとある

皆で朝食を食べていた時に、しめじの味噌汁（はやて謹製）を飲んでいたシャマルが、ふと思いついたかのように1じつたまつた

『ナウヒ言えばザフイーク、今日は狼形態にならないのね?』

それを聞いて昨日の嫌な予感がなんであるか一瞬でザフイーラは理解した

しかし、シャマルの言葉にはじがにじめへ反応してしまつ

『狼形態? なんなんそれ?』

『はやてちやん、それさですね。ザフイークはね今は人型だけど、もう一つ狼にも変身できるんですよ?』

その言葉にキラキラと皿を輝かせるはやて

ザフィーラは手遅れだと悟つた

原作の不遇は、ここに原因があつたのだらつ

『す、ご、い、な、ザ、フ、イ、ー、ラ、ー、ち、よ、つ、と、ウ、チ、見、て、み、た、い、わ、そ、の、狼、形、態、つ、て、や、つ、ー、』

ギロリ、と、『まさか主の期待を裏切らんだろうな』といつ視線が、
シャケをつついでいるシグナムから飛んできた

ザフィーラは既にあきらめているし、ヴォルケンリッターが一人と
して主に逆らう真似はしない

なにより、可愛い幼女にここまで言われて拒んでは、男が廢ると言
うものだ

『・・・解りました。では、食事が終わったら庭でやつてみせまし
ょう』

『ほんまか！？ありがとう！いやあ、楽しみやわあ・・・ウチな、
一回犬飼つてみたかつたんよ』

ウキウキとするはやてを皆で微笑ましく見守っていたが、ザフィー
ラは心中で嘆息していた

で、一時間後

変身を見せるとはやはては大層喜んでくれて、ザフイーラとしても何だか嬉しくなった

しかし、次の一言に危うく変な声が出そうになつた

『でも、それやつたら今まで散歩とか我慢してたんぢやうっ・行つてきてもええよ?うん、そりや、それがええわ!・行つても!・』

「ハーハと善意100%で勧めぐる我らが主

その後ろで車椅子を押しているシグナムから、
『まさか主の善意を断るつもりであるまいな』
といつ視線がガンガン飛んでくる

（怖い、怖いよシグナムさん。視線で穴があきそうだとはこのこと
か・・・原作でもまさかこんな事になつてたのか・・・?クツ（泣）
!）

ザフイーラは泣きたくなつたが、有り難くその申し出を受諾した
犬を放して歩かせるのはまずいとなり、件の監視を兼ねてヴィータ
が一緒に散歩に行くことになる

こうして、『ザフイーラの散歩』は、ヴィータの日課となつていいく
のであった

（幼女にリード握られてる俺って……ああ、犬か……ハハハハ
ハ・・・）

このままでは原作みたいな悲惨なことになってしまつため、いつか
改善すると心に誓いながら、

彼は今日も海鳴町を歩く

「おーイザフィーラー公園までギガダッシュだーいっくぜーーー！」

紅い幼女にリードを握られながら

続く

第一話　『人としての尊厳・・・あつ、俺大か』（後書き）

このまま行けば不遇街道邁進の予感

第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』（前書き）

自分でも何かいてるかわからなくなってきた

かなりグだつてますが、『愛嬌つてことで

第三話『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』

・・・「んにちは、ザフィーラです

今、俺は犬型ではありません
ええ、犬型ではありませんとも！

・・・重要なので一回言ったが構わんだろ？

まあ、そんな俺が何をしているのかといつと・・・

「いっくぜーじーちゃん！」

「ホホ、びーたちやんは元気じやのう」

和氣藪々と、ゲートボールに勤しむ紅口りをベンチから見守つていた

「ほら、ざらーうさん、お茶飲むかい？」

「む、頂きます」

お婆ちゃんにお茶をいひあわうになりながら・・・

ズズツ・・・

・・・ああ、茶が眞いなあ

力チ込め！ザファイーラさん第三話　『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』

七月某日

ヴォルケンリッターがハ神さんちにお世話になりだしてから早1ヶ月

家主・ハ神はやて（9）は毎日が充実して仕方がなかつた

最近家族となつた四人組もすっかり家に馴染み、近頃は皆思い思いに過ごしていることが多い

ヴィータは毎日の散歩の途中に見つけたゲートボールにハマつている

おじこちやん達のアイドルになつたようだ

シグナムは日がな一日縁側にいたり、剣を振つたりしていたが、『このままではイカン』と剣道場でコーチを始めた

シャマルは主に家事をやつてくれている

大体は家にいるが、今は買い物に行つてゐるらしい

ザフィーラ？もちろんヴィータに連れられての散歩だ

おそらくゲートボール場で、ヴィータとは違う意味でのアイドル（主にもふもふ的な意味で）となつてゐるだらう、と、はやは思つていた

四人が一度にいなくなると、前に戻つたみたいで少し寂しくなる・・・

だが、それでも誰かが帰つてきて『ただいま』と言い、それを『お帰り』と出迎えて上げられることが嬉しくて仕方がなかつた

「シャマルが帰つてきたら、今日は久し振りにちょっと腕ふるつたろかな～？ヴィータとか、喜びそうや・・・」

肉が大好きな末っ子を思いだし、フフッ、と笑いをこぼす

つまり、はやは今幸せだつた

一方、主にもふもふのアイドルだと思われているとほつゆ知
らず

ザフィーラはおばあちゃん達と茶をしばいでいた

（うーん、平和だねえ・・・そろそろ夏も本番だし、海とか行きて
ーなあ・・・）

本来の歴史ならばおそらく家で犬化してはやでの側で待機している
だろう彼が、ヴィータと共に公園にいるのには理由があった

三週間前

ザフィーラ達が八神家に来て一週間の時がたつた

この頃には皆それのライフワークを見つけだしていた

ザフィーラはいつしか日課になっていたヴィータとの散歩以外は、
何にしろ家にいたのだが、彼は問題ない

いざとなれば犬になればいいのだから（別になりたいわけではない、

どちらかといつと断固拒否したい）

しかし、シグナムが日夜家で「ロロロロ」しているのは如何なものかと、ザフィーラに突っ込まれたのだ

原作でどのような経緯を辿りコーチの職に就いたのかは解らないが、ザフィーラとしてはそのイメージが強かつたためになんとなくほのめかしてみたのだ

『まるで犬のようだな』と

そのセリフにシグナムはサンダーレイジの如き衝撃を受けたらしくまあ犬風情に犬と言われば誰だつてそうなる

シグナムからしたら特にすることもなく、家事はシャマルに任せているし、はやてと遊ぶぐらいしかない

しかし毎日毎日遊んで欲しいほどはやはガキではなかつたわけだ
よつて何か真剣に悩み出し、三日ほど経つた日の夕飯時に件のコーチの仕事を見つけたと畠に話したのだ

ザフィーラとしては特に意味もなく言った言葉だ

なんとなく縁側にいたシグナムが日向ぼっこをする犬っぽかつたか

ら言つたまでだ

しかもザフイーラ的にはそんなことなんかよりも「主はやてをお守りできる様に常に万全を期しているだけだ」とか騎士っぽいことを言われるかと思つたが、

一応体面は気にするらしい

まあこの世界が平和だというのを十分理解したこともあるのだろううが

これによりヴィータには散歩、シグナムには道場、シャマルには家事といつづりワークができた

(原作では丸まつてずっと居間で寝てたよな？・・・うん、つまらんな)

はやてがもふもふしたい時以外はなるべく人間で居たい彼は、何をするべきか悩んだ

まあ、ヴィータの犬散歩がある時点で毎日一度は犬にならねばならんのだが、それはそれだ

はやての守護獣としては主の側を離れない方がいいのだろうが、家にはシャマルもいるし、原作を知っているザフイーラは、『ずっと家に詰めていなくとも問題ないだろう』と考えている

（なんか、バイトでも探してみるか・・・ガテン系とか、似合ひすきで困る・・・）

田課の散歩中、ザフライラは公園までいろいろ考えながら歩いていた
ヴィータも最近では慣れたもので、探検を忘れない
今田は少し南の方まで行ってみるとしたらしき

（あっ、やうだ！！）

ザフライラはあることを思いつき、ヴィータに念話を送る

『ヴィータ』

「ん？ と、『ザフライラ、どしたの、急に念話なんか？』

『人型に戻つても構わないだろ？ つか？』

そう、この一週間律儀に犬化して散歩していたが、元はと言えばは
やての勘違いであるため別に守る必要もない
今日は南方面という初めて見る地域で、心機一転人型になつて歩い
てやううと考えたのだ

なんで気づかなかつたのー？ と、過去の自分を罵倒したいザフライ
ラだった

『え？別にいいんじゃねーか？なんで？』

『いや、少し見て回りたいと思つてな。狼の姿では辛いこといろいろあるだろ？』

『ああ～、なるほどな。よし、わかったーじゃあ今日は別行動なりでもはやくに心配かけたくねーから帰るとさは一緒にださー。』

『了解だ。帰りの時には念話を送る』

(イエッスー単独行動ゲットーー)

「うつむけの日初めてザフィーラは海鳴市の繁華街へと足を向けた

まあ、結論からいふと特にこれと言つて何もなかつた

バイクを探そうかと思ったが履歴書とか何も用意していないことに気づきブラブラ町を歩いただけだ

また、二次小説でよくある翠屋へ突撃なんかするはずもない完全に自殺行為だ

そろそろ口も傾きだしたので帰ろうとして、ヴィータに念話を送る

しかし返ってきた言葉はなぜかこなものだった

『ヴィータ？ 今何処にいる？』

『アンー？ ザフイーラかー？ 今レーとこなんだー。ちよつと待てーー。』

ブツリ、と、念話でもそんな切られ方をするのかと変に感心した

が、すぐに再起動し、仕方がないのでヴィータの匂いを追つて彼女を見つけることにした

お忘れだらうか？

彼の鼻は狼のソレだ

しかも魔法で更に強化できる

つまりー今彼には昔馴染みの嗅ぎ慣れたおにぎのこの体臭など一発で嗅ぎ取れるのだーー

・・・余りにも変態的でザフイーラは涙が出てきた

ヴィータをいざ発見すると、彼女はジジババに囲まれゲートボール

に勤しんでいた

クラブにグラーフアイゼンを使つといつ本氣つぱりだ

場所はいつもの公園よりも少し行つた先にある公民館のグラウンド
シルバーの方々の憩いの場である

(ああ～、ハイハイ、こんな設定あつたなあ)

命点が言つたとばかりにうなずきながら、
どうやら一段落着いたらしく和氣藹々と話していくの、一団にて近
づいていき、声をかけた

「ヴィータ」

45

「アハハ、つと、ザフイーラジやねーかーあつーー？さつまは悪イな。
・」

「いや、構わない。しかし、これは・・・？」

こちらに近づいたヴィータは、少しバツが悪そうになじながら近づいてくる

そこへ、ヴィータと話していたおじいさんが話しかけてきた

「びーたちやん？」の人はびーたちやんのお父さんかい？」

「なつーーまたつーーちびーよ吉田のじーちやんーー！」

また間違えられたことが遺憾なのか、憤慨するヴィータ

（・・・じいさん、銀髪褐色の俺から、ヴィータは生まれないだろ）

といつあえず挨拶しようと、吉田のじいさんなる人物に向き直る

「父ではないが、私はヴィータの家族として、ザファイーラと申します。どうやらヴィータがお世話になつたようだ。何分口が悪い娘ですから、迷惑ではありますんでしたか？」

「テメーーー！ 口が悪いってなんだよーーー？！」

吠えるヴィータは華麗にスルーだ

そんな、ヴィータを微笑ましげに見ながら老人はザファイーラと言つ

「ホツホツ、これはどうもいた寧な人じやの。やひーいらさんと言つたか？ 迷惑なんぞ思つとらんよ。むしろ禮を言いたいぐらいじや」

「そつじやね、びーたちやんは可愛いからのう

「最近は孫も大きくなつてしまつたから、やはり子供は良いもんじや」

口々にヴィータの存在を歓迎する老人達

（うやうやしくしてアイドルになつたよつだ

「子供じやねーーー！」

子供扱いにぶくつと頬を膨らませながら、更に子供らしさを際だたせる、ヴィータ

これ以上やつても後々怖いので、ザフィーラは老人に挨拶をして今日は帰ることにした

帰り際に「また来たらええよ?」と言われたが、ヴィータも乗り気だつたためそうなるのだろう

『ざひーさんも一緒に』と言われたのせどりみつけと黙つた
が・・・

「ひして、ヴィータのライフワークに『ゲートボール』が追加された

これが三週間前のことだ

この三週間時折ゲートボール場に通い、今ではすでにヴィータの保護者として顔なじみになった

本来のザフィーラと違い、『彼』は中々に喋れる方なので違う意味でおばあちゃん方のアイドルになつていた

ゲートボールじいさん達にはヴィータが、
ばあさんの茶飲み仲間達にはザフィーラが、
それぞれ人気者だった

老人会では、『最近人気者の若い親子がゲートボール場に時折現れるらしい』と、噂されているとか

ヴィータが聞いたらまたもや怒り出しそうだ

ザフィーラはこの穢やかな日々を非常に満喫していた

そして何より嬉しいのが、はやてもどことなくザフィーラが人型で居たいことが理解できたらしく、人で居られる時間が少し長くなつたのだ

これを受け、彼は最近工事現場で短期のバイトを始めた

ビルの土台建築現場：時給1225円
一日六時間良い汗流している

このザフィーラ、かなりアグレッシブである

かれこれ始めて一週間であり、今日はシフトが無いので久々にヴィータと一緒にグラウンドに顔を出したのだ

（思えば原作のザフイーラはよく暇じゃなかつたな・・・まじめだつたんだね・・・だがしかしー」これで未来の番犬化を防げる！―めさせ自立ーはやてちゃんに小遣いもらつのは体面が悪いしねーー）

収入の大半はシャマルに生活費として渡してある

別にグレアムおじさんが居るのだから金に困ることはないのだが、男として、働いていないのはどうも氣後れするのだった

現在昼の三時を回つたあたりだ

ザフイーラはそろそろ帰らうと、腰を上げザイータを呼ぶ

「ザイータ、そろそろ帰るだ

「オウ！わかつた、んじゃあなじーちゃん達ー」

ザイータと共にザフイーラはまたおいでー、と言つ老人達に別れを告げ、我が家を手指す

道中、ザイータがおもむろに話しあす

「なあ、ザフイーラ

「へ.どりうした」

「やつぱり……だいぶ変わってる、よな。前より」

例の人格改变云々の事だらう
ヴィータからすればやはり古い友人が違う人間になったような感覺
なのだろうか

「ああ……やはり可笑しいか?」

ザフィーラが聞き返すと、彼女は首を横に振り答えた

「いや、さ。やつぱりまだ時々違和感あるんだけどよ……でも、
今のオメーも中々いいんじゃねーか?」

ザフィーラは、意地つ張りのヴィータから『彼』を肯定してくれる
言葉がでたことに驚いた

やはり『自分』を受け入れてもらえるというのは嬉しいものだった

照れくさそうに少し顔を赤らめながら言つてくれる、ヴィータは、七
割り増しで可愛らしかった

断つておぐが、彼はペドフィリアではない

幼女は愛でもノータッチ、の紳士を標榜している

だけど、可愛えなあ

思わず笑みがこぼれ、ヴィータの頭に手を置く

「なつー？なにしやがるー？」

「いや、すまん。だが、そいつてくれると有り難い」

子供扱いされたと感じたことよりも、嬉しそうにザフフィーラがそいつの言つに気が削がれたのか、ヴィータはまたそっぽを向く

苦笑しながらも歩みは止めない

「では、我らが主の元に帰るか

少しずつ、物語には影響を及ぼさないレベルだらうがザフフィーラの存在は『原作』とは変わりつつあった

「ただいま、はやて！」

「ああおかえり〜、ヴィータ、ザフフィーラもなあ

「ただ今帰りました、主」

ハ神家に着くとはやでが出迎えてくれた

夕飯の支度には早いし、

シグナムもまだだったので、しばらく居間で団欒を楽しんでいた

ヴィータははやてと話すこと自体が楽しそうで、今日あつたことなどを楽しそうに話していく

はやても楽しそうに聞きに回っていた

ザフィーラはソファーに座りながら、そんな一人を眺めている

小さな一人の様子は、見ていて笑みがこぼれるようなものだったが、今彼は珍しく深い思考の海に陥っていた

（・・・やうだよ、今は平和だからいにけど、あと二ヶ月もしたら
はやてちゃんが倒れちまうんだ・・・
んーむ・・・別に何もしなくてもハッピーハンドこななるだろう
が・・・）

彼の知る原作は、『れ以上無いぐら』の『ベスト』な結末だった

リインフォースが消えたことも含めての『ベスト』だ

もしも彼女が消えていなかつた場合、『悪逆の限りをつくした闇の

書』が未だ生きていると、世間にとられえられたかもしれない

何より、闇の書による遺族達からすれば、憎い仇達がなんの被害も
被ることなくのうのうと生きているなどと知れば暴走しかねない

人の感情とは得てして御しがたいものである

だからこそ、彼女の消滅により感情の落としどころが出来たのである

『闇の書の管制人格』が消えることで、
リンフォースの消滅を以てこそ、初めて『闇の書の被害者』とし
て、八神家に平穀が戻るのだ

（・・・胸くそ悪いが、どうしようもない、か・・・うん、だつて
俺ザファイーラだし。盾張るしか能無いし・・・クッ（泣））

ザファイーラは、奇跡に奇跡が重なつて導かれたような、不確定極ま
りない綱渡りのエンディングを迎えるため、下手な干渉はしないこ
とにした

何故なら彼はザファイーラだから

原作介入のロマンはスルーした

そんなことを考えていたら、とあることに気づいた

セーフィー、俺、魔法って使えるのかな?

彼は魔法を使っての戦闘を知らない。

記録として『識つて』はいるが、『体験』したことはないのだ
今までの1ヶ月、居心地が良すぎてついそつとを忘れていたら
しい

(・・・までよ、十月に入つたらリンカーノア集めまくるんだよな
・・・?)

チヨ、ヤバイ! ヤバイヨコレ! (練習・・・そだ! 魔法練習しな
きやー? 死ぬるー! 大!! ブズに食われて死ぬるー!)

本当に今まで考えていなかつたようだ

眼前に最重要課題を突きつけられた彼の頭は、久しぶりにメダパー
状態だ

「・・・イーラ? ザフィーラ? どないしたん?」

「・・・またザフィーラが変になつた

「ハツ!...」

聞こえてきた声に頭を上げるザフィーラ

するとはやてどヴィータが彼の顔をのぞき込んでいた
知らず知らずのうちに頭を抱えて悶えていたらし

わつきのことは、後で誰かに相談して何とかしようと思ひ、とつさ
に取り繕つことにした

「ああ、い、いえ、大丈夫です。何でもありません、主」

「ふうん・・・」

はやては何とか誤魔化せたようだが、ヴィータの視線がイタイ
ちょっと前に受け入れてもらえて嬉しいとか言つていたのに、早く
もザフィーラのガラスハートはブローケン気味だ

「それより、そろそろシグナムも帰つてくるから、晩御飯の用意し
よか」

「おうー半伝つよ、はやてーーー」

「おー・ヴィータはえらい子やなー」

「へへへ・・・」

頭を撫でられ喜ぶヴィータ

はやてに撫でられるのは嬉しいらしい

ザフィーラが時計を見ると、既に五時を回っていた

フウ、と、一息つき立ち上がる

「私も手伝いましょう」

「お～、ザフィーラもか。えらいで～」

撫でようとしてくる主の車椅子を押しながら、ザフィーラはキッチンへ向かう

そこではシャマルが既に調理の下揃えに入っていた

今日のメニューはカキフライであるようだ

夕食を終え、皆思い思いに過ごしている中、ザフィーラは先ほど考えていたことを思い切って相談することにした

相手は勿論、我らが烈火の将・シグナムさんだ

先ほど風呂から上がったばかりで、濡れた髪や火照った白い肌が、普段の八割り増しで色っぽい

何より、夏場なので上着が薄手のTシャツ一枚だといつことが、素晴らしかった

うほつ、いいオンナ！と言ってしまいそうな自分を抑え、ザフyllラはシグナムを誘う

「シグナム・・・少しいいか？」

「ん？ なんだ、急に？」

一応魔法、しかも荒事関係であるため、すぐそこでヴィータとゲームをしているはやてには、なるべく聞かせたくない

ザフィーラはつい、と田でベランダを示して立ち上がり、シグナムも理解したのか、それについて行く

「て、わざわざ席を外してなんの用件だ？」

七月の夜風がさわさわと髪を撫でる

今夜が満月と言つたりもあり、ベランダに立つシグナムはまさしく「月下美人」という言葉がピッタリだった

話がまた逸れつつあると、雑念を振り払い、ザフィーラは切り出した

「・・・シグナム、今の生活をどう思つ?」

「それは・・・ああ、確かに、初めは戸惑いもした。今まででの主の下では考えられなかつた生活だ。・・・だが、主はやてに巡り会えたことが運命だとするならば、私は神に感謝している・・・」

シグナムは、いきなり何を言い出すのかと面食らつたようだが、しかし、次第に穏やかな笑みを浮かべていきながら、そうのたまつた

つまり、幸せであると

そう、その眼が言い切つていた

それはザフィーラも心から感じている

未だ一ヶ月足らずだが、下手をすれば世間の世知辛さに揉まれた前世よりも、心地良い生活だ

だからこそ、彼は最低限『原作』を辿れるように足搔いていり いざという時に、『原作』すら辿れない体たらくは御免だった

「ああ、私もつづくつづく思つてこる・・・だが、このままでいいのだろうか?」

「・・・何?」

シグナムはザフイーラが一体何を言いたいのか解らず、訝しげだ

「我々は戦いから遠ざかりかけてはいないか？」

「……ザフイーラーお前は主はやてが示してくれたこの道を護るにする気かッ！？」

争いを求めるようなザフイーラの言葉に立つシグナム
その視線は今にも斬りかかるばかりだ

ザフイーラは違う、と、首を横に振り言葉を続ける

「この生活は心地良い。
しかしそうでは無くなつとも、主はこの身に掛けても守り抜く・
・それは変わらない」

「……」

シグナムは彼の言葉を黙つて聞いている

「だが、今までの主は、全てと云つてこいほど『闇の書』を端とした戦乱に身を置かれていた・・・主はやてが争いを好みやつと、遠ざけよつと、何時かは巻き込まれる気がしてならんのだ」

「それは・・・」

「この世界は確かに平和だ・・・しかし、シグナム。お前も感じただろう、ここに来た直後にこの街に漂つっていた魔力を？」

漂っていた魔力 ぶっちゃけフェイトそん達が海やら空やらで力チ合いまくつた影響なのだが、ここは如何にも不穏な要素である様に言つておく

シグナムはそれに心当たりがあるのか、少し考え込む

「……魔法文明の無いこの世界とて不穏な気配はある……いくら私たちがそこいらの魔導師如きに不覚を取らないとは言え、万全を期すべきだと、そう感じたのだ」

言い終えるとザフィーラは瞠目し、押し黙る
語るべきは語つた、と、泰然とした佇まいにベランダの端に立つ

（……とつあえず、これで流れは掴めたかなあ……？あとは、ツメをウマくやれば……）

が、内心は泰然とはいがず、ある意味綱渡りドッキドキ状態だ
後はシグナムの反応を待つばかりだが……

そう、今までの会話はザフィーラのひたすらに回りくどい、とある

計画の一部なのだった

名付けて『ザフィーラ天元突破作戦』
干のイタさを感じるが である

ネーミングセンスに若

歴戦の兵たるザフィーラが戦い方を忘れるなどあるわけ無いし、
そんなことを言つたらこの一ヶ月で何とかモノにした『新・ザフィ
ーラ』という立ち位置を疑われるかもしね

なにせ初日に『ザフィーラといつ存在は変わらない』と言つてしま
つたからだ

これでうまいこと戦えないと知られると

『ザフィーラが戦いを知らない?』

『そんなバカな? 彼は我らと同じく歴戦の兵だ・・・』

『ならばお前は何者だ・・・!?』

『一ヶ月だまし通していたな! この偽物が! 問答無用! 斬り

s (r y)

・・・bad endの危機再びである

それは勘弁してほしいので、ザフィーラはこんな回りくどい方法で、
それとなく魔法を使える環境をシグナム達に認めてもらえるように

し向けているのだ

後は魔法のトレーニングが出来るような世界に行くなり、結界なりで何とかする

これが晩御飯のカキフライをほおばりながら思いついた計画の全貌である

ここは人外魔境の海鳴市、下手に魔法を使えば地雷を踏む可能性があつた

ここまでだと鍛錬場所の確保しかできないのだが、それすらも一苦労だ

ザファイーラはこの世界全てに細心の注意を払つ心がけだつた

バタフライ効果で知らない展開になられても困るし、何より、『彼』は心配性なタチだった

しばらく目線を下にやっていたシグナムが顔を上げ、先ほどの強ばつた顔を弛めながら口を開き

「確かに、一理ある、な。今までも不覚をとる愚など犯さないが・・・常に外を意識しておく必要もあるとも思つ。主はやてのお側に長くいるヴィータやシャマルよりも、私たち二人が気を

回すべきことだな

(イヨッシー乗ってくれたか!?)

「だから、ザフィーラ。緊張感を無くさない為に、たまには仕合でも行うか? 勘も鈍らせないし、いい刺激になる。そういうことだろ?」

サラリ、と、仕合を持ち掛けってきた

(・・・えつ? 予想Gローデス・・・って、えつ? 今なんて!?)

『たまには魔法を使わないと勘も鈍るだろ?。時々トレーニングしよ!』

みたいなことを期待していたザフィーラからすると、一足跳びどころか大ジャンプな返答だった

(仕合!/?模擬戦・・・だと!/?こんなところでバトルジャンキー発動しちゃつた――ッ!?)

確かに、先ほど彼の言ひ回しでは

『最近戦つてなくないか?』

と行つただけに等しく、
シグナムにとつては

『最近戦つてないから、俺と模擬戦 やらないか』
と変換されたらしい

ザフイーラにとつては大きな誤解であり、かなりの痛手だ
しかし、自分から振つておいて下手に断りつものならbade end
直行の予感しかしない

つまり、やるしかないわけで

「・・・やうだな。お相手しよう・・・」

としか答えられなかつた

(マジでこなんばすじやなかつたことばっかりだ・・・)

心中で滂沱の涙を流しつつも、表面上はクールなザフイーラを崩さ
ない

もはやスキルと化してきていた

そんな彼をよそに、シグナムは言つ

「せうか、なじみ時間が空いたときなどあるとしみつ。・・・しかし、やはり変わったな、ザフィーラ」

今日の毎間に、ヴィータから言われたようなことを再び言われた、「そ
う、か?」

「ああ、昔のお前なら、ば主の側でただ寡黙に控えていただけだつた
が・・・今みたいに積極的に何かを言つっていたことなど数える程し
かなかつた・・・」

あくまでも柔らかい表情のシグナムだが、やはり一ヶ月足らずでは
しきりか有るのだろうか?と思い、ザフィーラは聞いてみる

「・・・皆から見て、変わった私はどうなのだろうな・・・?」

「フフ、昔のお前でも良かつたが・・・今のお前も悪くはないぞ。
皆そう思つてゐるだらう。」
どちらにせよ、お前は我らが仲間、ヴォルケンリッターが盾の守護
獣ザフィーラだらう?少しごらごら変わるが、『お前』は『お前
だ』

(・・・ああ、うん、涙でそうだ)

ヴィータに続きシグナムにも、また、彼女の言い分だとシャマルも
だらう

今の『ザフィーラ』を認め、受け入れてくれている

元から居た、寡黙な守護騎士たる『ザフィーラ』に対しても、居場所を奪つてしまつたことに未だジクジクと胸は痛むが、仲間達の暖かい言葉には素直に感動したザフィーラだった

「心配するな。一月前にも言つただろう？お前がお前である限り、我らは戦友ながまだと？」

フツ、と、そう言い切るシグナム 月つき下に映える紅髪の騎士は、やけに男前に見え、思わずその姿に見惚れる

（シグナム姉さん・・・惚れてまうで・・・やつぱりザフィーラ。いくら留守番わんちゃんだらうが、お前は羨ましきる位置にいやがつたんだ・・・）

先ほど胸に覚えた痛みなんて、既に次元世界の彼方へ消え去つていたザフィーラだった

「さて、いつ仕合おうか？生憎今月一杯は道場の稽古が入つていて

な・・・

(いいやだああああ――ツ！？)

嬉々として仕合の予定を詰め始める烈火の将に、ザフイーラは声無
き声で悲鳴を上げるしかなかつた

彼は今日も流されていた

続
く

第三話 『天元突破は男のロマン、しかし私は専守防衛』（後書き）

ますます先が思いつかない

プロット? なにそれおいしぃの?.

第四話　『おおーって、なんですか?』（前書き）

大変長らくお待たせいたしました

その割には駄文も極まつており、なんと申し上げてよいのやら
心援なさつてくださいつていう方に、お詫びすると同時に、図々し
いとは存じておりますが、生暖かい目で見てやっていただければ、
幸いです

第四話　『ておあーって、なんですか?』

・・・盛れどんにわは、アナタのザフイーラです
前回、迫り来る事件に備えアクションを起こしたワタクシでしたが・
・

「ツテオアアアアッ！！」

「今を防いだか！流石だな！だが、まだ終わらん！！ハアアッ
！」

・・・新たなる脅威を呼び起しあだけかもしれません・・・

カチ込めー・ザフイーラを第四話　　『ておあーって、なんですか
?』

八月上旬・某日

月夜の会談より一週間後、ザフィーラは今、見渡す限りの砂漠に立っていた

この世界の原生生物だらつ、足の長いダンゴムシ（全長30メートル）的ななにかが遠くに見える

（ガラガラベホ・・・）

冷静を装つてはいるが、
ポタポタと汗を流しながら、汗以外の何かも流れそうになるザフィーラ

田の前には、ギラギラとイイ笑みをした烈火の将が

何故彼らはこんな場所にいるのか？

話は一時間ほど前に遡る

バイトの方が一段落着き、夏真っ盛りの海鳴を散歩していたザフィーラ

この日はヴィータとは一緒に、ゲートボールの日でもなかつたので、一人でプラツいていた

（ふいー、暑いねえ。帰つたらはやてちやんにかき氷でも作つて貰おかなあ・・・）

そんな取り留めもなことを考えながら、リーンリーンと、蝉が鳴き盛る公園をゆつたりと歩きながら家路につく

「ただいま帰りました」

「今帰つたか、ザフィーラ」

「・・・ム?」

いつもならばはやての

『おかいりいー、手え洗いやー』といつ声で迎えられたの、その日の出迎えはどうこうつけかシグナムだった

「（え?シグナムさん?）・・・珍しいな、シグナム」

「ああ、お前を待つていたとこだー。あ、行くぞー。」

「ハ?・・・いや、待つた」

そして至る、現在

まあ要約すれば、

家に帰るやいなやシグナムに拉致・・・もとい連れてこられたのだ

（ひつやいら剣道場とのすり合わせが済み、シグナムに時間が出来たため模擬戦を実行しようと相成つたらしく）

結局シグナムの熱意に流されてしまつた形にはなるが、一応最初の目的である『戦い方を知る』ことは出来るのであるが

（いやあ～～な予感しかしね～～～～コレ、殺されんじゃね？いや、死ねる、うん・・・）

この期に及んで、ザファイーラは後込みするばかりだった

田の前には既にやる気満々でレヴァンティンを抜刀し、騎士甲冑を着込んだシグナム

やはりザファイーラの言つたように、戦闘から離れていたこともあり、模擬戦とはいえ久方ぶりの仕合に血が騒いでいるのだろう

（アレ？はじめの目的って『魔法つてひつやつて使うんですか～？』みたいなことを聞く予定だったのに・・・今にも殺仕合始まりそう

【ロシア】

な雰囲気じゃね……？アレ？何を間違えた……（

「セレ、ここならばいくら暴れようが問題あるまい。わざわざシャマルに頼んで探した甲斐があった。存分に仕合おうか」

お馴染みとなつた、

外面クール内面メダパーを繰り広げるザフイーラを余所に、シグナムは臨戦態勢に入る

彼は魔法有る無しに関わらず、戦いを知らない

知らないからこそ魔法から訓練しようとシグナムに相談したのだ

それをいきなりシグナムという絶対強者との模擬戦から、と言いつのは些か酷であった

だがしかし、元はといえば自分から言に出した」とでもあり、
流石に相手をするしかないと開き直つた

（ ツアアアアア！？もつつー？やるよつー？死ぬなりやつ
て死ね！だ！・・・・・でもなあーーーつ！？ ）

そう考えてみた割には無言のままのザフイーラ

最近でこそ外面の逞しさに引っ張られ気味ではあるが、中身の本質
はヘタレであるのだ

そんなザフィーラを見て、シグナムは何かに気付いたよつて声を掛けた

「どうした？まさかお前ともあうう男が臆したわけあるまい？それとも今田は都合が悪かったのか？」

え？今更聞くんですか？」と突っ込みたによつてセリフを発するシグナム

その言葉には他意はないのだろうが、踏ん切りが着くか着かないかの位置をウロウロしていた彼にとつてはいつも聞こえた

『用事を理由に帰つてもいいんだぞ、この腰抜け！』

と

無論シグナムが長年の盟友たるザフィーラにそんなこと言つて詫ないで、完全な彼の被害妄想である

だが、テンパつていた彼にはそんな思考が回らなかつた

（え？・・・イヤイヤイヤ、こいつシグナムの姉さんとも言えど、

「……」
「それで言われちやあ黙つとれんよ……意地があんだろー? 男の子にむかーーなあー君島アア!…」

「……問題ない、始めよ!」

勢いに任せ手甲を構え、原作でお馴染みの騎士甲冑を展開
往年のダヤンフを(心中で)叫び捨て、シグナムに相対したザフィーラ

シグナムはそんな彼に満足そうに、鷹揚に頷く

「フッ、セウ!」なへてはな。では、往くぞ!…」

「心ッ!…」

正眼に構えたレヴァンティンを振り上げ、そのまま弾けるように『空中』を踏み蹴つ迫つてくるシグナム

「う、『空中』を踏みしめた

（ うあああー!…空ひじりせりて飛ぶんだよーー!… ）

威勢良く応じたは良いものの、基本的な飛行魔法からダメなザフィーラだった

瞬く間に刃との距離は縮まっていく

ザフィーラはまだ地面に足を着けており、シグナムは既に飛んでいる完全な上空からの襲撃だ

上からの斬撃など、普通の生活を送ったことしかない人間には防ぎようもないわけで、しかし、ザフィーラは手甲を上に突き出し、刃筋を逸らして受け流した

(つて、あれ・・・?)

シグナムの太刀筋を受け流す『行程』が頭の中に浮かび、無意識のうちに体が其れを『実践』する

文字通り、自然と体が動くのだ

彼が『ザフィーラ』の『記録』を初めて『観た』ときと似たような感覚だった

ピキュイーン!と、

さながら一コータイプの如き直感で、ザフイーラは『それ』が何であるか悟った

(つまり……これは『ザフイーラ』の経験、か?)

数千年の長きに渡り、守護獣として主を守り戦い続けてきた『ザフイーラ』である

『体に染み着く』というレベルに至るまでに『ザフイーラ』としての『護りの戦い方を磨き上げてきたのだろう

共に戦い、共に鍛えた仲である戦友シグナムの刃筋など、何度も『体験』しているのだ

受け流すなど造作もない

(・・・フ、フ、フハハハハハハア！？動く、体が動くぞ！？さすがはザフイーラ！ええカラダ（ボディスペック的な意味で）じとるやないか～いつ～！）

これは戦える！と断じて、ザフイーラは一気にテンションが上がった
やはり単純思考だった

「ハアツ～！」

ギャリ、ガキン！

受け流されたことなど物ともせず、返す刀で再び斬撃を繰り出すシグナム

それに対し、片手の掌に張った障壁で受け止め、反対の手でレヴァンティンの腹を殴り刃を逸らす

今、彼は『障壁を張る』という魔法を使したことになっていた

（魔法使える！…ヤベッ、無意識にカラダ動くつてそこまでできんの！？さすがリリカル世界！ご都合主義有り難あおおおう…）

外面には反映されないものの、更にテンションをあげるザフィーラ

幾度かの剣戟を逸らし、弾き、防御していくうちに、この模擬戦に後込みしていたことなど忘れ、『戦えている自分』に何だか楽しくなってきていた

しかし、彼は失念していた

「まだまだッ！」

「フツ、効かん！…」

一度距離を取つたシグナムの、再びの突撃から来る剣戟を受け止め
よつと障壁を前に出し

パキィイイン

碎かれた

「ツー！？（ちゅ、まつ、えつー？）」

ザフィーラとシグナムでは、根本的なスペックに圧倒的な差があることを

ズドムツ！

「ふつぐおーーー？」

障壁を碎き壊える」とのないシグナム渾身の一撃は、見事にザフィーラの脇腹に叩き込まれた

本来のザフィーラであれば歴戦の勘や推測で何とかなつたかもしれないが、今の『彼』にそれはまだ無理な話だった

（・・・イツツツテテテ！？・・・やつぱ、戦いはそんな、に、
甘く、ない、か・・・ガクリ）

激しい痛みと、吹き飛ばされる体の中、ザフィーラはそんな当たり前のことを悟っていた

「だ、大丈夫か？だが、お前ならば今程度の剣閃ならば・・・」

シグナムが何か言っていたが、ザフィーラにはそれどころじゃない（ああ、痛い・・・帰りたい、あつたかいハ神家に・・・ヴィータちゃんに癒されたい・・・）

吹き飛ばされ、砂漠に仰向けになりながら現実逃避真っ最中のザフィーラ

一発イイのを喰らつただけだが、彼の精神力はもうゼロよーな、状態だった

何でこんなことをしているのか？
別にやらなくともいいんじゃないかな？

どうせザフィーラに活躍の場なんかないんじゃない？
努力するだけ無駄じやね？

と、思考がネガティブにスパイナル

しかし 思い至る

（・・・いや、スペックはそこそこしかなくとも、出番は少なくて
も・・・やらないきやいけない場面は確かにあるんだよな。それに、
このままじゃ『盾』なんて名乗れないし、スゲー癪だ・・・クツ、
はやでちやんに癒されたい！…）

なんやかんや言いながらも使命的なモノに駆られ、ふりふと立ち上
がるザファイーラ

倒れてから思考、立ち上がるまで、この間僅か四秒

なかなかの早業である

シグナムに座しまれることはない筈だ

「・・・ウム、問題ない。不覚をとった」

「大丈夫かザファイーラ？」

「ああ、この程度で音を上げては主の『盾』など務まらん」

「フツ、そうだな・・・では、続けよつかッ！…」

立ち上がり、「キ」キと首を鳴らしながらのたまづザファイーラ、
シグナムも言い終わるやつなや再度呐喊

模擬戦は仕切り直された

初めての模擬戦から一週間が経過した

「ツテアアアアツー！」

ビュオツ、と、空を切りザフィーラの拳がシグナムの懷を捉える

「甘いツー！」

しかしシグナムはそれをどうこいつするでなく、一步引き下がると同時にレヴァンティンを突き出し、返す剣戟をザフィーラの右肩へと繰り出した

それに反応するように、一枚に重ねられた青い障壁 ザフィーラの盾が展開され、刃を弾く

と、同時にその盾が前に迫り出し、さながら某白い悪魔のアクセルシユーターの如くシグナムに迫り『飛んで行く

そう、盾が『飛んで行った』のである

一体何故この様な技を考えたか？

それは、鍛錬一日目・・・つまり一週間前のある日に結局はなんや
かんやで、シグナムにボコボコにされたことに起因する

『ふう・・・今日は良い鍛錬だったな、ザフィーラーお前の言った
とおり、やはりたまには感覚を研ぎ澄ませるものだ』

『あ、ああ、うむ・・・（グヌウウ、痛いよう、シグナム姉さん容
赦ねーよう・・・）』

『さて、そろそろ主はやつての下へ帰るところ』

『うむ・・・（これは、なんとかしないと死ぬる・・・）』

ザフィーラはこの日、家に戻った後考えた
アニメにおいての役回りもあつたのだろうが、

『何故ザフィーラは盾しかできないか？』

と云つて云つて云つて

同じ狼系のアルフはバリアブレイク、つまり彼の対極の特技を持つ
ていた

それの対になるためのザフィーラなのだろうが、彼としては

『余り者・犬同士くつついとけよ』

といつよつにアルフと番にされるのだけは『ゴメン』だった

いや、アルフはアルフでワイルドな色気とか、バインバインな胸とか、むしろ好きな〃・・・話が逸れた

つまり、何が言いたいかというと、

『ザフィーラの攻撃手段は肉弾戦以外にないのか?』 ということだ

『（盾は硬いんだよなあ・・・あの後気合い入れて張つた奴は殆ど壊されなかつたし・・・やつぱりパンチとキックしかねーってのが辛いんだよ・・・）』

深夜のハ神家のソファーに座り、むうう、と唸りながら考えこむ犬耳男不審だが、本人はそんなことも言つてられない

攻撃手段の貧相さ= といつよつにやられることにもなりかねない

いや、確実になる

確かに盾は硬いが、それだけでは時間稼ぎしかできない

ご都合主義万歳のオリ主的なチート魔力なんて有るはずもないのと、既存のザフィーラのスペックで手を講じなければならぬのだから、余計大変だ

しかし、ふと、天啓が浮かんだ

『（・・・あつ、そつだ。盾しかできないなら、盾を使えばいいじやない…）』

つまり、

『苦手なモノは得意なモノで補え』

更に意訳するならば、

『いつものこと盾でブン殴っちゃえよ』

と、いうわけである

本来の寡黙なザフイーラなら、「主を守るために在ればいい」とか言つて攻撃なんか積極的にはしなさそつだが、今の彼は違う
どちらかといえば守りこなすことには好きだが、
折角使える『魔法』という未知のだから、少しほ工夫して色々や
つてみたいのだ

求めるコンセプトは『攻勢防御』

戦い、護り、打ち倒し、守り抜ける、そんな『魔法』を彼は研究す
ることにした

ぶつちやけ思う存分男のロマンを探求したかったのだ

ジのコンセプトの下、ザファイーラはシグナムとの模擬戦を重ね、この技の実用にまでこぎつけたのだ

荒事嫌いの彼が自ら模擬戦を申し込む辺り、初めの目的とか完全に吹き飛んでいるらしく、かなり『魔法』の運用にのめり込んでいた

幸い『ザファイーラ』というボディのスペックでの再現も可能で、『飛ばして相手を追尾、そのまま攻撃、牽制、防御と使い分けることのできる盾』を完成させたわけである

名前はまだ無いが、

『攻勢防御』を体現した技だと言えた

そして、場面は再び戦闘へと戻る

迫り来る一枚の盾を巧みにかわし、シグナムは魔力を足に込め、空を蹴りザファイーラへと距離を詰める

ザファイーラは臆すことなく手甲を前にかざし、ギリリ、と拳を握る

その手には、拳大の一重障壁

「ハアア、ゼイツー！」

下段から切り上げてくるシグナムの剣を 真っ向から『殴つて』受けた

これもまた、『攻勢防御』の一つであり、元々強靭なザフイーラの体躯を、更に強化することに成功した

「フッ、まだだ！」

剣を止められることは判つていたらしく、シグナムはすぐさま一の太刀を繰り出す

と、そこへ先程かわした一枚の障壁がぐるりと回つて戻つてくる
その障壁はそれ自体が回転しており、手裏剣の「」とく飛び回る
(イメージは某龍玉のクリンの気斬)

咄嗟に太刀を翻し、一枚の迎撃に当たるシグナム

だが

「『炸裂』……」

ザフイーラの叫びとともに、一枚の障壁は魔力素となつて光を放ち
爆発する
(イメージは某運命のブローン・ファンズム)

「ツー? グラフ! ...」

シグナムは爆発の余波に一瞬怯むものの、さすがは烈火の将すぐさま体制を立て直し、爆炎に阻まれた前方に意識を向ける

しかし、時既に遅く

「・・・私の、勝ちだな」

ピタリ、と、懐にまで接近していたザフィーラの拳が、彼女の喉元に添えられていた

「・・・ああ、今回一本取られたな」

シグナムは意外そうに、それでいて少し悔しそうにフフッ、と笑みを漏らす

今日は久しぶりに、ザフィーラがシグナムに競り勝った

模擬戦とは言え、中身は素人同然だったザフィーラが、歴戦の勇士から一本奪つたのである

この一週間で、彼はかなりの戦い方を身につけていた

戦いを終えた二人は海鳴に戻るべく、転送陣の準備をしていた。用意していたタオルで汗を拭きながら、シグナムはザフィーラへと話しかける。

「しかしやはり意外だ」

「どうした？」

「お前から戦いを忘れるなと言い出したかと思えば、今までにない戦い方を編み出してくれる・・・盾の守護獣にしては攻撃的じやないか」

「ふむ・・・」

転送陣の設置を終え、ザフィーラは少し考えてから、言葉を選んで答える

「守るとは、ただ受け身に回るだけでは務まらんからな」

「まあ、そういうだな」

「故に、前に出る『護り』を講じてみたが・・・烈火の将として、どう見た？」

シグナムはそう問われ、僅かに思案する。そして、きつぱりと言い切る

「実を言えば、いささか粗い」

「やはり、か……」

ザフィーラは内心解っていたことだが、やっぱり少しテンションが下がった

まあ三週間やそこいら訓練したからといって、元来専守防衛型のザフィーラが攻撃特化になれる筈もない

striker'sの辺りでザフィーラの魔導師ランクはA+、シグナムはS-だった

守護騎士ならば簡単にランクは変わらないだろうから、今の時点でもそれだけの差が開いているだろう

そんなシグナムから一本取れただけでも金の字なのだ

「……だが、それでいいだろ？ お前は今まで堅固な盾でしかなかつた。そんなお前にいきなり追いつかれたら、将たる立場の者として少しやりきれなくなる」

「ヤリと笑いそう言つてくれるシグナムに、ザフィーラは一寸ボクンとするも、答えるようにニヤリと笑う

「 では先ずの田標は、一回に一回は一本を取ることだな

「ハツ、中々言つてくれる。私とて簡単に遅れは取らんぞ?」

フフフフ・・・と、後を引くよつた笑みを残しながら、二人は主の待つ我が家へと帰つて行つた

「ほんなら、ヴィータ、お風呂行こか?」

「おうひー。」

「あつ、はやでちゃん、私もお手伝いしますね

「えー! ?シャマルも入るのかよ! アタシだけで十分だつて! 」

「はいはいヴィータ落ち着いてな。じゃ、三人で入るか?」

「もう・・・はやでがそつ言つない

「ヴィータちゃんたらもう・・・」

夕食 メーコーははやて特製冷やし中華 を終え、風呂や何やと姦しく騒ぐ三人を後目に、ザフィーラは自分専用湯飲み（青いわんこの柄が入った渋い配色の瀬戸焼。はやて購入）で食後の衣服と洒落込んでいた

「ふう・・・やはり日本茶とは良いものだな」

向かいの席ではシグナムが同じく専用湯飲み（白地に『侍』一文字の瀬戸焼。はやて特選）を持って茶を啜っていた

「ふむ、そうだな。」の国はベルカとはあらゆる面で異なるが・・・存外、馴染むものだ。（まあ、中身は純粹根っから日本人だものー！）

「・・・本当に、まるで昔から」の地に居たかのよつだ

シグナムが過去を思い起すよつた瞳で虚空を見やる

まだまだ数ヶ月程度だが、血と闘争から離れて暮らした価値ある数ヶ月に思いを馳せているのだろう

そんな憂いを含んだ目線もたまりません！
やはり美人はすばらしいとザフィーラは思った

だが今此處で展開されそうなこれはシリアルな空氣

表情にはおぐびにも出でず、湯呑みを置き一息つく

「確かに、私もそつだな。」の地は、今までのジの世界よりも寛容で　　人心地が良い。（まあ日本だし、リリのだし、海鳴だし　　ねー）」

ザフィーラの言つ『今までの世界』とは過去の主達を見た『ザフィーラ』の記録であるが、そのどれもが血塗られていた
そのことを鑑みれば、アニメ本編の扱いは騎士達にとって良い意味で『異常』だつたんだと理解できた

そりやあそんな場所を『えてくれたはやてにゾッコンにもなるだらつ

（・・・にしても、かなり地域に密着してゐよな）。まあ原作キャラには会つたこと無いけど

思えばシグナムは近所でも評判の美人さんと呼ばれるになつたし、
シャマルは朗らかな若奥さんとして近所さん達に認知されている
ヴィータはゲボ子（ゲートボールに勤しむ女の子。略してゲボ子）
としてジジババに大人気な近所のちみつ子扱いだ

ザフィーラ自身も日雇いガテン系のバイト関係やヴィータの保護者としての老人会の方々との関係を考えてみると、すばりしへ海鳴に溶け込んでいふと言えよう

それらに影響されか、図書館と病院ぐらうしか目立つた外出の無

かつたはやても、積極的に外に遊びに行くよつにもなつた

ヴィータやシャマル、明てるときはシグナムやザファイーラをも連れだしてピクニックなどに行くよつな、アグレッシヴ車椅子美少女と化していた

下手をすれば原作の田じやないぐらい社交性の高いハ神家である

（あれ？大丈夫、だよね・・・？はやてちやんも高町さんとかと仲良しになつてないよね？）

自身の『犬化、ダメ、ゼッタイ』計画から始まつたバタフライ効果で、そういう事態も引き起こされてるんではないかと不安を感じたザファイーラ

幸いこの数ヶ月は魔法関係は音沙汰ないので、まだ大丈夫だろうが・

（ん？魔法関係？・・・グレアムさんちは、ちよつかいかけてこないよな？なら、まだ原作のシナリオの上・・・？あー、ダメだ、考えれば考えるほどマイナス思考のデフレスパイナル！！）

「ザファイーラ？」

シグナムは、湯呑みを置いたと思えばほっこりと笑い、しかし急に冷や汗を搔きだし、終いには頭を搔きだしたザフイーラに視線を向けた

しかしそこに怪訝な色は含まれていない

高頻度でこゝなるものだから、シグナムを含めた女性陣は、既に慣れっこになってしまったのだ

『クールで寡黙、しかし前よりフレンドリー、しかし時々変になる

と言つのが、周りからの現状のザフイーラの評価だ

「（ハツ！オウフ！またトリップしかけてた！？フウ、危なひ危なひ）・・・スマン、何だ？」

そんなザフイーラに、シグナムは軽く息を吐き、もう一杯茶を注ぎながら言つ

「ふう、最近は変わったかと思えば、上の空へいや、思考の海に漫る」ことが増えたんじゃないかな？」

「・・・ムウ、そうか？」

「まあ、昔から寡黙な奴だつたからな。しかし、時折見せる変な動き、あれは何だ？」

（・・・恥ずかしい限りです）

そう問われザフィーラはなんか恥ずかしくなつてきた

無意識の奇行を突きつけられて狼狽えないほど、彼の中身は肝が据わつてない

そこで彼はハツとした

原作のザフィーラは堅物すぎる

堅物キヤラは、高町兄や真つ黒黒助提督が既に居る

（・・・まあ、『お茶目なザフィーラ』もキモイッスけど・・・）

まあ、少しばかり堅物からの脱却をはかりつつ

目指すはウェットに富んだジョークを吐けるダンディズムザフィーラだ！

取りあえず軽くジャブから。

そう考え、ザフィーラは片目を閉じ、人差し指を顔の前に近づけ、言い放つ！

「禁則事項でつす」

「・・・は？」

何が起ひた？ と尋ねながらにわよとさせたシグナム

空氣がなんとも変なことになつた

静寂を切り裂き、ザフティー立上がる

「・・・う、む。 うむ。 さて、主等が湯浴みしてこの間に目を洗つてよい」

「あ、ああ・・・」

そもそも湯呑みを立上がるザフティー

シグナムはその牋中をぱくぱくと皿を瞬かせ、ポカンと見ていた

と、おもむりにその顔に笑みを形作る

「・・・クツ、クツクツ。奴も、冗談を言つようになつたのか・・・

「

その眼差しは、仲間の一人の変化が、改めて悪いものではなくて良かったと節に語っていた

まあ、意味はよく解らなかつたが

この日、ザフイーラの評価に『冗談のセンスも変』が付け加えられた

(ヘタこいた―――つ!)

負け犬、ならぬ負け狼の心の叫びが、夜の八神家に響いたとか響か

なかつたとか
・
・

続
く

第四話　『ておあーつて、なんですか?』（後書き）

なんか、繫^つきなのか日常なのか、なんなのか分からぬ話ですよね

力量が足りな^れぬ^れる・・・

第五話 『とあるメガネとマイオーラ』（前書き）

ウホッ、いいザフィーラ・・・

つて、考えてたら、こんな話に

いや、ノンケでも食つちまわないのでよ、うちのザフィーラは

第五話　『とあるメガネとイイオト』

はるー、えぶりばでー！

毎度おなじみザファイーラです

原作とは全く掠りもしない（ザファイーラなんてる時点で関わりまくってるとか言うな。ハ神家はキャラじゃない！家族だよっ！）『氣ままなザファイーライフ』海鳴を過ごしてきましたが・・・

「あのー、お兄さん、聞いてます？」

「・・・ああ、うむ」

まさか記念すべき原作キャラの一人目がこの娘だとはのう・・・

「いよいよーしー休憩だあーお前等、昼飯行くぞーー！」

「「「ウイイーつすー！」」

学生達は夏休み真っ盛り、しかし社会人達には休みなど無縁な八月某日

炎天下の中、とあるビル建築の工事現場では、昼時と言つゝとて休憩を執つていた

「ふう・・・」

「うーーい、ハ神ーお疲れさんー！」

「つす、お疲れ様です、親方」

その中に、我らが盾の騎士、ザフイーラの姿があつた

青いツナギに、褐色の肌が映え、犬耳は黄色い安全ヘルメットが覆い隠してくれている

万が一ヘルメットがはずれても、下に手ぬぐいを巻いているため、『犬耳をつける変態さん』の称号を頂くことはない慎重仕様だ

ザフィーラは、良い汗を流していた

元来デスクワーク派だった『彼』だが、今のボディのそこ知らずの体力を振るえることが、存外に労働意欲を高めていたのだ

ザフィーラは家族の為に、少ないながらもお金を稼ぐという行為が尊いものだと、改めて実感していた

決して前世がもやしだったからウハウハになっているだけではない

坦いでいたスコップを地面に突き立て、ザフィーラが首から下げたタオルで『イイ汗かいた！』とばかりに汗を拭つ正在と、現場監督、通称『親方』から声をかけられた

ザフィーラはここでは『ザフィーラ・ハ神』として、日系一世のハーフと認識されている

『日本の親戚を訪ね、遙々海外から海鳴に移住してきた生真面目な青年。現在は居候先に少しでも貢献するためこうして汗水流している』、という設定だ

なのでみんなからの呼び名は、大方が『ハ神』、少数派で『ザフィ

やん』である

ザフィーラとしてはこんな色黒でガタイのいい男らしい男を、『ザ
フィやん』と軽く呼べる現場の仲間達に軽く戦慄したのだが、『みん
なには内緒だ

閑話休題

「八神は、今日はシフト午前だけだつたよな？」

「うす、昼上がりの予定です」

「やつかーよし、もう上がつていーぜー後は任せなー！」

「うす、ありがとうございますーお疲れ様つした！」

「おつーお疲れ！」

ノリが体育会系である

クールな彼ならば有り得ない暑苦しいスタイルだ
ヴィータやシグナムがみたら大層驚くこと間違いない

この職についてより数ヶ月、すっかりガテン系の職場に紛れ込んでいたザフィーラだった

（あ～、あつちいなあ～・・・）

皆に挨拶をすませ、職場を後にしたザフィーラは、海鳴町を歩いていた

着替えても結局汗だくになるため、格好は先ほどのままツナギにであり、ヘルメットだけがバージされていた

ミヤンミヤン、ジリジリとオーケストラを開催しているヤマ達に更に暑さを煽られながら、ザフィーラは右手に提げたものを見る

（どこので食おつかなー、コレ）

コレ、とは弁当箱であつた

そう、ハ神家家長たる、はやて謹製の手作り弁当だ

ザフィーラが働くよくなつてから、わざわざ腕を振るってくれて

いるのだ！

今日は昼上がりであることを伝え忘れていたため、朝に間違えて作つてもうつてしまつたのだった

しかし、絶品であるため、食べないといつ選択肢はない

それほどまでにウマイ

（ほんま、えー子やでー、はやでちやんは。あんな嫁さん欲しいよなー・・・いやいやいや、光源氏計画はいかん、いかんよ君ー若紫、若紫イー！ー）

暑さで頭がやられそうになつて、『ザフイーラ

しかし頭の手ぬぐいは外さない

外したら『犬耳ピコココ』にちは、あらあら変態よ、ママー、口ワイ、ヒソヒソ・・・『コース直行だとザフイーラは思つてこるからだ

まあ変身魔法の応用で隠せるのだが、ザフイーラは今一完全な人型になりきれないでいたのだ

暑さに耐え忍ぶ思考の中で、ザフィーラは昼飯をどこでとるか考えた

別に帰つてしまつてもいいのだが、せつかく弁当を用意してももらつたのだし、屋外で食べたい気分だつた

ふと、思いついた

(もうだ、公園いこう)

単純に、木陰を求めてザフィーラはたまたま一番近い海鳴臨海公園に向かつてしまつた

そこが、『原作』きつてのイベントスポットであることは、
彼の頭からきれいさっぱり抜け落ちていた

海鳴臨海公園にて、ザフィーラはベンチに座り弁当を広げていた

日差しは未だ力強いが、ざわざわと揺らめく木陰と、高台特有の海から吹き抜ける爽やかな風のお陰で、幾分涼を得ることができていた

「さて……いただきます」

蓋を開けると、中には色々と盛りのおかず達、ふつくりな白飯、添えられたフルーツといつも対面

暑い中でも食欲を失わないよつ、夏野菜など旬の食材が工夫され詰め込まれている

実際にウマそうだ

（やっぱ料理できる子つていいよなー、うん。これがまさか九歳児による一品だとは思えるだろ？）いや、無い（反語）！

埒もないことを考えつつも箸を進めるザフイーラ

そんな彼に、声をかける存在がいた

「あーあの時のお兄さんー」

「（むべもべ）・・・「んっ」

ザフィーラが顔を上げると、そこにはメガネと三つ編みが特徴的な、どこかで見たことのある少女の顔があった

「（あるべー）のトビツカ）・・・顔は？」

「えー、覚えてないですか？私、先週助けていたいたんです。こんな感じでまた会えるなんて！あの時はありがとうございました！」

ずっとお礼を言いたかったと、ここやかに笑つ少女

先週、ところが、ザフィーラの中で一つの出来事がヒットした

「・・・ああ、あの土曜日のか」

「はー、それですー本当に、あの時さきりんとお礼も言えないです
いませんでした」

少女は、ぺこりと頭を下げる
見たところ高校生ぐらいだらつ
三つ編みメガネのせいが、文学少女的な印象が強い

いや、先週の事態を見るに、実際に文学少女なのだろう

わへ、ijiで気になる先週の件とは？

それは週のじと六日ほど前

炎天下、ザフィーラはビル街を歩いていた

ジーリジーリミーンミーンカーンカコーンプロロロロ・・・

（あつひこ・・・溶ける、ザフィーラさん溶け出す・・・）

近隣のビル工事の音や車の騒音が、BGMとして更に暑さをかき立てる

すこし奥まつた閑静な住宅街、つまり八神家の付近はそういうでもないが、いぐり海鳴とはいえ真夏のビル街は灼熱地獄であった

この日は午後から現場の調整があるとかで、バイトは午前上がりだつたのだ

はやて印のお弁当も食べたし、早いことに家に帰らうとしていた

格好はいつも通りのツナギに手ぬぐい、
実に暑苦しいのだが、ザフィーラのポリシーなのか決して表情には
出ないので、周りから見れば涼しげな顔をしているように見えるだ
う

（これは、キャラ崩れ防止の保険なのかね・・・？世界の修正力（
笑）か？す、ぐく・・・ありがとうございます）

（お？）

ふと、横に目をやればかなり大量の本をもって歩いている少女が目
に入る

華奢な体躯だが、しかしその荷の重さに反し、足取りは軽そうだった

よく見ればかなり楽々と歩いている

取り留めもなく考えていると、横断歩道に差し掛かつた

歩道で信号を待つ人垣、夏休みでお出かけ中だろう親子連れや、ス

その中に、先ほどの少女も居た

まあ、それがどうしたといつ話であるわけだが

横断歩道で待たされ、立ち止まると空気が停滞し、余計に暑く感じる

「フウ……」

車の行き来など見ていても暑さは緩和されない
ザフィーラはせめて青空で爽やか成分を補おうと上を仰ぎ見ると

「ん・・・?」

揺らめく影が目に入る

ソレはビル風に煽られたのか、ワイヤーとの接触部がギシギシと音をあげていた

見るからに、危険だ

（どう見ても鉄骨です、ありがとうございました・・・ってー?）
れは・・・ー!?)

その瞬間ザフィーラは一瞬、ぱりに脳裏に電撃が走った、気がした

(『街中で事故 キヤー！ おつと大丈夫かい？ ドッキンゴー！ 吊り橋効果でアナタにメロリン！！』 フラグッ・・・！ テンプレ・・・！ 壓倒的、テンプレッ・・・！)

わざ・・・・・わざ・・・・・

ブジンチー！

「ナニ？」

「うわー！？逃げろー！」

「あ、危ないー！」

「ひいっ！？」

いらんこと考へてたらホントにこなわざわしだした
下の人々が氣付いたようだ

皆がパニクリながらも散り散りに逃げ出してゆく

（つと、俺も逃げねーとー！）

ザフィーラは人波に従い踵を返して後退する

ドンッ！

「うわあー！？」

「ーー君！大丈夫！ー？」

「あ？」

その声に後ろを見れば、母と切り離され、人波に押され転んだ子供
に先の少女が駆け寄っていた

彼女は今し方まで抱えていた本を地面に打ち捨て、すぐさま子供を抱き起こす

実際に素早い

しかし、彼らの頭上には已然として迫る、鉄骨

（マジでテントフレかあアーネイツ！？）

またしても踵を返し、ザファイーラは一人べと一気に距離を詰める

間に合わないと思ったか、少女は子供だけでも助けようとしたようで、その腕でぎゅっと握き抱いた

同じ様に、堅く皿を瞑つた

今にも鉄骨が彼らにぶち当たるうとした、その刹那

「（ツテ、オオアアアアア間に合えイツ！？）ぬんつ！？」

がっし、と、二人の腕を掴み引き寄せた

地に跳ね返った鉄骨で怪我をしないよう、二人をグッと抱え込む

「こひくんの動きはオートでやっています

さすがザフイーラボディ、護ることにかけては妥協しない職人の業

!!

ドンガラガツシャンピツシャンガツシャーーン!

(セヒ——ツフウ——)

紙一重で鉄骨が地に叩きつけられ、轟音と塵風が巻き起^レじた

(あ)

と、その風がザフイーラの手ぬぐいを弾き飛ばす

「（ホオアツ——！）——？」

「あ、あの、ありがとうございました・・・」

懐の存在の安否よりも自身の変態認定を恐れ、ザフィーラは一人を地面に降ろすと手ぬぐいを拾い、脱兎のごとくその場を後にした

この間五秒

さすがは歴戦の士ヴォルケンリッター

見事な撤退であつた

「あつー・・・行つちやつた・・・」

野次馬をかき分け去る背中を、少女はじつと見つめていた・・・

とまあ、こんなことがあったわけで（マジメな子だなあ……つと、そついや、この子なんか引っかかるな……なんか、思い出したら取り返しがつかなくななりそうな……）

夏なのに、薄ら寒い感覚が脳裏を過ぎり、ザフィーラはこさか不安になってきた

黙つた彼を不思議がり、少女は首を傾げる

「？あの……？」

「（フオッ！？）あ、ああ、すまない。謝ることはない。大したことはしていないわ」

「いえ！そんなことないです！私も、あの子も助けていただいたんですから！」

「（なんだるなあ、なんだ、この漠然とした不安は……）そう、か。何にせよ、ケガがなくて良かつた」

「はい。あの、良かつたらお礼させてもうえませんか？」

ここで、ザフィーラの頭にイヤな予感が過ぎつた

彼は後に語る

『ええ、この時点でも少し「ヤバい」と思つたんですよ、はい。何がつて、それは解らなかつたです。』

「やばいな」って……

頭の中の小さな警鐘を無視し、言葉を繋げる

「礼? いや、そこまでしてくれるとも・・・」

「いえ！是非させてください！私の家はこの近くで喫茶店やつてるんです。そこまでお越しいただければ！」

「さ、喫、茶店・・・!?

頭の中の警鐘が現在進行形で最大音量になつた

(海鳴・・・・喫茶店・・・三ツ編みメガネ・・・!?)

ヤバいのキター——ツ！？何でこんな大事なこと忘れてんだバカ——ツ

俺のバカ——ツ！！

この、このメガネつ娘は、『あの一族』……！（）

ダラダラと暑さ以外の要因で流れ出した汗を拭つことも忘れ、ザフイーは「ククリと睡を飲み、意を決した

「……やう言えば、君の名は、なんと言つんだ？」

「あっ、申し遅れました！私は 高町 美由紀 って言います！『翠屋』って喫茶店なんんですけど、ご存じですか？」

『高町』

『翠屋』

（地雷……踏んじやつた……orz）

こつして彼は、家族以外の『原作キャラ』との邂逅を果たしたのであった

「あの～、お兄さん、聞いてます？」

「・・・ああ、うむ・・・申し訳ないが、丁重にお断りさせていた
だいづ」

「え？」

氣力を取り戻したザフィーラは、なんとか体勢を立て直し少女
美由紀に向き直った

「こりで流される分けにはいかない・・・！」

その決意を込め、ザフィーラは思い切って断った

美由紀は一寸驚くも、すぐにわたわと手をパタつかせた

「あ、お忙しかったですか！？スママセン、勝手なこと言つて・・・

「

（ぐ、ぐぬう・・・）

善意からの言葉を断つた上、美少女にショコンとした顔をさせるのはザフィーラのポリシーに反するのだが、ソレは非常に徹するのが金である

「すまないな」

「いや、無理を言ったのはソレの方ですから」

ザフィーラの謝罪に、一ノ口と微笑みを返すメガネつ娘

嗚呼、どうしてこの世界にはいい娘さんが多数存在しているのだろう。

よつ一層心苦しさが増したザフィーラ

「なんだかお昼の邪魔もしちゃつたみたいだし……本当にありがとうございました。それじゃあ私はこれで……」

「……翠屋、と、言ったか？」

気付けば、ザフィーラは立ち去りつとしていた美由紀に、声を掛けていた

「機会が有れば、今度寄らせていただこう。その時は、お勧めでも紹介してくれないかな？」

「……はいっ……ぜひお越し下さいねー。」

それじゃーと、再び、今度は嬉しそうに帰らうとする美由紀だったが、何かに気付いたように「あ」と声を上げた

「あのー、お名前、伺つてもいいですか……？」

「ン? ああ、構わんよ。私は、ザフイーラ・ハ神だ。宜しく、美由紀嬢」

「じ、嬢なんてそんな……? ザ、ザフイーラさんですよね! あの、ホント、あらがとうございました! ……それじゃ、また! ……」

「ああ、また、な……」

照れながらも挨拶をして走り去つてゆく美由紀

ザフイーラは、そんな彼女を遠い眼をしながら見送つたのであった

(なに流されてんのよ、俺あ・・・。」)

数分前と同じベンチに座りながら、ザフイーラは一層淀んだ空気を纏っていた

昼下がりの公園に、作業着の青年がこんな空気を醸していくは甚だ場違い極まりなかつたが、ザフイーラはそんなこと気にしていられなかつた

先ほどの自分の愚行にほとほと沈んでいたのだ

(なんて約束しちゃつてんのよ、俺あ・・・翠屋突撃とか、バカなの?死ぬの?いくら美由紀ちゃんに悪い気がしたからつて・・・さつき流されねえつて決めたばっかだろ・・・くそ、八方美人な日本人体質が憎い・・・)

ハア、と深いため息を一つ

「・・・仕方ない、月が明けたら、平日の昼間にでも行くか」

そりすれば魔砲少女とはエイカウントしないだらつ

戦闘民族らしい父上殿や兄上殿にはカチ合ひつかもしけないが、少な
くともそれだけで済むかもしれない

不安は募るが、約束した手前行かないという選択肢は考えつかなか
つたザフィーラであった

「ハア・・・（わざわざと食つて帰りつ・・・）」

ザフィーラはもぞもぞと、再び箸を進めだした

（アレ、なんだらつ、なんだかさつきよりしょっぱいぞ？ハハ、ハ
ハハ・・・）

続
<

幕間之一　『高町美由紀の遭遇』（前書き）

ちょっと勘違い要素を入れたつもり

いや、そうでもないです

幕間之一　『高町美由紀の遭遇』

その日、私はその青年に惹き着けられた

力チ込め！ザフイー！『さん幕間之一　『高町美由紀の遭遇』

とある夏の日

日差しが弱まる兆しも見せず、人々が辟易する中

彼女、高町美由紀は図書館に立ち寄っていた

彼女は濫読家でもあり、見た目通りに文学少女然とした一面も持つていた

この日は実家の喫茶店に手伝いにはいる予定もなく、暇だったのだ

丁度良いとばかりに図書館へと足を運び、午前中を読書に費やした

（この本探してたんだよね～！フフフ、かえつて早速読みましょう！…）

お田町の本が入荷されていて機嫌も良く、いつもより足取りも軽く帰宅の徒についていた

彼女の手には、手持ちの鞄に入りきらなかつたその他の書籍 ど
れもハードカバーの品であり、実に重量感たっぷりな物ばかり
も抱えられているのだが、それすらも苦にならないようだ

眼鏡に三つ編みから強靭なイメージはつけない
線も細く、華奢な体躯と言えるだろう

ならばなぜ、彼女は『樂々と』歩けているのか？

こう見えても彼女は武人であった

生家に伝わる古流剣術・『御神流』

父と兄、そして彼女を含めた三人が継承する、小太刀一刀取りの剣法

その使い手として、修練をその身に刻んできた

現に、今朝も早朝の内に鍛錬を終えている

その上、いかにも文系な見た目に反し、彼女の運動神経は良い方である

彼女の末の妹とは比べるまでもなく、美由紀の身体能力は優秀といえるレベルであった

美由紀は、軽い足取りのままに歩道を歩いていた

近隣ではビル工事をしているためか騒音が気になるが、手の内にある待ちかねていた本の内容を考えていれば、あまり気にもならない

ああ、早く読みたい

華の女子高生が、夏休みだといつのに剣だの本だの、実に色気がない話ではある

美由紀自身も、恋人が居る兄や、いつまで経っても新婚気分な父母を見ているため、そういうた願望が無いわけではないのだが、

『これまで良い縁に恵まれていないのだ』

そう自分に言い聞かせていた

あまり気にしても虚しくなるだけであるし、最近はなるがままに任せようと消極的なスタンスになつていて

とまれ、今の彼女の思考は、本のことと大半が占められていた

（つと、危ない危ない）

ふと、美由紀は信号が赤になつたことに気づく

半ば意識をトバしていたため少し焦りながらも、横断歩道で待つ人垣に自分も身を列する

（・・・暑いなあ）

ジリジリとコンクリートが熱を帯び、ビルのガラスが陽光をギラギラと反射する

いくら鍛錬で鍛えられた心身だとはいえ、暑いものは暑い

美由紀は、その気怠い空気に辟易しながらも、信号が変わることをただぼうつ、と立つて待つていた

「フウ・・・」

隣で、誰かが溜息をついていた

その人物もこの暑さに辟易しているのだろう

その気持ちは良くわかる

ちょっとした共感シンパシー

少し気になつたので、その人物がどんな人なのかちらりと横を見や
ると

(おお・・・大きい人だなあ)

それは青い作業着に身を包んだ、逞しい男性
頃だろうか　　が、空を仰いでいた

身の丈は180?程だろうか?

160前後の自分と比べると大抵の男性は自分よりも大きいのだが、
その人物はそれでも少しばかり大きく感じた

恐らく捲っている袖から見える筋肉の付き方のせいだろう

父や兄も上背はあるが、どちらかと言えば細身で、鋭く研ぎ澄ました筋肉の付け方をしている

だが、隣の青年の場合はガツシリとした、逞しいと思える筋肉である。よく焼けた肌や格好から想像するに工事現場で働いている人なのだろう

美由紀の周りには余り居なかつたタイプの風体だ

「・・・ん？」

取り留めもないことを考えていると、件の青年は上を見上げたまま何事か呟いた

（なんだろう？）

美由紀も気になり、上を向こうとした瞬間

ギシリ、と、嫌な音が鼓膜を震わせた気がした

（ツー何！？）

バツと上を見上げれば、今にも切れそうな

否、たつた今切

れたワイヤーから解き放たれた鉄骨が、自分たちの頭上に墜ちてこよつとしていた

「キヤー！？」

「うわっ！？逃げろっ！」

「あ、危ない！」

「ひいっ！？」

次々と異変に気づき、散つて行く人垣

美由紀もこれは危険だと理解し、距離を取るべく足に力を込める

ドンッ！

「うわあ！？」

（ツー？）

すぐ後ろで、何かが倒れる音と、少年の悲鳴が聞こえた

その音を聞いただけで状況を理解した彼女は、次の瞬間には手に抱

いていた書籍達を打ち捨てていた

「君っ！大丈夫！？」

少年に駆け寄り、すぐさま抱き起こす
今すぐ離れないと巻き込まれる危険がある

しかし

（ツ・・・！）

剣の稽古で鍛えられた彼女の体は、理解した
理解してしまった

一旦制動を掛けてからの拳動だったため、踏み込みに1テンポ遅れ
が生じたのだ

（間に合わないツ・・・！！）

反射的に掻き抱いた少年だけでも助けようと、突き飛ばすために腕
に力を込める

それでも、彼女はただの女子高生でしかない

命の危機など、瀕したことがあるわけもない

故に、『死ぬかもしない』恐怖から、思わず目を瞑ってしまった
彼女を責められる者は居ないだろう

(ああ、死んじゃうのかな・・・?)

鉄骨が、彼女達に直撃する

その刹那

「ぬんつ！！」

グイッ、と、腕に力が掛かる

(えつ?)

力強い声と共に、自分の体が誰かの腕に包まれるのを感じた

「ゴツツシャアアアアアン！！」

（ビクシ一）

すぐ側に鉄骨が落下したと思しき轟音が響き、美由紀は思わず身を竦める

だが、痛みはない

塵風が巻き起こるも服を汚しただけで、身に異常はなかった

ふと田線を上げれば、青い作業着と浅黒い肌が田に入る

（あつ、この人……）

美由紀は気づいた

先の青年の逞しい肉体が、それから彼女と少年を庇ってくれていた、と

まるで、『盾』みたい

彼女は、そう思った

「……？」

青年が何かに気づいたような、何処か狼狽えたように辺りを見回す

その顔を、相貌を垣間見て、美由紀はドキリとした

先ほどはバンダナで隠れていたため解らなかつたが、その髪色は白に近い銀

そして浅黒い肌によく映える紅い瞳

顔立ちも端正、と言つよつは精悍な、凛々しいものであつた

一寸見入るも、すぐにはつとする

先ずは礼が先決だと、美由紀は声を掛けた

「あ、あの、ありがとうございました……」

「クッ・・・！？」

しかし青年は美由紀の言葉に応えることもなく、一人をそつと地に

下ろす

そしてすぐさま、まるで何か大切な物を今にも失つてしまつと言わんばかりの焦燥を身に纏いながら、人垣の向こうへと走り去つた

「あつ・・・・行つちやつた・・・・」

美由紀はしばらくその背を呆然と見ていた

「う、ううん・・・・」

「あつ！君、大丈夫だつた？怪我はない？」

あまりの轟音に一瞬意識が飛んでいたらしい少年の呻き声が耳に入り、美由紀はすぐに少年の無事を確認する

同じように彼の青年に護られた自分に傷一つ無いのだから、大事無いとは思われるが、念のためである

「あ、うん。大丈夫、ありがとう、お姉ちゃん・・・・」

「そう・・・ふう、良かったね」

「「ウイチーー！」

「あーー・ママシーー！」

後ろの人だから、少年の母と思われる女性が、少年の名を呼ぶ

繋いでいた手を一瞬とはいえ離したがために息子に危機が迫った

母としては辛いことだらう

少年に何もなくて本当に良かったと、美由紀は微笑んだ

「ありがとうございましたーー息子を助けていただいてー本当に・・・
・ーー！」

女性が美由紀に気づき、手を取つて深く礼を述べてくれる

「い、いえー私も助けてもらつた側なんですよーだからそんなお礼なんて・・・」

「それでもーそれでも言わせてくださいーー本当に、ありがとうございますーー！」

「……まあまつ断つす『おても良くな』

美由紀は素直に礼を受け取った

「でも、あのお兄さんが助けてくれたんです。私も、お礼もちゃんと言えなかつたんですけど……」

「まあ……その方にも、感謝してもしきれません。ほら、ユウイチ、お姉さんにもう一度ちゃんとお礼言こなさい」

母に促され、母に抱きついていた少年は美由紀に向を直つた

「うふーお姉ちゃん！ ありがと『ひー』わこましたーー！」

「えへへ、『うう』いたしましてーー」

素直な謝礼に、美由紀は照れくさくなり、軽く鼻の頭を搔いた

その一方で、彼女の脳裏には、先の青年の姿が焼き付いて離れなかつた

あれから事故現場は野次馬で溢れ、より騒然としていた

ビル工事の工員達も、あまりの失態に顔を青ざめさせながらも何度も頭を下げ、真摯な対応を約束すると言つていた

美由紀としては、確かに危なかつたがもう過ぎたことであったのでもここまで深く追求はしなかつたのだが、申し訳ないと向こうが思うなら、好きにさせた方がいいだろう

美由紀は対応を終えると、埃まみれになつていた本を拾い集め、帰途についた

先ほどの事故を目撃した周囲の人々は、少年を助けようとした少女と、

更に颯爽とその二人を助けた青年のこともしつかりと見ていた

少女の方はその場に残つたが、一番の功労者たる青年は忽然と現場から姿を消したのだ

白昼の悲劇を防いだ、その勇敢な『青い青年』

下手に謎めいている物だから、『青い青年』の噂は本人の預かり知

うぬといひで密かに海鳴に広まつていったのだった……

「はあ・・・」

美由紀は、シャワーを浴び終え、寝室のベッドに横になつていた
すでに夜の帳も降り、あとは寝るだけであるのだが・・・

「どんな人なんだろう、あの人・・・」

事故の話を家族に漏らせば、一家総出で心配された

父や、母、兄は勿論、妹までも怪我はないか、異常はないかと聞つ
てきた

確かに、命の危機に瀕したと言えばこのぐらには心配するだらう

なんといっても大切な家族なのだから

その気持ちが、優しさが感じられ、怖い目にあつたばかりなのに、

美由紀は嬉しささえ感じられた

それらは有り難いことなのだが、特に末妹からの心配は強く、不安
そうな瞳でこちらを見やるものだから思わず安心させるために言つ
てしまつたのだ

『大丈夫だよ！ ちょっと危ないかな？ と思つたけど助けてくれた人
が居たの。お陰で無傷なんだから！』

と

となれば『どんな人か？』『その人は大丈夫だつたのか？』『お礼
をしなくては』『出来れば直接礼を言いたい』と、色々話は繋がる
わけで

人が良いことが売りである高町家において、一家の一人の恩人は家
族の恩人である

その人物がすぐに立ち去つてしまつた、と言えば皆それなりに残念
がつたが、同じ町にいるならばいつか巡り会える、再び会える日も
あるさ

と、結論に相成つた

そうして、夜も更けたことだし、今へと至つたのである

美由紀は今日の昼間にすこし関わりを持った人物を、改めて思い浮かべた

鍛え上げられた躯

白銀の髪

紅の相貌

褐色の肌

そして、精悍な顔つき

自らの兄も、身内顛転なしに美形だといえるが、件の彼もまた、美形であった

別に自分が面白いであるとも思っていないが、やはりあそこまで特徴的な容姿だと、目がいつてしまう

それを間近で

腕に抱えられた状態で直視したのだ

何より、一人前ではないといえ、御神の剣士である美由紀が間に合
わないと悟った距離を一足で詰めたのだ

それこそ、まるで疾風の如く

考え出せば、気になつて仕方がないと思えてくる

だからこそ、こんなにも心に焼き付いているのだろうか？

「……とつあえず、今度あえたらキッチンとお礼を言おつかな。う
ん、そうじよ」

自らにそう決意して、美由紀は布団をかぶつた

確信はないが、なぜか、彼とまた近い内に会える気がしたの
だった

(『女のカン』……て、奴かな？)

そういうば、あの人、名前何ていうんだる……？)

何かが始まる兆しなのか?
一時の巡り合せなのか?

このカンが正しかったことは、僅か一週間で証明されることになる
のだが

現時点では、美由紀すらも、知る由もなかつた

それは、誰にも、解らない

続く？

第六話　『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる』の恥じら（前書き）

はやてのキャラが怪しき」と云

第六話 「補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる」を恥じる

皆がここにいます

ザフイーラ、毎度おなじみザフイーラで、それこまか

最近は夏も終わりが見え始め、幾分が過ごしやすい気候に成りつつある気がするようなしないような・・・

それはともかく

ワタクシただいま海鳴商店街にてお買い物としけこんでいましたら
ば

カロンカローラン

「む？」

「ねーおめでとうおめでんーお見事一等賞だよおー。」

ふむ、なにやら当たつてしまつたようだ

力チ込め!ザフイーラさん第六話　　『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる己を恥じる』

八月末日

「あ、ザフイーラお帰り～・・・って、何なんそれ？」

「ただいま帰りました主。これはですね。商店街で買い物をしていたら手に入りました」

「はえ？・・・ああ、そういうば今つて福引きやつとつたね。じゃあザフイーラがそれ当てたん?すごいな～」

家に帰るやいなやはやてに出迎えられたザフイーラは、担いでいる巨大な箱について説明した

冒頭で語ったように、

『海鳴商店街主催～残暑に負けるな!ドッキリワクワク福引き大会

なるイベントが開催されており、たまたま買い物出しに出ていたザフイーラが見事一等賞を当ててきたのだった

夕飯の買い物は普段はシャマルなどの仕事なのだが、この日はザフイーラは仕事が入つておらず暇であり、『では今日は私が行こう』

と相成つていたのである

服装は黒いジーンズに普通のシャツ、青いバンダナのいつもの三点装備

180？を越える外人のお兄さんが買い物かごを片手にネギを物色している姿はシユールではあつたが、そこはやはりグローバル海鳴近所の奥様方も慣れたもので、逆に一戸一戸と見守つているほどだ微笑ましくはあれど、特段珍しい光景ではないらしい

「お～い！はやて何して・・・あ、ザフイーラ！遅いぞ！」

奥から顔を見せたヴィータがザフイーラに気づく

すると、やはり背中の箱にも気付くわけ

「なんだソレ？新手の修行か？」

「確かにそれなりに重いが・・・ふつ、この程度では私には負荷とは言えん」

「ザフイーラは力持ちさんやな～」

「・・・いや、言い出したあたしが壇のものも悪いけど、なんの話だ
よ」

箱を担いだままキリリと笑うザフライラと、ビックリされた讃辞を送
るはやて

そんな一人に、ヴィータは脱力せざるを得ない

最近、盾の守護獣のキャラクターが解らなくなりつつある気がして
ならなかつた

ヴィータは気を取り直し再度尋ねる

「で、なんなんだよ、ソレ?」

「これはな・・・」

ザフライラは玄関先にドッカリと箱を置くと、その包みを解いてい
つた

「わあ～」

「へえ・・・」

それは自転車であった

俗に言つて「ママチャリ」、

そして子供用自転車の豪華一点セシット

題して『海鳴サイクル提供・親子でBUNBUNサイクリングせつ
と』…！

一等賞とこつだけあり、中々奮発したものだ

さすがは海鳴商店街

お客様の笑顔が第一です！ bUNBUN商店街組合
とこつだけはあつた

「何だつける？ 乗りもんだよな？」

「せうやよ、ヴィータ、これは自転車言つこや」

今までの文化圏にはなかつたものであり、当然乗つたことがなく知
識もない、ヴィータに、はやては教えてやる

ママチャリの方は男性でも乗れるよう、ブラウンを基調としたコ
「セックスなデザインとなつて」いる

一方の子供用自転車だが

（ククク、これは是非ヴィータちゃんに乗り回していただきたいね

（一）

内心で「ヤーヤ」と笑いながら、ザフライラが思わず軽い声を漏してしまつよつた一品だった

ピンクに近い赤を基調とした可愛らしいフレーム

小洒落た装飾の施されたハンドル

遊び心のあるキャラクターのプリントされたサドル

細部まで行き渡った意匠が、乗り手への深い愛を感じさせる。だわ

りの逸品

！！

ママチャリが男女公用なのに對し、いかに女性の子向
けではあるが・・・それは仕様

気にしては負けだ

「ふーん・・・ん？・・・。」これは一

興味深げに眺めていたヴィータだが、そのデザインを見てこいつに、あることに気がついたらしく驚愕の表情を露わにする

そんな彼女に対し、ザフライラは、今度は隠すことのないヤリと

した笑みを見せる

（フツフツ、気付いたか……）

「ヤニヤしているザフィーラだが、ヴィータはそんなこと『』にしてはこられない

なぜなり

『『のりこりやれ』だつ！』

サドルに『』でかでかと『のりこりやれ』がプリントされており、よく見れば、全体的に赤と黒の配色が、かのキャラクターを彷彿とさせる

そう、その自転車は、大人気キャラクター『のりこりやれ』とのタイアップ商品だったのだ……

「うおーー乗つてみてーーー！」

「ヴィータはほんまにのりこりやれ好きやねー？」

「うそ、うそーはやでが最初に買つてくれたやつだもん！」

ハートにギガストライクだつたらしく、皿をキラキラトさせながら

嬉しそうに語るヴィータ。

はやても、ザフィーラも、そんな様子が微笑ましくてならなかつた
ザフィーラの方は、氣分はすでにしゃぐ娘を諫めるお父さんである
中の人年齢的には、ヴィータぐらい（外見年齢）の娘がいても不
自然ではなかつたため、その感慨もひとしおであつた

「ハハハ、乗るのは構わんが、今日はもう遅い。明日にしよう」

「そやで、ヴィータ。別に自転車は逃げへんよ」

「えー・・・わかつたよ」

興味津々といったヴィータをなだめ、ザフィーラは片手に持つたま
まだつた買い物袋をはやてに渡す

「では主お願いします。私はこれらを外に置いてきましょ。ここ
にあつては少しかさばりますから」

「はーい、じゃあ今から」飯作るからね。ほら、ヴィータ、今日
の晩ご飯は久しづりのお肉やで」

「ほんとに? よっしゃあー!」

受け取つたはやはヴィータを引き連れ、車椅子を操り台所へと消

えていった

(ヴィータちゃん、なんか感情のままに生きてるなあ・・・)

原作ではシビアな戦闘者としての一面も強調されていた赤いロリッ子だが、この家の生活、とくに『はや』の前ではあんな風に喜怒哀楽を素直に表現する

そのじとじ、ザフィーラは少し驚いていた

ザフィーラには前回までの主の『記録』はあっても『体験』はないためよく分からなかつたが、今までよほど抑圧されていたようだヴィータ本来のハツラツとした性格が、一気に解放されていくようにも思える

これも全てははやでのお陰なのか

?

(まあ、可愛いからいいや)

結論：可愛いは正義

「・・・さて、縁側辺りに置いておくか

どうせ明日になれば使われるのだから置くまでもないだろう

残されたザフイーラは自転車を箱に詰め直すと、とりあえず通行の邪魔にならない場所へと運ぶのだった

「ザフイーラ、気になったのだが」

「ん? どうした、シグナム」

夕飯も終え、各自思い思いに過ごす団欒の時間

食卓でいつも通り茶をするザフイーラに、同じく茶をするつていたシグナムが不思議そうな顔で居間の方を見ながら、ザフイーラに問い合わせてきた

その視線を辿つてみれば、問い合わせの内容がわかつた

「ヴィータのことか?」

「ああ、先ほどから、やけに機嫌がいいじゃないか。何かあったのか?」

「ああ、あれはな」

シグナムはザフィーラが帰宅した30分後ほどに帰宅したため、玄関でのやりとりを知らないし、ザフィーラが庭の方に回つて置いていた自転車も見ていなかつたため、

ヴィータの「機嫌の理由に疑問があるようだつた

一連の流れを説明してやれば、シグナムも成る程、といった顔になる

「自転車か。ヴィータもそんなものに心惹かれるような奴だつたのか」

「今までが今までだ。本来のアイツは、好奇心の強い質なのだろうが」

「はやてと一緒に居間でアイス片手にテレビを見ているヴィータは、いつになく」機嫌だ

「いいじゃないの。新しい物に触れるつていうのは、ひとつも楽しいことだもの」

そんな姿を眺めながらの親のよつな二人の会話に、洗い物を終えたシャマルが参加してきた

シャマルは自分の分の湯飲みに茶を注ぐと、シグナムの隣の席に座る茶をすすり、のほほんと笑いながら、ヴィータを見るそのまゝ、まるで慈愛に満ちた母の「とく

「確かにこの地で目覚めてからは、新しいことの連続だったからな」

「私たちの見てきた世界は広くはあつたが、逆に狭いものでしかなかつたのだと改めて思うな」

「そうねー。本当に・・・最近はみんなも、この生活を楽しんでるものね。勿論私もだけど」

のんびりと談話に花を咲かせる大人組

隣室の一人と比べると、やはり彼ら三人のまとう空氣はまつたりとしたものである

（はふう・・・落ち着くわあ・・・）

美女二人と食後の一服

女日照りだつた前世からは考えられないリア充生活にも慣れてきた
ザフィーラだつた

「む？ その口振りだと何か趣味でも見つけたか？」

シャルマルの言ごとくに、シグナムが気がついたように聞いた

すると、シャマルはにんまりと笑いながら答える

「そうなのー最近はね、お料理だけじゃなくてお菓子も作ってみようかなーなんて考えてるのよ」

「・・・それは、うん。程々にな・・・なあ、ザフイーラ」

「何故私に振った烈火の将。その程度の敵も捌けぬようでは、炎の魔剣が泣いているだ」

「くつ・くつ・そこまで言われては引き下がれん! ザフイーラ、明日は暇かー仕合つぞーー!」

「何故そつなる・・・仕方ない、受け付立つ・・・と、言いたいところだが。生憎、明日は毎から仕事だよ、シグナム」

「・・・二人とも、何の話をしてるのかしら?」

「うして、夏の夜は更けていった

「・・・ふむ、こんなものだな。乗つていいで、ヴィータ」

「良かつたなあ、ヴィータ」

庭先に出たハ神家の面々 といつてもザフイーラ、はやて、ヴァイータの三人だが は前日の予定通り、自転車を弄くつていた

新品特有の堅さなどをザフィーラが軽く整備してやつたのだ

前世知識、
というか経験で、
自転車の整備ぐらいは出来るザフィー
ラである

子供用のチャリ整備など、朝飯前

付属していた予備部品や『とあるパート』は今のところ出番がないため、箱の中だ

(アレ? よく考えたら・・・)

いや乗らんと自転車に跨るヴィータだが、ザフイーラはあるじひと気付いた

「ああーっ・・・って、どう乗るんだコレ?」

(まあ、やつぱりひだよね)

跨る」とは跨つた、

が、ヴィータはそこから先は知らなかつたらし

うん?と首を捻つたヴィータに、はやてが一肌脱ぐ

「その足下にあるソレ……そや、そのペダルに足置いてな。思い切つて漕いでみ~」

「これ~よつし、解つたよはやて!見ててよ~」

丁寧に教えてやるはやてだが、端で見ていたザフィーラは、10秒先が予測できる氣がした

「おーじやつ~つて、うわあつ~?」

ガツシャーン

走り出して一秒

見事にコケた

（ヴィータちゃんよ・・・君は、期待を裏切らない子だと・・・お兄さんはそう信じていたよ）

見ていて解るほどに力んでいたため、疾風の如き蹴り出しほ、一瞬にしてバランスの崩壊へと至る

その結果、眼前で繰り広げられたのは、美しき放物線を描きながら大地へと熱い抱擁を交わすヴィータ、という光景だった

「あちやあー、また派手にいつたなー。ヴィータ、大丈夫?」

「いてて・・・なんだコレ!? ギガ乗りにくいです!-!」

地団駄踏み踏みな、ヴィータに、ザフイーラは苦笑を漏らしつつも自転車を起こしてやつた

「初めてだからな、そんなものだらう。慣れるまで、練習あるのみだ」

「・・・なんだよザフイーラ。やけに上から田線だな。オメーは乗れんのかよ?」

そんなザフイーラの余裕が気にくわなかつたのかジト田 + 上田遣いで睨みながらぶつすりするヴィータ

（そんな可愛こじとをしても、お兄さんのハイフポイントが回復するだけですよ~。）

表情は苦笑、内心は緩みきつたザフィーラの思考

しかし気付かれないのならどうしていいとはないのだよ~。

「ああ、乗れるとも」

「なあつー・?・マジかよー・?・

「無論、マジだ」

自身と同じく闇の書の守護騎士の一柱であるはずのザフィーラが、未知の乗り物に乗れるという事実が、ヴィータには衝撃的だったようだ

な、なんだつてーーと言わんばかりに大きな青い目をぱちくりと見開き驚愕の意を示すヴィータに、ザフィーラの胸キコンポイント（死）はもうイケイケだ

（まあぶつかけ当たり前のよに乗れるんだけども・・・）

確かに、こきなり初見の乗り物を理解するなど、所詮狼のザフィーラがすれば怪しいだろ？

ザフィーラは適当にカバーする」とした

「仕事場の同僚がな、乗っていたんだ。それを借りたことがある」

「お前、街中でコケたら危ねーだろ」

どうせら、ヴィータはザフィーラも初めはコケたと想つてゐるらしい
街中で、いきなりガテン系の青年がチャリで転倒すれば、それはも
うただの事故ではないか？

だが、それはあり得ない仮定だった

（フツ、見くびられたものだな・・・自慢ではないがこのザフィー
ラ。

『自転車に乗る』といつて一側面において、敗北はないと言つておこ
うー）

何故ならばツ！？！

何を隠そつ！

ザフィーラの中の人の趣味はツ！？

週末に敢行する、m Y自転車でマンガ・グッズ探しツアーダったの
だツ！！

「私が、無様に転倒するとでも？」

「なつー? ジャあいきなり乗れたのかよー? 何だよソレー。」

「ザフフィーラは器用やねー。ヴィータも練習せななあ」

「うう、ちくしょー・・・」

「ヤリヒルに笑みを浮かべてやれば、再び衝撃を受け、ほぞを噛むヴィータ

ザフフィーラに負けたことがよほど悔しきらしく

「ハハハ、そう拗ねるな、ヴィータ」

「拗ねてねーです・・・」

「まずは感覚を掴まねばな。では、『取つて置き』を用意してやろ

う

「『取つて置き』?」

「まあ少し待つていの」

そういうつて箱を漁るザフィーラが取り出した物は、『例のブン』

「何する気だよ？」

「あ～、私ちょっと予想できたわ～」

「何なのさはやて？」

ドライバーとレンチを駆使してガチャコラと作業をするザフィーラの背中を見ること数分

「できただぞ」

ヴィータは満足げに頷くザフィーラに促されるままに、自転車を見る

そこには

「何これ、ちつこ車輪？」

燐然と輝く、二つの補助輪

ヴィータは感じた

彼女は自転車や、その付属品なんかに対して知識は明るくない

だが、直感で感じ取つたのだ

『コレ』は、なんか気にくわない

補助輪のフレーム部分には、のろいさぎの愉快な仲間の一人、『にんきょうひよこ』がデテンと構えている

眼帯にサンマ傷、三白眼でこじらひを睨むチャーミングなキャラクターだ

同愛二二と互同愛二

しかし、それでも何故か気にくわない

「にいやかな、あくまでにいやかなザフィーラと、予想通りらしくやつぱりなー」などとのたまうはやて

一人の視線が、どこか微笑まし気なのも気にくわない

ヴィータは、何故か沸き上がる内心の不満を隠すことなく、声に乗せた

「うーん、どうしたの？」

「コレは、補助輪といつ。自転車に乗るために修練する幼子達が、慣れるまで使用する道具だ」

幼子?
おさなこ?

幼児?

つまりは、ガキか?

「あたしはガキじゃねーーーっ！」

ヴィータは思わず激怒した

しかし一人はそんな彼女をまあまあと宥め賺し、優しげな口調で語る

「ほらほら、私も付き合つから。せっかくええ自転車なんやし、ち
ゃんと練習しよな? ヴィータならすぐこ^トに補助輪もとれるよー。」

「うむ、主の言つとおりだ。小こ^トことは気にするな

「ぐ、ぬぬぬ・・・」

葛藤に次ぐ葛藤

ヴィータの中ではあまり譲りたくない一線

しかし、いつまでもお膳立てされでは、逆に乗らないなどと言ひ出せない
主と仲間の生暖かい視線を一身に受け、今にも頭を抱えこみだしそ
うなヴィータだったが

色々とふしきつたらじい

意気軒昂に自転車に取り付くヴィータ

「つむ、その意図だ」

「特訓やで、ウイーター！ 気合こやー。やつてやれん！」とはないんやで

あはは、なんか気温が一気に上がった気がするな！」

「熱血と云う奴でしょ、主よ」

「なんかちやう氣もするけど、まあ、ええよね。ほら、ヴィータフ

「あいや、補助輪付きで「ケるんや。ヴィータも中々やなあ」

再びの転倒に、またも綺麗に放り出されるヴィータ

はやては既に応援モードらしく、優しい気性の彼女にしては、ヴィータに駆け寄るでもなく冷静に原因分析に努めていた

変なスイッチでも入ったのだろうか？

夏の暑さは、残暑とはいえまだまだしつこいようだ

そんな光景を見ていると、ザフィーラはそろそろ時計が昼頃を指しているのに気づく

（あ、もうこんな時間か・・・ヴィータちゃんは、大丈夫そうかな）

時計から田を離し、ヴィータを見れば、再度トライしているところだった

負けん気の強い彼女のことだ、本気で今日中に乗りこなすまで止めないだろ？

「主、私はそろそろ時間ですので、これにて。申し訳ありませんが

「後をお任せします」

「あ、もうそんな時間か。お仕事頑張ってな~」

「はい、では行って参ります」

「ハサウエイさん、おはようございます。」

ガッショーン

「つぐ、オーライだぜはやて！…ぬおりやあー…つにゅあー？」

ズツシャーヌ

熱血幼女達の燃え上がる激闘の軌跡：修得篇をBGMに、ザフィー
ラは今日も工事現場へドリルを振るいに行くのだった

後半へ続く

第六話　『補助輪を恥じるな、補助輪を恥じる』（後書き）

後半へと続きます

まだまだ夏は終わらないぜ

第七話　『この私がスロウコイー！？ああーつえなあーーー！』（前書き）

はやてキャラ崩壊

いや、属性ねつ造のつもりが・・・何故いつなつたし

第七話　『この私がスロウワリィー？ああーつえなあーーいつ…』

ブエノスアイレス！

一家に一台、暮らしお供、ザフイーラでござります

前回までのザフイーラさんですが

ヴィータちゃんが予想外に可愛かつた件について

はやてちゃんが予想外にスポーツ根好きだった件について

とまあ、つむりの娘達（違）の新たな側面を発見したんですけど…

「待てや——！」

「ははは、速いなー！気持ちええわー！－ザフイーラー！もつとじやー！もつとじばすんやー！」

「御意」

「置いてくなよ——！」

チリンチワーン！

現在、娘達と一緒に「トリビュート」します

力チ込みー・ザフィーラさん第七話　『この私がスロウリイー？　ああ
ーりえなあーーー』

話は遡ること少しばかり

前回自転車に乗れるかどうかを見届けることなく仕事に行つたザフ
ィーラ

「ほう、ヴィータがそんなことを？」

「ああ、主とともに楽しむつらせたよ。ああしているのが至
極自然に見えるぐらいだ」

「わづか、はしゃぎすぎて主はやでに迷惑を掛けなければいいが・
・」

「ふむ。主も楽しむつとしておられた。そう心配する」ともないと
思つが

昼からの仕事を終え、帰り際にばつたり会つたシグナムと取り留め

もない会話をしながら我が家に帰つた

「ただいま戻りました」

「今帰りました、主はやて」

何時もお出迎えを期待し、ガラリと玄関を開けてみればそこには

「 よつやつたー よつやつたで ヴィーター！ (すつ 転ぶ) 痛みに耐えて
よつがんばつたー 感動したー！」

「はやてのお陰だよ！－はやてがずっと応援してくれてたから、だからあたしは頑張れたんだ－！」

「くう、嬉しい」と言うてくれる・・・ヴィータア――――――！」

「はやてえ――――――」

ひしつと抱き合う幼女が一人

アットホームな我が家で展開されている異次元的な空氣に、シグナムは目を皿にした

一方のザフィーラは昼間に一端を田の辺たりにしていたので、ビックリはしたが、すぐに立ち直った

扉を開いたのがザファイーラでよかつた
シグナムであれば、思わず閉めてしまつただろう

烈火の将も大概にスボ根の人ではあるが、いきなりこんなアツい空
間に身を投じる羽田になるとほ思わなかつたようだ

「その様子であれば、乗れるようになったのですか？」

「あつ、ザファイーラ、おかえり。シグナムもな、お疲れさま」

「あ、はい。あの、これは一体何事で？」

「せや！聞いたつてやー、ヴィータがやり遂げたんやー、な、ヴィータ
！」

「おうよー、バツチリだぜー、ま、あたしに掛かりや、あ自転車なんてえ
こんなもんだよー！」

「つむ、さうか。流石だな、ヴィータ」

「へへんつー」

無い胸を張る幼い仕草がものすごく微笑ましく、ザファイーラは紅い
頭をぽふぽふと撫でる

まさに娘の成長を喜ぶ父の、じとく
その瞳は父性愛に満ちあふれていた

図らずもほつこつとした空気が、夕方のハ神家玄関前に流れていった

「つて、娘じやねえ――――――？」

「なる程、もう乗りこなせるよ！」になつたといつわけか

「そうなの。だからヴィータちゃんつたりもう喜んじゃつてね。『この補助輪つてのもういらぬー』って言つて、取つてつてせがむんだもの」

「何だよ！いいじゃんか別に！あたしはもうマスターしたんだよ！」

「そやでシャマル。ヴィータの頑張りはこの私がちゃんと見届けたんや、私が証明したる！」

「あらあら、フフフ

（ヴィータちゃんも運動神経いいなあ。一日ひとは頑張つたね。さすが『ベルカの真紅の稻妻』・・・案外似合つた、これ）

女性陣の会話を小耳に挟みながら、ザフィーラは庭の後始末をしていた

ヴィータが短時間で乗り回した庭は、まさに歴戦の戦場といった様相を呈しており、荒れていたのだ

まあ無頼の風に庭先が乱れたぐらいのレベルではあるのだが、几帳面なザフィーラはそこらへんが気になるのだった

パサリパサリと庭先の掃除を終えると、ふとヴィータの自転車が目に入る

シャマルに補助輪を取つてもらい、玄関脇に立てかけてあるそれは、ヴィータの努力が垣間見えるような、見事なくたびれ具合だった

「半日でここまで・・・ふむ、少しくらい磨いておいてやろうか」

夕暮れの庭先で一人微笑む彼は、実に所帯じみている

ザフィーラの中に居るのが『彼』だからかは解らない、元来のザフィーラもこういつ氣分を感じていたのかもしれない

そう、実に平和な、平和な日々だった

家族の日常を語り合って、皆で団らんする、普遍的な、しかし大切な

一幕

「なんやザフィーラ。居らんと思つたらレバナにあつたんか

「む、主」

「 もうそろ晩ご飯やで？掃除はまた明日行こじよ？」

「 わりですね」

車椅子が床を軋ませる音を耳にし、ザフィーラはそちらに振り向く
そこには予想通りほんわりと笑顔のザフィーラを浮かべての姿
ザフィーラがつっかけを脱ぎ縁側に上ると、ふと、自転車を眺め
てこるはやてが気になった

その田舎は、9歳の少女らしい憧憬と、9歳の少女にはそぐわない
諦めが混在していた

「ええなあ、自転車……私も、一回でええから乗つてみたかった
なあ……」

「……主」

「あ、気にせんといてー？私は、ヴィータが乗つてゐるのみるだけで楽
しいからー」

先程の表情を消し去り、一転して取り繕つて明るい顔を見せるが
やで

それじゃあ手え洗つてきこやー？と言ひ残し、彼女はキッチンへと
向かった

思わずといった風にポツリと垣間見た少女の本音に、ザフィーラはいたたまれない気持ちになる

最後の言葉は嘘ではないが、本音でもないだろ？

9歳の少女が、自らの不遇に不満を漏らすでもなく、逆に周囲に気を遣う

ザフィーラは、ハ神はやてとこう少女の『異端性』を、改めて直視した気がした

「つむ・・・

（原作に沿えば、一番いい結果になるけど・・・今は原作前だ。この時期のハ神家の動きは特に決まってないはず・・・まあ、色々変わってるからもう原作知識が使えないかもしれないなあ）

ザフィーラは、思いの外冷静にそんなことを考えていた

自信の最大の武器たる原作知識

しかし、その信頼性が最近揺らいでしまつて、いつのような気がしてならなかつた

思えば、『彼』がザフィーラとしてここにいる時点で、原作を変え

てしまつてゐるのだ

こちらの世界で田覚めてから一ヶ月、今更ながらござフィーラはその可能性に気づいた

しかし、彼の心は何故か穏やかだつた

普段ならば、『アレ?よく考えたら原作知識つて役に立たないんじやね?確定的に明らかじゃね?つそあーーい!?』といった風に、混乱すること請け合いだ

だが、夕陽を眺める彼の心中は、至つて穏やかだつた

先程はやてが見せた、寂しそうな顔。

少女には似合わない諦めの表情。

それを見て思つたのだ。

『これを見ているだけなんて、それで家族と名乗れるのか?』

きつかけは實に小さなことだ

単純で、ふとした考えに過ぎず、短慮だとも思つ

長い目で見れば、これまで通り傍観者を氣取つた方がいいかもしない

だが、今までの一ヶ月、彼は『ザフィーラ』だった色々覚悟を決めるとか、戦いに行く決心をするとか、大層なことを言つてきた

それらしく修行などにもチャレンジしてみた

だが、彼の中身は普通よりも少し臆病な成人男性でしかなかつた
『魔法』とか、『戦い』とか、そんな非現実の中にある彼は、あくまで『ザフィーラ』としての彼だった

だが今、彼は、日常の中にある彼は、『彼』として『八神はやて』といふ少女を笑わせてやりたいと思つてしまつたのだ

一ヶ月の生活を通して、彼は今、初めてと言つていいぐらいに『やりたいこと』を見つけてしまつたのだ

キャラクターではない

決められたシナリオを歩く、無感動な人形ではない

前世と何ら変わり無い、泣き、笑い、悲しみ、喜び、そしてまた笑う

この世界にいるのは、
血の通つた、人間たちだ

よくある陳腐な答えだろう、青臭い綺麗事だろう

しかし、それでいい、
オリジナリティなんて要らなかつた

きっかけは小さなことだ

それで十分だつたのだ

何故なら、『彼』は、一人の小さな人間だつたのだから

「そう、だな・・・私は、『そう』だつた」

原作にはない、ほんの小さな、イベント性もエンターテイメント性
もない、少女とその家族の一場面

だからこそ、『彼』は、今まで縋つてきた『原作知識』といつ盾を、
するりと手放すことができた

そう、手放したのだ

「この世界で、眞に生きてみようか まずは、『主』に笑顔を、

だな

その顔には、熱意溢れる理想もなく、悲壯的な覚悟もない

夕陽が照らす八神家の縁側にて、『ザファイーラ』であり『彼』である男は、小さく、しかし大きな意味のある目標を掲げたのだった

シリアスに決めてみたザファイーラ
卸さない、それが八神家クオリティ

だがしかし。そうは問屋が

「そりや、サイクリングに行こう」

「「「は?」」」

『夕焼けの決意(笑)』から数日後、ザファイーラは日曜日であり暇
だった

シグナムは道場も休みで、暇だった

ヴィータは言わざもがな暇であり、舍
・・・シャマルは洗い物を
していたためこの場にはいない

穏やかな朝食後の団らん、そのはずだったのだが、はやてがおもむろに口元に言ひ渡した

車椅子を固定し、まるでこれしかないとばかりに可愛らしく腕を組んで頷いている

急な事態に、ザフィーラを含めた三人には「？？？」が乱舞していた

「あ、主はやて？サイクリング、ですか？」

「せや、サイクリングや」

代表してシグナムが聞いたが、聞き間違いとかではないようだ

「私思つたんや。せつかくの自転車、乗りこなせるようになつた今、
ヴィータには広いフィールドで存分に楽しんでほしうつてな」

「は、はやて？・・・！」

家族思いのいいせりふに、ヴィータは感極まる

が、何故か、シグナムとザフィーラはその言葉が空恐ろしかった

「・・・して、こつなさるので？」

「今日や」

「「「え?」」」

「昔の人はいいこと言つた。『思ひ立つたが吉凶』言つてな。みんな今日はなんか用事あるか?」

一度は懐柔されたヴィータですら、再びポカン

さらりとサプライズ発言なはやてに困惑につつも、三人は暇であることを告げる

シグナムとザフイーラの危機関知的直感、別名『ヤバいよセンサー』がビンビンになってきた

「『善は急げ』とも言ひ。ちゅうわけで、行こか、みんなー取り敢えず、まずは近場の臨海公園でも日指してみよーー。」

数日前の儂さと諦めを含んだ幸薄（薄幸ではない、とかひびす。コレ重要）の少女・八神はやはどこへ消えたのか、わくわくしてますとばかりに手を上にかざすはやて

なんだかんだ言つて、はやてが楽しそうなならばそれでいい騎士一人に、似たような決意（笑）を固めたザフイーラである

はやてからの提案ならば、断る理由などありはしなかつた

「「御意」「「おひつー」

「何の空氣かしら」「レ・・・?」

洗い物を終えたシャマルがリビングに顔を出し、ひたすらに疑問の声を上げていた

場面は変わり庭先へ

『はやてこよる突然の想につけで開催される、はやての、はやてによる、ヴィータのためのサイクリング祭り』・・・略して『はやてサイクリング』が開始された

「さて、ほんなら、ヴィータは準備おつけやな?」

「もう一・」

「お弁当はシャマルとシグナム、よろしくな?」

「はい、はやてちゃん

「しかし、承りました」

そこまで言つてうんうんと頷くと、はやては残りの一人へと視線を向けた

「ザフィーラ、準備完了した?」

「 ただいま終わりました。行けます」

はやてサイクリングの全貌は、至つてシンプル

先に述べたように、ヴィータのチャリ鳴らし（誤字に非ず。腕が鳴るぜ的な意味で）であるしかし爆走するヴィータを一人で行かすのは、家族イベントたる意味がない

車椅子で追いつけるほど、ヴィータは生半可ではないし、車椅子に合わせたらサイクリングにはならない

そこで、はやては考えた

しかし、車などとも縁がないハ神家だったし、シグナム達に車椅子を押しながらの全力疾走を強要する鬼畜主ではない

そこでふと、ザフィーラが入れ知恵をはたらいた

『お忘れですか主? 私たちには、まだ「足」が残されています』と

そしてはやはやは気がつく

『なんや、もう一台自転車あつたやん』と

つまつザフイーラが近づいてきた自転車セシートの、むしむ田中商品
大人用ユニセックステザインママチャリの『J登場であった

—!

「狭くはないですか？」

「うん。うん。大丈夫やね」

小学三年生の女子としても軽いはやてを慎重に抱き上げ、ママチャ
リの後部に設置された座席へ座らせる

普通ならキツいかもしないが、車椅子生活で筋力の弱い、小柄な
はやてには十分の余裕があつたらしい

こちらに残した車椅子は、お弁当を持ってくれるシャマルと一緒に、シグナムが持つててくれる手箸となつている

過保護侍シグナムさんのことだから、自ら手て名をあげるかと思ひきや、それでもなかつた

曰く、『ザフイーラならば問題なかろう』

ザフィーラ的には謎のブレッシャー攻撃である

現時刻は10時20分、

集会は12時に臨海公園としていた

はやでかしきり乗つたことを確認し、重責であることを手に選はれたザフイーラは自身もサドルに腰をかける

「ほな、行こか！」

「うつせしものー。」

「それでは、しつかりと掘まつていってください、主」

「みんな、また後でね～」

彼等のサイクリングが始まつた

「フハハハハハ！ ヴィータ！ そつやー もつと闘志を燃やすんやー ノスモを爆発させえーーー！」

「オオオオー燃えろあたしのコスモオオオーー！」

（何故こうなつたし……）

現在サイクリング開始から十数分

いきなり『どっちが先につくか勝負しようぜー』とかのたまいだしが、ヴィータが全速力でチャリをダッシュをせ始めたことが発端となつて、この事態は始まった

はやてを乗せているため、無理な機動は避けたいザフィーラだったが、あるつことかそのはやて自身から、『ヴィータに負けとつたら盾の守護獣の名折れやで！ 気張るんやーザフィーラ！』と言われてしまつた

なんで守護神が韋馱天に負けたら恥なのか？

よくわからなかつたが、異次元的熱血スイッチが入つたはやはまさに疾風の如き性質となり、速さを求めてやまないようだ

仕方なしに軽く本気でこいだザフィーラだったが、案の定、車輪のインチ差などからザフィーラがヴィータを追い越した

それからは、追うヴィータに発破をかけるはやて、ひたすらに繰り続けるザフィーラのバッジヒートになつてしまつた

（原作知識捨るとかいつたけど……捨てるまでもないよ。なんだ

このはやてちゃん。いつたい何を食つたらこなくなく ガーの兄貴みたいな幼女ができるんだ? シャマルか、シャマルさんが『舍(シヤマル)』『飯』を味見でもさせたのか?)

ザファイーラの決意(笑)は本当に(笑)でしかなかつたよつだ
アニメとかでは、この時期のはやはタヌキと称されぬ」ともない、
まだ人氣のあつた健氣な少女時代のはずだ

断じてこんな熱血スピードマスターキャラではなかつたと思つ
丸つ毛りと言つていいレベルの違ひは、もはやこれが原作準拠では
なことの最肯定となつていた

(なんだかなあ・・・しかし)

「ゼット、ゼミ、くわう! 待てえつ、ザファイーラあーーーはやてえー
!」

「ほりヴィーター! 今が耐え時やーー! ザーのー線を越えるんやーー
その時あんたは空も飛べるはずやーーー!」

「ああああいわやんふりあああーーー!」

(嗚呼、もひ。ロイツ等降りこひえなあ・・・)

叫ぶ幼女と満面の笑みで発破をかける幼女を引き連れ自転車で爆走する青年の図とは、これいかに

ザフィーラは周囲からのイタい視線をカットする魔法障壁がほしいとか考えていた

その少女がそこに居たのは偶然だった

この日は日曜日、学校もなく、数ヶ月前に出会った『不思議な力』の練習もない

両親等のお店はまだ込む時間ではなく、なんとはなしに散歩に出かけたのだった

「・・・？」

そこで、少女はふと、どこかで女の子が叫ぶような声を聞いた

「何だろ？解る？レイジングハート？」

『Sorry master. I don't』

頼れる相棒にも解らないらしく、しかし聞こえたのは確かのようだ、

空耳ではないとわかつた

その声のようなものは、徐々に近づいていくので、必死だと感じさせる少女の声が幾分強まっている

そこに重なるように、楽しそうな、ひどく愉快そうなもう一つの少女の声が新たに聞こえてくる

「な、何だらう・・・?」

言い争っているような、しかしこの少女と最近できた金髪の大事な親友とがそつだつたように、互いを認めさせ合っているかのような壮絶な声の応酬

見知った町中での底知れぬ事態に、修羅場をぐぐり抜けたこともある栗毛の少女は、唾を飲む

『つか』

『スイ』

声が近づいてきた

少女は一層に深く耳をこじりし、その実態を探る

(危ない)ことなら、私がなんとかしなきゃ……！

彼女にはその『力』があるのだから

『おまちい』

『ザフラ』

『す』

声はすぐ側まで迫っていた、おそらくはこの曲がり角のすぐ向こうにまで

久方ぶりの未知を相手に、待ちかまえる少女にも緊張が走る

そして、『彼女たち』がはその姿を現した

ぐぐり、と再び息をのみ、少女が見たものは……

「ギガあああああ……」

「いいつ！いい加速 アクセラレーション や！だがもつとやれる！あんたならもつと出せるはずやつ！筋肉を躍動させるんやあつ！」

「！」

「爆ぜろあたしの大腿筋んんんつ！……」

予想外であつた

意外！それは自転車！

「自転車の自転車、子供用が猛スピードで少女めがけて追って来たのだ

しかも素常でなし何事かを叫ひながら

あまりの圧力と風圧に、少女はバランスを崩し、尻餅をついてアスファルトにへたりこんだ

ある意味ジユーハルシードよりも怖い

本当に怖いのは、誰よりも何よりも、人間であるといふことだらうか・・・?

Master, Master!!!

茫然自失となつた少女をはつとさせたのは、機械の相棒の声であつた

「はひいつ！？・・・え？レイジングハート？え？え？何、今の・・

?

少女に認識できたのは、何か得体の知れない圧力を放つ一台の暴走特急と、真っ先に視界に入つた青いツナギのような服だけであつた。・

少女 高町なのはは、原作を離れてしまつたこの世界でどう動くのか？

受難に満ちあふれた彼女の人生は、ある意味ここから始まつてしまつたのだった。・

「主ー主ー！」

「どしたあザフイーラ？」

「今、まさに、何か人らしきモノを蹴散らしませんでしたか？」

「障害物は蹴散らしてこそその花道やーースピード落としたらあかん
でザフイーラ！勝利までおよそ7カーブ・・・ヴィータには悪いが、
この戦 いくわ ・・ 私が貰うつー！」

「・・・（どうして、いつなつた・・・？）」

「ギガだあああああつしゅああああーーー。」

「やつよるな、ヴィータ。さすがは【ベルカの真紅の稲妻】やでつ
いーーー。」

「・・・何も、三つまー」

ザフィーラの戦難はどうでもこつてもマッハ越えで進み続けるの
だった

続く

第八話　『悪いなの　太、この『バイス三人乗りなんだよ！』

九月某日

ハ神家リビングにて、とある壁下がり

図書館へ向かつたはやてと付き添いのシグナム

久々にゲボ子に復帰しつつ、爺さん達に自転車を自慢しに行つたヴィータ

よつて、家にいるのは必然的に一人だけ
マルさんと

我らが主人公・ザファイーラその一人であつた

家事も一段落つき、今は二人ともソファで茶をすすりながらワイド
ショーなどを流し見ていた

その落ち着き様　　あえて言つなら長年連れ添つた老夫婦が醸し
出すような、居心地のよい沈黙の中

有閑マダムな有様のシャマルはともかく、あまり芸能関係に興味の
ないザファイーラは田は画面を見ながらも全く違うことを考えていた

（俺も『バイス欲しいなー』）

力チ込め! ザフイーラさん第八話　　『悪いな び太、このデバイス三人乗りなんだよ!』

ザフイーラは、そんな思いに駆られていた

前回で『原作知識は捨てる（キリッ』とかかましたザフイーラだつたが、基本的には今までと生活は変わつていな

よく考えたら、犬にならなかつたし、日銭を稼いでたし、『近所付き合いしてるし、メガネ嬢にエンカウン特したし、原作なんか外れまくつっていたのだ

はやてが正に疾風の化身と相成つてしまつたのも、いつか来る未来（ＳｔｅＳ時間軸とか）における『狸娘はやて』が先走つて生まれたといつだけかもしけない

図書館ばかりの内向的なはやてを、この二ヶ月で何度も外に連れ出したりしていったため、ポテンシャル的にはアグレッシブになつても不思議ではなかつた

今まででは原作を大事にして不干涉で行くつもりだつたのだが、改めて考えるとまったく遂行できていなかつた

それだけ、ザフイーラ生活を楽しんでいたからなのだろうが、『彼

は、意志薄弱な自分が何とも情けなくなつた

そんな折り、一応未だ続いているシグナムとの喧嘩祭り・・・鍛錬で、ザフィーラは疑問を感じたのだ

そう、『ザフィーラの『テバイス』』といつ存在について

丁度いい、闇の書に詳しい参謀マダムも田の前にいることだ、今のおうちに聞いてしまおうとザフィーラは考えた

「 時にシャマル」

「はい？」

パリン、と乾いた音を立てる煎餅を加えながら、シャマルはテレビからザフィーラに視線を移す

「今更ながら、私の存在は、『闇の書プログラム』の一つとしてどういう概念が備わっている?」

いきなりの真面目な質問に、シャマルも顔を引き締め、口内の煎餅を飲み込む

「もぐ、んくっ・・・どうしたのザフィーラ、いきなりそんなこと

を言い出すなんて？

「いや、少しばかり引っかかることがある」

「…………まさか、あなたの体に何か異変でもあったの…？」

いきなりはつとした表情になると、心配そうに詰め寄つてくるシャマルにザフィーラは「え？え？なーん？」と動悸と焦りを覚える

しかし、一瞬後に『そういう設定』だったな、と思いつ出す

「いや、その件ではない。心配するな。ただ純粋に、私と二人に違
いはあるのか？」と聞きたかつたんだ

シャマルは心配していた件ではないと言われ胸をなで下ろすも、ザ
フィーラが新たに問うた質問に、少し考える素振りを見せた

「……厳密に言えば守護獣か騎士かという違いはあるけれど。大
差はないはずよ？結論としては同じプログラム生命体だもの」

「ふむ……それならば……」

「どうしたの？」

「いや。何故私は『テバイスを使用していないのかと思いつしてな。
今の話を聞く限り、使えん、というわけでは無せそうなのだが」

そう言われ、「そう言えば何でかしらねー？あれ？ホント何でかしら？？」とのほほんと返すシャマル

そう、ザフィーラが抱いた小さな疑問とは、『なんでザフィーラってデバイスないの？ハブられてんの？ベルカ式ぼっちは奴？』といつたものだ

それも、天啓が如く、いきなりその『疑問』が脳裏に浮かんだのだった

きっかけはシグナムとの模擬戦だった

あれは疾風サイクリングより数日後、まだ八月中のことだ

数日前・八月末日

「ちえあつ！」

「ふつ、セイツ！」

迫る白刃を鉄甲で受け流し、体をひねり込んでシグナムの無防備な腹へと回し蹴りを叩き込む

「甘い！」

難なくかわすシグナムだが、回避のためにジャンプした瞬間にザフィーラは地を蹴り、回し蹴りの軌道をずらし直上へと蹴り上げる

「せあつー！」

「つーぐ、まだだーー！」

さすがは烈火の将

奇襲じみた蹴りすらも、空中といつ回避に適さない空間で正中線を
ブラして回避する

蹴り上げた足が上に残り、無防備をさらしたザフィーラの背面に着
地すると、振り返りの刃でザフィーラの逆胴を狙う

「つおおつーー！」

「テオアアアアつーー！」

瞬間、先のシグナムを真似るが如く空中に浮く足を起点に跳躍し、
剣劇を回避

振り抜いた左の鉄甲でシグナムへと一撃を迫る

ピタヒ、お互いの首と胸で止められた剣と拳

「・・・ふう」

お互い同時に息を吐き、力を抜いた

「・・・今の回避は見事だつたな。刃が空を切り掛けた」

「シグナムこそ、相変わらずの体幹だな。隠し玉を避けられたのは何度目だ?」

剣を納めたシグナムと、拳を納めたザフイーラが互いに感想を言い合つ

「やはり超近接戦ではザフイーラに一日の長があるか。私もまだまだだな」

「む。私の武器は四肢四刀だ。その分有利でなくては、守護獣の面目が立たん」

「フツ、それもそうだな」

爽やかに汗をかき終えた一人は、お馴染み砂漠の星で戦後考証へと移っていた

「しかし・・・」

その中で、ザフイーラは一つ切実な問題に気づいてしまった

「今の仕合、そちらが一合でも刃に魔力を込めていたら、防戦に徹するしかなかろうな」

「しかたないのではないか？お前はやはり、魔法における攻撃手段が未だに薄い」

「（はつきり言うなあシグナムさんよ・・・）ふむ・・・どうやら私の『守護』獣の力は攻めには向かんよつだ」

ザフイーラは伸び悩んでいた

前に開発した盾手裏剣と盾爆弾

アレらを実践投入するには、いたとか粗が大きすぎるのだ

本来守りを至上とする『ザフイーラ』の本質は、あくまで『盾を張る』ことであり、『盾で攻撃する』ことではないからだ

意識を集中させないと、すぐに盾の魔力が散ってしまうのだ

仕合には使えるが、実践ならばすぐさま攻略されるような拙い技は、かえつて命取りになりやすい

『ザフィーラ』の膨大な経験は、『彼』にそつ語りかけていた

「だからといって、打撃力が拳と『鋼のくびき』だけというのもな・・・せめてもう少し、『盾だけに意識を回す』ことができれば使い物になるんだが・・・」

「ままならんものだな」

しかめ面で悩む戦友に、しかしシグナムは苦笑するしかできない
こればかりは本人が打破する壁だ

既に戦士として完成系に近いザフィーラが更なる高みを目指しているという事実は、武人であるシグナムにとつても刺激されるモノがあつた

故に、この鍛錬は相互の利につまく合致していた

ふと、ザフィーラの視線がシグナムの腰に留まつていふことに気づいた

「ど、どうしたザフィーラ？」

「そ、うか・・・ふむ、これならば・・・」

何か光明を見いだしたようなザフイーラの言葉に興味が湧き、シグナムがなにを思いついたのか問おうとする

「シグナム」

「な、何だ?」

が、寸前で先を越され、シグナムが逆に話しかけられた

「簡単なことだつた・・・實に、簡単なことだ。何故今まで私はこんなことに気がつかなかつた?」

「何か思いついたのか?」

「ああ、単純な話だ。デバイスを使えばいい」

「デバイス?

「ああ、なるほど」

そう言わると、シグナムはストーンと理解できた気がした

デバイスとは、本来人には負荷のかかる高度演算を肩代わりするた

めの、補助道具である

『盾を張る』思考ソースをデバイスで肩代わりし、『盾を操る』ことをザフイーラが行う

これだけで問題解決だ

先ほどの視線はレヴァンティンに向かっていたらしい

むじりみんなやっているのに、何故今まで誰も指摘しなかったのか？

「 」 「 」 「 」

あまりにもあまりな新発見に言葉をなくす一人

まるで、『誰かが決めたから』『ザフイーラが活躍できない』ように誘導されていた氣さえしてくる・・・

『都 監督の罷だ！』

罷だあー！

だあー・・・（HIT）

「・・・まあ、いい。深くは考えん」

「やう、だな。やうじよつか」

『触れてはいけない』話題に立ち入りそうだったため、二人は気を取り直して会話を続ける

「ともかく、私のデバイスというモノを作成してみよう。幸い闇の書には膨大な資料がある、一つや一つ、わけないだろ？」「ううだな。シャマルに頼むとい。やはり闇の書に一番詳しいのはあいつだからな」

「・・・ん？ 待て。守護獣だからデバイスが無かつた、ということは、無い・・・だろ？ な？ 将よ」

「・・・あ。 答えかねるな」

「そちらへんどうなんだろ？？」

本気で首を傾げながらも、一人は海鳴へと帰つて行くのだった・・・

とまあ、こうした経緯があり、ザフイーラはあらまじをシャマルに伝える

「そんなことがあったの・・・」

うーん、と頭をひねるシャマルだったが、推測だけど、と前置きして口を開く

「守護獣でも、リンカーノアはあるもの。デバイスは使えるはずよ？ただ、私の予測だけど、今までの貴方はデバイスが無くても盾だけに集中できたけど、シングルアクション増やすことによって処理力に追いつかなくなつたんだと思うわ」

「成る程・・・要は私の我が儘が原因か」

「我が儘って・・・別に、私は今の貴方もいいと思うわよ？それだけはやてちゃんを守りたいって想つてる証拠だものね」

「無論だな」

朗らかに笑うシャマルに、確かにその思いだけは確実だと同意するザフィーラ

参謀曰くザフィーラにもデバイスは使えると解つたのだ

どうせなら早く自身のデバイスというモノを体験してみたかった

「シャマル、闇の書のデータからデバイスを作成することは可能か？」

「え？恐らく、できると思うわよ？・・・あ、そうだ、今まで使ってなかつただけで、プログラムの中には貴方のデバイスデータも設

定されてるかもしないわ

「む、その可能性もあつたか」

シャマルの言葉には一理あつた

さすがに夜天の書の創造主も、騎士一人だけハブるような鬼畜ではなかつたはずだ

むじりそんな鬼畜であつてほしくない

ザフィーラはそんな考えを振り切ると、シャマルへ所要時間を聞き出す

「引きずり出す全行程にどれくらいかかる?」

「そうね。書内のアーカイブを走査、検索、割り出し、情報取得、再現化・・・全部で一晩ぐらいかしら?あ、まだ中にあると決まつた訳じゃないわ。だから、貴方に合いそうなデバイスデータも同時に探しておくな。その場合は走査、構築に一日ほどかかるかもしれないけれど」

なんと氣の利くシャマルだらうか?

ザフィーラの中にあるドジつこなイメージが払拭され、一気に頼れるお姉さまキャラではないか

（シャマルさんパネエな。さすが中身は老練なる参謀・・・場数が違つぜー。）

感謝の割に失礼なことを考えながらも、しっかりと頭を下げて礼をする

「重ね重ね助かる。恩に着る、シャマル」

堅苦しいザフィーラの様子に、シャマルは一つ苦笑すると、お茶目^目にウインクしながらザフィーラに気にするなど言った

「構わないわよ、私たちは家族でしょ？」

「家族、か・・・ああ、そうだな。では、頼む、シャマル」

「フフフ。ええ、任されたわ。あ、お茶のお代わり、どうかしら？」

「ふむ、頂こい」

穏やかな初秋の昼下がり、矢神家は、まつたりとした空気で満ちあふれていた

その日の夜、ザフィーラは夢を見ていた

（「ーん・・・なんだこい？」）

夢の中だとこのはなんとなく分かつた

何故なら、そこは『海』と呼ばれる次元空間の様に周囲360°。何もなく、たゆたゆとザフィーラはそこに浮かんでいたからだ

しかも自分の体は見えるのに、周囲は一寸先すら見えないとこの真つ暗闇の仕様だ

（えー・・・悪夢の類だろこれ。俺暗いの嫌いなんだよなあ）

ヘタレに極まれりといえる思考

これで外見は凜々しく取り繕つてこないとこのだから、またに見た目詐欺だ

【盾の 獣。 ての守護 フィーラ】

ふと、ビリからりともなく声が響く

途切れがちなその声は、ビリヤリザフィーラへと呼びかけてこるなり

しこ

哀切に満ちたような、渴望に枯れ果てたような、慈愛を説く女神の
よつな、美しくも儻げな声

（え？え？何これ？誰だよ？何これ明晰夢つて奴？ていうか声だけ
聞こえるとか止めてマジで恐いからあばあばばば）

しかしざフイーラにとつては、姿無き美声は幽靈のそれと同義語で
あつた

自分の夢の中にあつてなお、普段の小心ぶりに拍車がかかる残念な
有様だ

【・・・ザフイーラ、いや、『ザフイーラ』と共にある者よ】

（――なつ、今、なんて――？）

呆れたよつな、しかし先ほどよつも明瞭な聲音に、ザフイーラは著
しく反応する

正しくは、その言葉の含む意味に驚かざるを得なかつた

（『ザフイーラ』と共にある者・・・俺が『ザフイーラ』じゃない
つて知つてゐつて言つのか！？誰だ！？これは俺の夢じゃないのか
！？）

【いいや、これは夢だ。起きたときは既に忘却の彼方へと去りゆく、虚ろの出来事でしかない】

頭の中での疑問に対し、答えが返ってきた

（ちよつ、やめて…！俺のチキンな心を読まないで…）
（うせら幽霊さん（仮）はサイコメトリーであるようだ

【…安心しろ、表層意識を拾っているだけ、念話のよつなもの
だ…・『ザフィーラ』、貴方に話しておくことがある】

（…何すか？）

閉じろ俺の心眼！と、訳の分からない思考を拾われてしまったよう
で、声の主はザフィーラに事態の説明を図る

なんとも律儀な幽霊さん（仮）であったが、次に発せられた声はこ
こからが本題とばかりに少し引き締まった

返すザフィーラの声も、少しばかり真剣なものへと変わる

彼の中では、別に現状をはつきり理解できたわけではない

単に『夢だ』とはつきり言われたり、話す相手も実に理知的

『それなら別に大丈夫…・大丈夫かな？』

と適当に場の流れに身を任せただけである

そんなザフィーラの無意識下のヘタレをものともせず、声の主は語り出す

【私は、貴方達と共にあつた存在。そして、今なお貴方達、主と共にあり続けている。しかし、私には騎士達へと語りかけることはできなかつた。いつしかできないように改変されてしまった。辛うじて、主へと意識をつなげるだけで精一杯だつた・・・】

(・・・)

何やら思つたよりも深刻そうな話だ

ザフィーラは取り敢えず口を挟まず聞いてみるとこした

【だが、貴方が、ザフィーラでありながらも『ザフィーラ』ではない貴方が突如として現れた。メモリ野とルーチンの微細かつ決定的な変化。今までのサイクルでは観測されなかつた事態だ。しかし、それ故に、貴方には改変プログラムのプロトコルが適用されなかつた。だからこそこうして今、夢として思考域に働きかけることができているのだから】

(・・・うん、うん。成る程・・・)

何を言つているのかザフィーラにはさっぱり分からなかつた

ルーチンとかプロト「ルとか言われても、前世で電子工学に長けていたわけでもないザフィーラには、とんでも煙違いだ

（つまり分かりやすく言えば？）

【・・・お前になら、話しかけることができるようになった】

二人称が貴方からお前に格下げされた

声に滲む呆れも隠そくとしない辺り、幽靈さん（仮）からのザフィーラ株価は下落したらしい

しかしそんな些細なことを気にするザフィーラではない

（それは良かったですねー。つまり、アレか？今まで話しがけたくても出来なくて、久し振りに話せそうな相手　　俺に意を決して話しかけたと・・・？）

【え、いや、何を　】

（よからう！同士よ！人見知りという壁に立ち向かった君に敬意を表して、語り明かそうじゃないか！）

【ちょ、違　】

（なあに、心配はいらない。俺は理解者だからね！安心してくれ！

俺もそうだったんだよー。)

【・・・】

ザファイーラの中にいる『彼』は実に温厚な男だった
人当たりも悪くなく、人畜無害、仕事効率は人並み、特に嫌われない
いわゆる草食系男子

だが実体は、ヘタレ気味な人見知りであつた

人当たりが良いのは基本的に他人と深くつっこんだ関係にならなかつたから、つまり悪い面を知られるほどに親交を深める相手が少なかつたからだ

仲良くなる奴とは仲良くなるが、手広くフレンドリーなタイプではなかつた

だから彼は本来なら忌避すべき幽霊（仮）の言葉に、いたく親近感を感じてしまつた
先ほどまでビビっていたのにだ

また夢の中だといふことも、彼を幾分開放的にさせていた

（というか夢ん中だろこれ？無害無害ー。）

姿無き声も『そういうもの』、やけにはつきりとした夢も『そういうもの』だと、割り切つてみることにしたようだ

【おかしいな・・・本質的には『ザフィーラ』に変わりはない筈なのだが・・・こんな男だったかな?】

漏れ出るお氣楽な思考に、幽靈（仮）は怪訝な声で自答する

声の主　　凛とした音色から女性と推測できる　　は、自身の記憶にある寡黙で不動の男が面影も無いことに、戸惑いを隠せないようだ

そう、『』は内面思考が意志発露のツールとして働く精神空間

普段の、自動的にクールな『ザフィーラ』を取り繕つた言動で誤魔化されていた違いが、明るみに出てしまっているのだ

『彼』と『ザフィーラ』の中身は、一万人いれば一人人が別人と認めるぐらいには別人だ

同士であるシャイな幽靈（仮）の怪訝な色を含む言葉だが、いつになくハイなザフィーラには届いてなかつたらしい

（それで、話はそれだけかい？ほら、もつと話していいんだよ？今まで喋れなかつた分、存分に聞いてやるつ！…）

【・・・まあ、いい。一応伝えておこう。お前自身は認識していな

いであるつ、お前の在り方を】

(ん? 在り方? どういう意味で?)

声の主は取り敢えず疑問を先置いた

彼女（便宜的に、女性と定義する）の言葉に、今度はザフイーラが疑問を持つ。

【文字通り、お前はザフイーラであつて『ザフイーラ』ではない。それは自覚しているだろ? しかし、結論を言えればお前は『ザフイーラ』という存在でしかあり得ない】

（そりや、まあ、確かに見た目はこんなだけども・・・『ザフイーラ』ってのはもつと男らしいガチマッチョだろ? ） 内面的な意味で。俺は『ザフイーラ』に憑依したとか、乗っ取つちゃったんじゃないのか?)

彼が今言ったことは、この一ヶ月で彼がたどり着いた答えであった

原作における『ザフイーラ』は不遇ではあるが、内面は寡黙一徹騎士道まつじぐらな男だった

彼が今まで蓄えた記録はあるにしても、中身が全くの別物である現状、『彼』が『ザフイーラ』を乗つ取つたといつても不思議ではない

だが『彼』はあまり罪悪感などは感じていなかった

彼自身にも何故こうなったかと言う理由が分からなかつたからでもあるし、誰が悪いとかも全く分からなかつたからである

取り敢えず『ザファイーラ』役として その割にはあまり自重していなかつたが 過ごしてきてただけだった

だが、やはり『ザファイーラ』と同一存在だと言われては、違和感が拭えない

【いや、確かに性質の改变は性格、言動面において影響は見られるが、本質は変化していない。お前は夜天の騎士が一柱『蒼き守護獣』である『ザファイーラ』だ。理由は私にも特定できていないが、従来のザファイーラが未知のコードに接触した結果、その余波により及ぼされた変質が今のお前だ】

(はあ・・・はあ？その、コード？それは何なの？)

【分からぬ。私達の技術体系では解析し得ない未知の情報としかな。しかし、『ザファイーラ』というプログラムがそのコードに取つて代わられたわけではない。あくまでお前は、『不明情報の余波により細部に変異が生じたザファイーラ』だ。つまりはお前の認識する『ザファイーラ』の人格が『今』のお前であるわけだ】

彼女の言を纏めると、つまりは「いつにいつ」という

“ザファイーラの中の『彼』とは、原作の『ザファイーラ』が何らかの情報により変化した、同一の存在である”

(「つもでーい）

余りにも違いますんだひつ?

彼にはそう思えて仕方ない

（いや、でも、確かに憑依モノとかに付き物の『憑依前人格との関係性』が無かつたな・・・）

声の主の言葉に従えば、その疑問への解答はひじく単純、『無くて当たり前』だ

何故なら、憑依前のザフィーラー』そが、今のザフィーラであるのだから

声の主はつづむと頭を捻るザフィーラーに対し、淡々と事実だけを述べる裁判官ように言葉を連ねてゆく

【当事者として納得できないのも無理はない。完全な上位存在である私にも『何故』『どういう理屈で』そうなったのかは理解できていないのでだから】

（なんか、ややこしくなってるみたいだなあ・・・我ながら訳が分からん）

【案するな。湖の騎士が見立てたとおり、その変化がお前に及ぼす弊害は今の所観測されていない。そして、現時点では変化したお前が主に害をなす存在ではないとも理解している。だからこそ、私はお前に接触するといつ選択を選んだのだ】

(そりやあ、どーも?)

声の穏やかさから判断するに、一応信頼されてくる感じ

初対面の幽霊(仮)、しかも夢の中で信頼とかされても、どう反応すればいいの?と言わんばかりのザフイーラだが、一応礼を言つておくれ

【・・・さて、そろそろ終ことじよ!】

(あれ?もう届なくなるのか?別に朝まだ時間はあるんじゃ?)

【一晩中話しこみりか・・・・・どうやら予期してこたみりも長く話してしまつたよつた。主よりも、お前と話す時間が長かったと言つのも複雑な話ではあるが・・・ザフイーラ】

おとこつ幽霊(仮)は、最後に改めて彼の名を呼んだ

(何かな?)

【私は、昔のお前をよく知つてゐる。お前の、主への忠義は変わつていはないはずだ。疑いはしない、だが、改めて・・・ただ、主だけのために在ると、悲しませないと誓つてくれないか】

支えることすら出来ない私の代わりに

ザフイーラには、そう聞こえたような気がした

そしてザフイーラにとつて、そんなもの言われるまでもないことだつた

(当たり前だらう。はやてけんを、あんな良い子を泣かせてたまるかよ。一応、俺だつて男で、大人なんだから。ちつさい子供を守つてやるぐらいしないと、年上である意味がない。それに、多分これは俺以外のみんなも思つてることだよ)

武力はシグナム、ヴァイータには及ばない
知識や技術も、シャマルには及ばない

だが、それでもザフイーラは、『家族』と囁つてくれる少女を守りたいと願つている

ヴォルケンリッター一同の願いは、皆同じ

優しい少女のための平穏な日々を守ることだ

勇ましくもある女の言葉に安心したのか、声の主は幾分が明るさを増した声を返す

【・・・有り難う、その言葉、信じよう】

（いえいえ、そんなお礼を言われるのは恐縮の至り・・・）

【そうだ、お前が気にしていたことを一つ、教えてやる】

（ん？何？）

【ヴォルケンリッターには、それぞれの武器 デバイスが設定されている。勿論、お前にも。私が保証しよう】

（ ー・マジかー！ひやつぼうー！）

ザフィーラは思わず嬉しい言葉にテンションが妙なことになつた
暗闇の中で思わずガツッポーズを決めてしまつぼどには
(シャマルさんが調べてくれてるって言つてたし、これは、夢の『
ザフィーラ専用デバイス』がマジで実現すると！？ひやつぼうー！)

【そんなに喜ばれるとは思わなかつたが・・・】

（何を仰る幽霊（仮）さん！ステゴロザフィーラも確かにカッコいいかもしれないけど、やっぱ魔法使えるならデバイス使うのもロマンでしょ！デバイスはロマンだよ、兄貴！）

夢だからとこつて欲望に忠実な男である

ネタが通じるかも分からぬ相手に思考が駄々漏れてこることすら気にかけていない

そして、声の主はこの短時間での『ザフイーラ』の新たな性質に対処しつつあった

【私は冗談では……いや、気にしません。さて、どうせやうじこまでもよつよだ】

即ち、気にしたら負け故のスルーであった

（ああ、うん。あ、そう言えれば、君は結局誰なわけだ？俺の夢にしては、俺の知らないことが多すぎたし）

はて、と今更ながらに首を傾げるザフイーラ

本来ならば真っ先に気にならなければならぬ事柄だが、雰囲気に流されていた彼は今の今まで聞き出せなかつたのだ

さてお別れだといつ際に初めて初めて、ザフイーラは幽霊（仮）へとその正体を問いかける

【……私は……いや、この答へに意味はない。田が覚めたその時、お前は私を、この一時を覚えていまー】

悲しげに、諦めに彩られた彼女の声は、先程はやての好いを願つていたときよりも、無機質に立ち戻つてゐたよつて思える

それが、曲がりなりに一端のジョンタルマン氣取りであるザフイーラには、少し寂しかつた

(そんな寂しこと言われてもなあ・・・)

【私はお前達と共にゐる。だが、お前達と交わることはないだらう
或いは、そんな未来が来るならば、その時にこゝや】

(あ、ちよ、待・・・)

消えゆく声に思わず手を伸ばせば、ザフイーラは、闇の向ひつて薄く光る白銀の煌めきを見た気がした

「待ちよしつ！？」

血室のベッドにて、ザフイーラは飛び起きた

割り当てられた部屋はハ神家二階の南の端、田当たり抜群の六畳間
ぞいかじらの方言りしき言葉とともに、虛空に手を突きだして田を

覚ました部屋の主は、じばし呆然としていた

「……ひ、む？ 何を、誰を呼び止めたんだ、私は……？」

よく分からぬが、何か夢を見ていたらしい

しかし、その内容は、一部だけが記憶に残るだけで殆ど記憶に残らなかった

「確かに、私のデバイスは有ると、言っていた……のか？」

銀の髪をくしゃくしゃと搔きつつ、むむむ、と唸るも、それ以上は思い出せない

（なんか誰かから大切なことを聞いたよくな・・・なことよくな？）

時間はまだ日の出すぐ、おそらく四時半ぐらうだらうか
小鳥の鳴き声が耳に入る

「……まあ、いい。気のせいだ。起きるといつが」

普段より少しばかり早いが、一度寝るには些か眼が冴えすぎている

ザフィーラは凝り固まつた首を「キ」と鳴らすと、ベッドから起き上がるのだった

一日後。

この日はザフィーラの仕事場は追い込み時であり、一日中仕事のシフトが入っていたので帰宅したのは既に日が落ちた後だった

いつものように帰宅してから洗いの言葉を受け、いつものように夕食を済まし、団欒し、そして風呂に入つて、さて寝つかといふ時

「ザフィーラ、今いいかしり?」

「む、シャマル。どうした?」

「一昨日話してた貴方のデバイスについてなんだけど・・・」

やつわれ、ザフィーラはピクリと耳を動かした

「む、何か見つかったのか?」

そう言えば「一日ぐらいで出来るとか言っていたことを思い出し、ザフイーラはシャマルに促されるまま、ホイホイと着いていった

既に就寝準備に入っていたちびっ子一人は困らず、シグナムも風呂

リビングには「日前と同じくシャマルとザフイーラだけだ

そして、ソファに腰を下ろしたシャマルはザフイーラの間に、「ええ」と答える。

「予想したとおり、闇の書内のパーソナルデータ、その一部に貴方のデバイスデータは確かに存在したわ」

「それは重複。して、使えそうか?」

「問題ないわ。少し複雑なデータ構成だつたから思つたより探査に時間はかかつたけれど、見つけてしまえば後は組み立てるだけだつたから」

「やうか・・・礼を言つ、シャマル」

ザフイーラは、もたらされた吉報にまうと一息つく

薄く残つていた曖昧な夢の記憶では確かに肯定されていたが、実際に成功したと言われば、それはそれで安心だ

(「やあ、まさか一日ぽつちで手にまつるとは。シャマルさんマジ

感謝つす)

うとうと頷くザフイーラに、シャマルはほんわりと笑みを浮かべる

「あらあら、まだ実物を見てもいないのにお礼は受け取れないわね」

「む、そつか。では、現物は？」

「はい、これよ」

そう言ってシャマルが懐から取り出したのは、蒼い光沢のブレスレットだった

身を飾る装飾品と言つよつは、修行者等が身につけてくる法具の様な、どこか武骨さが際立つ腕輪

その光沢も淡く鈍い蒼であり、まさにザフイーラのイメージに合わせたような外見だった

「ほっ・・・これは

「待機状態は腕輪ね。スペックデータは登録してあるわ。説明するよつまづは、発動してみると良いわ」

「発動して問題ないのか？」

現在時刻は夜の十時辺り

このデバイスの形状がどの様なものかはまだ分からないが、いかにも守護騎士！な巨大盾とかだったらリビングがヤバいのでは？

ザフィーラはそれを危惧したが、勧めただけあってやはりシャマルは問題ないと頷く

「フフ、大丈夫よ。そんな物騒な形状にはならないから。形を見れば、貴方もしつくりくると思うのだけれどね」

「む。では」

そうして、ザフィーラは手の中のリングに魔力を込める
魔法の練習をする中で、彼は魔力流用にかけてはかなりの段階まで修得していた

例によつて『ザフィーラ』の記録のお陰であった

そのため、初めて触れるデバイスでも、起動させることに問題はなく

パシコン

「...」

微少な発動音とともに、そのデバイスは真の姿を、今、ザフィーラの前に現した！

「 手甲だな」
「ええ、手甲よ」

意外！それは手甲ッ！！

ザフィーラのバリアジャケットに付属している、両手に被さり鈍色に光る圧倒的無骨な鉄板の小宇宙ッ ！

つまりは、見慣れたアレであった

（・・・まあ、変に武器とか出てくるよりは、確かにしつくじくる
なあ）

意外性はなかつたが、ザフィーラは特に落胆するでもなく、それを受け入れた

半分素人の『彼』が使うには、一ヶ月とは言え付き合つてきた相棒こそが一番落ち着く形だ

（ぞこぞのオリ主みみたいに聖剣とか魔鏡とか出ても、困るだけだしね。
うん、いいじゃないか）

よく見れば、鉛色一色だったそれには、両サイドにどことなくオサ
レな感じの蒼いラインが入り、手首の辺りにはカートリッジバレル
と思わしきギミックが追加されていた

(なかなかカッコイイんじゃないかな?)

少々メカメカしくなった相棒に、ザフィーラは満足だった

「ふむ、確かに、手に馴染む」

「でしょう? 私もデータを見たときは納得したわ。この形が一番貴
方に合っているんでしょ? うね」

シャマルも満足げなザフィーラの言葉に相打つよつて、言葉をつな
げる

「スペックを説明すると、見ての通り、その子は鉄甲型アームドデ
バイス。非人格搭載型ではあるけれど、瞬間処理速度は人格搭載型
のそれを上回るほどに効率を重視されているわ。また、カートリッ
ジ搭載型だから、より強固な障壁を張るための出力も確保してい
るわ」

「 非人格搭載型か。まあ、私の本分は防御と支援。確かに処
理速度が高いというのは強みではあるな」

シャマル曰く、これは攻撃に際して自動的に防御するといったオート機能などではなく、あくまで使用者が発動する魔法の演算を高レベルで補助する代物らしい

（んー・・・アニメみたいなデバイスとの掛け合いができるのは残念だけども・・・つまりはストレージデバイスみたいなもんか？）
インテリジェンスではなくとも、意志はなくとも、戦場では自らの命を預ける相棒には変わりない

カツンカツンと両の手甲を打ち鳴らしながら、ザフィーラは考える

そんなザフィーラにこそ相応しい一品ではないか

寡黙で武骨の男

「でしょ？？これで魔力障壁と併用した遠隔魔法を使うのも楽になると思うわ」

「うむ、パーフェクトだ、シャマル」

「フフフ、感謝の極み、つてね」

想像していたよりも相性の良さそうな新たな相棒に、口元に笑みを浮かべたザフィーラは茶目っ気たっぷりにシャマルに労いの言葉をかけ、シャマルもふわりと笑いながらそれに答える

「どうした」「一人とも、もう夜も　　ん?
ザフィーラ、それは?」

そこへ、風呂から上がった我らが烈火の将が加わった

リビングで和氣藹々と笑いあう一人に、シグナムは不思議そうな顔を見せるが、ふと、ザフィーラの腕にある存在に目を留めた

「おお、シグナム。実はな　　」

先日のシグナムとの遭り取りをシャマルに相談し、そして新たにデバイスを手に入れた経緯を、一人はシグナムへと伝えた

そうすると、ああ、と納得した風に声を漏らしたシグナム

「やはり闇の書から見つかったのか。良かっただじゃないか、ザフィーラ」

「うむ、だからこそシャマルに礼を言つていたところだ。礼に悖つては、ベルカの騎士として名折れだらう」

「もう、だから気にしなくて良いのに。ザフィーラつたら」

「そうだな、確かに道場で聞いたのだが、この国には『親しき仲にも

礼儀有り』という格言があるそつだ。良い言葉じゃないか

デバイスを仕舞つたザフイーラ達にシグナムも加え三人で取り留めもなく話していると、シグナムがふと疑問の声を上げる

「ん、そうだ。ザフイーラ、そのデバイスの名は何と言つただ？」

「む、そう言えれば聞いていなかつたな・・・」

「お前・・・自身の相棒の名ごくらい興味を示すものだろ?・・・」

うつかりだぜ!とばかりに間の抜けているザフイーラに、シグナムが白い視線を送る

むう、と唸り苦笑いを浮かべながらも、ザフイーラはその視線を甘んじて受けた

「してシャマル。コイツの名は?」

「・・・あー、そのッ」

「シャマル?」

二人の会話にピクリと肩をふるわせ、何やら言ひよどむシャマルどうしたのかとシグナムが声を掛けるも、イマイチ反応が芳しくない

「・・・何かあるのか?言ひ淀むよつな、何か」

「うふ、まあ、そのね。その、確かに名前も登録されていたんだけれど・・・」

言葉を選びつつその縁の眼を泳がせるシャマルに、残された二人はそうして首を傾げる

(「どしたんだ? シャマルさん的に気にくわない名前とか・・・?いや、でも俺のデバイスだしなあ」)

内心でもシャマルの態度に疑問を感じ、ザフィーラはどうか? シャマルへと聞いてしまった

「ふむ。その、『登録名』とは何と?」

「・・・『ナックト』『アント』」

「・・・ナックト」

「フント・・・?」

ザフイーラとシグナムはその言葉を吟味した

余談だが、このザフイーラ、体の蓄えた知識のおかげで、ベルカ語も問題なく理解できるのだ

そして、その頭が弾き出した、その名の意味は

N a c k t = 裸の

H u n d = 犬

『裸の犬』

空気が凍るとは、まさにこのことか

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「と、登録名を、変更、しよう、か・・・」

「そ、そ、ね・・・」

「ああ、そ、そ、するとい、い・・・」

なんか変な空気のまま、三人はザフイーラの相棒に相応しい名前を考えるのだった

初秋の夜は、思ったよりも冷え込むようだ

蛇足・・・一時間の議論の結果、ザフイーラの手甲には『シュツツエン・フォウスト（守護者の拳）』といづ、何とも当たり障りなく素晴らしい名が与えられた

（誰だ、デバイスの名前付けたバカヤロウ・・・ああ、初代の夜天の主か。そうか、そんなにザフィーラ嫌いだったのか・・・）

ちくしょうめ！

続く

第八話　『悪いな　太、このデバイス三人乗りなんだよ!』（後書き）

「推察の通り、夢の中の人物はあの人です

え? わからない?

またまた、ご冗談を・・・

第九話　『噂の高町家突撃報告書、或いは二つ編み少女の驚愕』（前書き）

待たせたな！（大塚明夫風に）

第九話『噂の高町家突撃報告書、或いは二つ編み少女の驚愕』

服は着てます、裸じゃありません

ザフイーラです

犬ではない、狼だ！

ザフイーラです

使い魔ではない、守護獣だ！！

ザフイーラです

先日のデバイスいじめと呼べるレベルのネーミングセンスには腰を抜かしました

間接的に自分も虐められてくるといつ事実には、目をつむります

ザフイーラです・・・

ザフイーラです・・・

ザフイーラです・・・

力チ込め！ザフイーラさん第九話『噂の高町家突撃報告書、或い

「悪いなシャマル。付き合わせてしまつて」

「構わないわよこれくらい。それに、お隣の奥様に聞けば評判のお店らしいじゃない? 一度行つてみても損はなさそうだもの」

九月初旬、水曜日

ザフィーラとシャマルは小高い丘へと続く道を歩いていた

繁華街から延びたその道の先にある住宅街、ここを抜けたその先に、この日の目的地があつた

「ふむ、確かに繁盛はしているらしいな。平日にもかかわらず客が列を成すとか。私もそう聞いた」

「あら、誰か知り合いが行つたことあるの?」

「ヴィータについて行つた時に、吉田老人が孫娘にケーキを買つたと仰つっていたのでな・・・」

「ああ、吉田のお婆ちゃんね。そういえば、今度ヴィータちゃんがゲートボール大会に出るつて行つてたわね。随分はしゃいでたけれど、じ迷惑とか掛けてないかしら?」

少しばかり気にかけた様子の問いに、ザフィーラは一考するも、すぐ問題ないと結論づける

「む、老人方も孫のよつに「ヴィータを可愛がっていたからな。苦になるどころかむしろ微笑ましいと仰られていた。彼等には頭が下がる思いだ」

「そうねえ、確か大会は再来週だつたかしら？はやてちやんやみんなで応援に行くから、その時にお礼と挨拶をしておきましょ」

是非見に来てくれ、と

先日、嬉しそうに主である少女に報告していた小さな盟友を思いだし、シャマルは顔をほほりぱせた

「つむ。すっかり母親役が板についたものだな、シャマル」

相づちと同じくしてそう指摘したザフィーラ
シャマルは、その言葉に「そうかしら、」と返し、金髪をふわりと揺らしながら軽く微笑む。

「昔からみんなのお母さん役は私だつたわよ、誰が整備やら補給やらを担当してたと思つてゐるの」

「む、そうだつたな」

「でも確かに、今回の顯現ではいつも以上にお母さんらしいからね。私だってまだまだ若いのに・・・」

「・・・まあ、それだけ郷に馴染んだといつことだらう。悪いことではない」

「フフ、ええ、そうね」

とりとめもなく会話を続ける一人は、さながら有閑に散歩に出かけたおしどり夫婦のように

一定の速度で、ゆっくりと歩を進めていく

それは平日の住宅街静かな街並みも合わさつて、実に穏やかな雰囲気がたゆたつていた

・・・その片割れは、ザファイーラは、その実決して穏やかとはいえない内心であった

(来ちやつたよ、といひの田が来ちやつたよ・・・!・あ、落
ち着け、俺。ビークール、ビークール・・・!・)

氣を抜いたら動悸息切れにぶつ倒れてしまいそうなほど、ザフイーラの心臓は高鳴っていた

その原因たる目的地まではまだ一キロほどあるところに、まさにノミの心臓である

（いつかお邪魔しなきやいけない・・・そう、規定事項なんだ。美由希ちゃんにも約束したんだし、行かないのは失礼だもんなん・・・大丈夫、大丈夫、今日は平日！時は午前！高町家三女は小学校！！かちあう道理は毛頭無いっ！）

かつてのメガネっことの約束を律儀にも遂行するために、ザフイーラは今日、『町内でも評判の翠屋へと出陣する

かねてから決めていたことであり、回避は不可能

まるで戦場に死に行く若武者のような心境で、ザフイーラは今朝、家を出た

あらゆる一次創作で悪鬼羅刹魑魅魍魎の巣窟と化している海鳴市

中でも月村家と双璧を成すほどの危険スポットといえる場所こそが、喫茶・翠屋

かつては不破の仕事人にして、店を支配する一家の大黒柱、高町士郎

人外の嫁と魔王の妹を持つナチュラルボーンエロゲ主人公、KYO UYAこと、高町恭也

張り付けた仮の笑みの裏には翠屋の影の支配人たる威圧を秘めた、

将来の魔王が不在とはいって、そこに乗り込むのは生半ではない覚悟が必要である

（ちょっとお邪魔して、居るなら美由希ちゃんに挨拶して、手早くヴィータちゃん達へのお土産にケーキを買って、ハ神ザフイーラはクールに去るぜ よし！完璧な作戦だ！）

悠々と歩を進めながらも何度も繰り返した流れのよつた脳内ショミ レーションの出来に、ひとしきり満足する

（あの店は敵地！敵軍は強大！自軍は寡兵！作戦想定はどれほど積んでもたりぬほどよーーッ！…）

ぶつちやけた話、ザフィーラのビビッすぎである

かつての世界で一次創作を読み過ぎた彼の妄想による產物が殆どであり、実際のところ、この世界の翠屋にそんな変態的な過剰戦力はない

これもある種の被害妄想といえるのかは疑問だが、少なくとも、ケーキを買いに来た客に問答無用で神速で切りかかるような世紀末な喫茶店では、断じてない

ザフィーラが気をつけることは、なるべく高町なのはというストーリー軸的に主人公格の存在に、自らの存在を知られないうにするだけでいい

元来のビビリ癖が、遺憾なく發揮された結果が、内面でラリホーしてゐる今の彼であった

（問題はない。万全、万全つ・・・！圧倒的万全つ・・・！覚悟は、決めたつ！）

ざわ・・・ざわ・・・

キリツ！と効果音をつけるに相応しいよつたザフィーラの覚悟であつたが、そんなものは出がけに

『シャマル、用がないのなら、一緒に出かけないか？』

と援軍を求めてしまつた程度に、薄っぺらな覚悟（笑）であった
援軍シャマルは、味噌が切れていたためその買い物の荷物持ちを交換条件として、快くこれに同意した

白の半袖ブラウスに緑のロングスカート、近頃愛用しているパール色のハンドバックを持ち、軽くお出かけという出で立ちのシャマル
藍色のカッターシャツに黒のスラックスを合わせ、シックな服装に

バンダナは不似合いなため、銀髪を撫でつけてなんとかイヌミミを隠しているザフィーラ

外見不相応の精神的内面も相まって、一人の醸し出す空気は先述したようにまるで息のあつた老夫婦のようである

ザフィーラ自身は自分のことで精一杯だし、シャマルもお互い特に意識するような間柄ではないとリラックスしている

他人から見た自分たちの評価なんてものは、全く意識の外にある二人だった

カラシコロン

「いらっしゃいませー」

シンプルながら小洒落た押し扉を開ければ、客を迎えるベルの音と、店員の声が聞こえた

「あり、噂通りに素敵なお店ね」

「そ、だな」

翠屋に着いた二人は、店内へと足を進めた

昼前と言つこともあり、込み合つ時間帯から外れた店内は、落ち着いた雰囲気を持つて二人を出迎えてくれた

すると、カウンターの向こうからゆるかな声が掛けられる

「いらっしゃいませ、お一人様ですか？」

にこやかなスマイルでそつ言つたのは、第一閨門

『翠屋総帥』
『不老奥様』
『魔王の母』
『エロゲの主人公の母親は総じて美女』

など、数々の異名を持つ女 高町桃子！－

（これは噂に違わぬ美人さん……いや、シグナムさんとかシャマルウでもう慣れたよ。美形が多すぎて逆に何が美形か分からなくなってきたな……）

彼女を見たザフィーラの第一印象がそれである

緊張転じて、いつもながら飛び出でることばかりが頭に浮かぶ

（次元犯罪者とかにはヒヤッハー！に世紀末な不細工面とかいないんだろ？）

しかし、スカリーハーティもなんだかんだイケメン。オッサンキャラもダンディばかり・・・メリハリが無いつてもつまらんよな）

「お密さん？」

「・・・む？あ、ああ、すいません」

「気にしないで下さい、彼、時々ほつとある癖があつて」

不審に思つたのか首を傾げる桃子に、ザフイーラは我に返つた
何度も体験し既に慣れてきていたシャマルは、特に狼狽えるでもなく手酷いフォロー

「それはまた変わつてらつしゃるわねえ・・・ああ、すいません。
お一人でしたね、ご案内します」

「む、いや、我々は・・・」

ザフイーラの予定では、ここに居住するつもりはない

(美由希ちやんは・・・いない、か?)

店内を見渡す限り、姿がないメガネっこ

高校生でもある彼女は、平日故に今は学校だろう

ならば挨拶は不可能

来たことで美由希への義理は果たしたのだし、後はとっととおやい
ばするためにも、手早くお土産を買つだけだったのだが

「やうね、折角来たのだし、少し休憩していきましょうか?」

(シ、シャマルウウウウウーー?)

ところがどっこい!

なんと計画を打ち碎いたのは援軍であるはずのシャマルだった!

「いや、まだ買い物もしなければいけないのだし、ここの土産への
土産を買つだけで・・・」

「あら、時間はまだ大丈夫よ。いつものお店からそこまで離れてい
ないもの」

「いや、その、だな。ほら、あれだ。ヴィータ達が帰つてきてしま
うかもやしれんではないか

「せやてちやんとヴィータけやんは、シグナムと一緒にサイクリングに行つてゐるでしょ？帰つてくるのは夕方になると書つておいたから、大丈夫よ」

（ハハだつたああああーつー？）

やつ

車椅子では得られない自転車の疾走感にハマつたはやは、あれ（七話参照）以来自転車の鬼となつていたのだ

主が望むことに応えるが騎士の一分！…とばかりに自転車遭き機と化したシグナムを動力に、ママチャヤリ…名を、『せやてサイクロン号』の荷台に載つてみ近頃は海鳴市内を爆走してゐるのだがこの日も、暇そつとしていたシグナムと、自らも自転車を楽しみだしたヴィーター…彼女の愛機、名を『ヴィータイフーン号』をお供に、サイクリングに揚々と出かけていった

『ああー風になるでヴィーター…世界を掌握すんやシグナムーー！』

『はつー…』『応つー…』

そんな声が、ザフィーラの犬耳にリフレインしてきた気がした

（うべぐ…・…！？）

「たまには喫茶店でお茶するのも、いいじゃなー」

シャマルにそう締めくづられ、反論の余地を無くしたザフイーラは、諦めて勧められた席に座り込むのだった

「注文はお決まりですか？」

「じゃあ、私はケーキセットと、紅茶を」

「…………」「一ヒーを。それと、チーズケーキを」

「はい、かしこまつました、少々お待ち下さこね」

接客などバイトにでも任せても良さやつなものだが、今は居ないのか、パーティションから注文をとり、厨房へと消えていった

去っていく桃子を見送りながら、一息着いたシャマル

そして、こつになくそわそわしてこむザフイーラをちらりと見る

「ザフイーラ、どうかしたの？」

「む、いや、そんな」とせ、無い、うむ

(見るからにおかしこ・・・)

歯切れの悪い彼に少し不信感を抱く

思えば、ザフィーラから「出かけないか?」などと誘われたのは、初めてである

守護騎士といふ氣の置けない間柄である割に、自分たちにもあまり隙を見せないザフィーラがこれほど落ち着きがないのが、シャマルには気になった

そんなシャマルの内心を察したのが、ザフィーラはぽつりと呟く

「いや、な。前に話しただらう、いの御息女に誘われたのだと。どうも学生だつたようで今は居ないが、居たのならば一言掛けようかと思つていただけだ」

「ああ、前に言つてた子ね。ビルの鉄骨から助けたんだつたかしら?」

「まあ、彼女ならば恐らく私が手助けせずとも無事だつただらうが、お礼に是非と誘われては、無碍にもできまい」

「当たり前じゃない。そんなことしたらあなたは乙女の敵よ

呆れたようなシャマルに、苦笑じみた表情を返すザフィーラ

「まあ！あなたが美由希の命の恩人さん？」

そこへ、三人田の声が挙がる

「む、早いですね。まだ注文してから一分と経っていない」

見当違いなザフィーラの声に、桃子はにこやかに返す

「それはもう、お客様をお待たせするようなことは致しませんわ。それよりも！失礼ですが、あなたがザフィーラさん？」

「そうですが」

「娘を助けていただいて、本当にありがとうございました！」

「ああ、いや……」

「どうしたア桃子オオウー！」

少しばかり大きな声を出した妻を心配したのか、扉を蹴破らんばかりの勢いで、厨房の奥からエプロン姿の男が現れる

『高町家大黒柱』

『御神の剣士』

『娘命のバカ父』

『あのＫＹＯＵＹＡは儂が育てた』

魔王の父、高町士郎である

(「げえつ——!？」)

ザフィーラはテンパつた

(「む、『娘に因縁付けやがった野郎はどうだ!?』とか絡まれませんように!『俺の嫁に手え出してんなよゴルア』とか絡まれませんように!…」)

無神論者の癖に凄まじい他力本願で天に祈りだした彼をよそに、夫妻は言葉を続けた

「あなた、この方が美由希を助けてくださいザフィーラさんよ」

「おお、あなたが! その節は本当に、娘がお世話になりました!」

「ひじて並べば、なんどもその若々しさが際だつて見える夫妻である

これで二十歳近くの子供が居るというのだから、某ボクシング世界チャンプの様に『すごいね、人体』と言わずにはいられない

(「すげえや、さすがエロゲ主人公の両親設定…」)

真摯に礼を言う一人に対した受け手の脳内は、いつまで経つても阿呆であった

「あの子から話を聞いたときはすぐにでもお礼に伺いたかったんですが、あの子つたら名前しか知らないと言つものですから・・・本当に、ありがとうございました」

「私も父として、感謝の言葉しかありません。家族を守つていただき、心から感謝しております」

頭を下げる夫妻からは、娘の危機を救つた相手に対する、言つ通り心からの感謝の気持ちが感じ取れた

丁寧に礼を言う彼女らに、過ぎた謙遜はトラブルの元かと考え、さすがにザフィーラも素直に礼を受け取る

「いえ、大したことはしておりません。今日は娘さんにお誘いいただきこの店を訪ねさせていただきました」

「そうでしたか。お礼と言つては何ですけど、当店自慢のケーキを是非召し上がって下さい」と、申し遅れました。私は高町士郎と申します」

「む、では改めて、ハ神ザフィーラです」

笑顔でそう述べる士郎は、実にダンディである

負けじとザフィーラも丁寧に自己紹介

挨拶は社会人の基本である

サラリーマンだろうが、ガテン系だろうが、魔法使いだろうが、犬だろうが、その原理は不变なのだ

「おれはもう、おれの心は？」

「……」どうやら、空気になっていたシャルに夫妻の注意が向いた

桃子が慌てた風にシャルへと向き直る

「すいません、お連れの方がいらっしゃるのに、お邪魔をしてしまつて」

「いえ、構いませんわ。この人がお宅の娘さんから御招待を受けた
ようで、ご一緒させて貰つたんです。お噂はかねがね聞いておりま
したもので、かねてから一度寄らせて頂こうかと思っていまして」

「あら、そうでしたの？あの子つたら、大事なことを言わないんだから。そういうことなら」ちらりも用意ができたのに・・・ああ、ごめんなさい。申し遅れました。私は、美由希の母でこのパーティシ工を務めております、高町桃子と申します」

「あら、これはご丁寧に。私はハ神シャマルです」

奥様方は奥様方で話が合うようで、地味に世間話にシフトしだして

才ホホ、フフフ

口許に備えた手が実に優雅な雰囲気を醸し出す
しかしシャマル、物腰が見事に若奥様である

「いや、お氣になさらず。それに今は営業時間中だ。厨房を空け続けるのも何かと迷惑でしうから、私たちにはお構いなく」

「桃子、一回その辺りで。さて、八神さん。お時間を取らせてしまつてすいませんでした」

「はは、すみませんね。それでは、ゆっくりな坐つていいつて下さ」

「いや、お氣になさらず。それに今は営業時間中だ。厨房を空け続けるのも何かと迷惑でしうから、私たちにはお構いなく」

「桃子、一回その辺りで。さて、八神さん。お時間を取らせてしまつてすいませんでした」

「はは、すみませんね。それでは、ゆっくりな坐つていいつて下さ」

「はは、すみませんね。それでは、ゆっくりな坐つていいつて下さ」

「はは、すみませんね。それでは、ゆっくりな坐つていいつて下さ」

「さ、じゃあいただきましようか」

「つむ、頂ひつ」

どちらともなく居住まいを直し、カチャリと音を立てて、ザフィーラはチーズケーキにフォークを入れる

タルト生地をベースとしたそれは、サクリとした感触をもつてフオークを受け入れる

手頃なサイズに切り分けられたそれを、ぱくりと一口

「「むーあら」」

顔を上げれば、同じよじにケーキを口に運んでいたシャマルと田が
会つ

「これは、美味しいな」

「ええ、本当、美味しいわね」

思わず口元をゆるませる、八神家の一人だった

思わず笑みがこぼれてしまつ程に美味な甘味と、店の雰囲気が相まつてザフティー・ラ達はリラックスしていた

おかわりした紅茶をじぐじぐと飲み干し、シャマルは満足げに一息つく

「ふう、噂に違わぬ味だったわねえ。お土産、ヴィータちゃんは特に喜びそうね」

「アイツは」いつ言ったモノを特に好むからな。さて、頃合いだら。

そろそろ出るか

あれから30分程経ち、たてどまかりに席を立とひと腰を上げた、
その時

カラソロソと、ベルを鳴らす音がした

「お母やーん、手伝いに来たわよー」

「こりつしゃ　あい、美由希。学校は終わったの？」

「うん、今日は職員会議だとかでね、お昼終わりなんだってわ」

そう言いながら店内に姿を表したのは、ザフイーラには見覚えのある少女、高町美由希

「一応、お店のお手伝いにね。まだお昼前だからお客さんすくない
だらうけど　　」

厨房から顔を出した母と言葉を交わしていた彼女は、あまり客入り
のない店内を見渡し

「あつー。」

見知った顔を見つけ、田を見開いた
他でもない、ザフイーラである

「ザフイーラさんっ！来てくださいたんですね！」

「やあ、美由希嬢。丁度身をもて余していたところだったので、寄らせて貰つた。ここのケーキは君の言つた通り絶品だな。良いこの両親を持たれた」

「ほいーうちの母嬢のお母さん達ですかー！」

「ぴょーぴょー」と三つ編みを揺らしながら、美由希は明るい笑顔を見せた
ザフイーラはしばらく歓談と洒落混むかとも考えたが、席を立つたばかりの連れを放つていてるわけにもいかない

「さて、では私たちはこれで帰らせていただこう。馳走になつた

「えっ、もう帰つちやうんですか？・・・『私たち』？

美由希が首をかしげると、そのままザフイーラの後ろに控え、にこにこと笑みを湛えていたシャマルを視界に納め 固まつた

「あ、えと・・・あの、そちらの方は？」

「初めてまして、私、八神シャマルと申します。あなたが美由希さんね？ザフイーラから話は聞いてるわ」

「あ、え、ええ・・・え？あの、それで、お一人は・・・え？」

「・・・？」

急に動きがぎこちなく、まるでブリキのロボタックになってしまったかのような美由希シャマルはどうしたのかと視線をザフィーラに送るが、彼とてまつたく分からなかつた

ついにはお下げがしょんぼり、本体もしょんぼりし始め、どうしたのかと声を掛けようとしたザフィーラは、裾をぐいと引つ張られるそちらに手をやれば、責めるような視線のシャマルがなにやら小声でひそひそと話しかけてきた

「ちよっとザフィーラ、あなたこの子に向したの？」

「・・・思ひ当たる節は無いが」

「嘘おつしゃい。見るからに落ち込んじゃつてゐわよ、彼女？」

「むう・・・? (マジ)、なんかしたつけなあ?」

唸つて件の少女をこつそり見やる。少しばかり俯き、本体に呼応するように下がり氣味だった美由希のおさげが、きつと力を持つ生きているのかと突つ込みたいが、アニメなんて大概そんなものだ
気にしては負けという奴だ

「あ、あの、お一人は『兄妹なんですか?』

おずおずと口を開いたかと思えば、ビジュアル的にかなり無理のある可能性を問いただす美由希

どんな血筋の持ち主なら銀髪褐色と金髪碧眼の兄妹が誕生するのか、遺伝学の神秘的に興味をそそる命題ではあるが

致命的な回答を遠回しに避け、大ダメージから逃れようとする本能的な性だろうか

一方、何故いきなりそんなことを聞かれたのか？

よく分からぬザフイーラは素直に、ＺＯと答える他ない
「いや、兄妹ではないが・・・『そう言えばシャマル、私達は血が繋がつていただろうか？』」

ふと疑問に思ひシャマルに念話で投げ掛ければ、何を馬鹿なことをと言わんばかりの白い視線が返される
目が口よりもものを言つていた

まあ、考えればわかることだ

古代ベルカの素体がどうあれ、人間と狼では血の繋がりよつがない
「『生憎ですけど、私オオカミさんを母に持つた記憶はないのだけ
ど』ええ、兄妹ではないわよ」

あくまでにこやかなシャマル

そこには悪意の欠片もなく、ただ真実を言つてゐるだけである

「・・・」

「・・・」

「・・・（何故黙り込むし）」

しばしの間

ザフィーラはこの沈黙にはやくも耐えられそうになくなつてゐる

「じゃあ・・・」

ポツリ言葉が漏れた

意を決したよう瞳でもつて、しかし恐る恐る、美由希は尋ねた

「お一人は、恋人かなにかですか・・・？」

・・・・・。

（はい？・・・ああ、そつか、そつこつ見方もできなくはない、つ
てか）

いやいやいやいやいや
ないないないない

美由希の聞きたいことを理解し、ザフィーラは思わずそつ言いながら首と手をフルスイングしたくなつた

（これは俗にいう・・・『愛人との浮氣現場が見つかった夫とその妻の図』ツー！修羅場！圧倒的修羅場！！）

断じてそんなことはない

何故か彼の脳内では、犯してもいい浮氣を自らに課し、知り合いでしかない少女を妻に据える妄想シミュレーションが完成していた

どう見てもドラマを見すがた脳マシンのオーバーフローである

「・・・・・」

一方同じ言葉をぶつけられたシャマルも少女の言いたいことを察したらしく、軽く目を見開いて

「私たちの、関係ねえ？」

ニヤリと

今までのにこやかなそれとは質の違う、しかしそれでいて満面の笑みを顔に張り付けていた

テンパるザフィーラは見逃した

おつとりとした彼女の瞳が、一瞬にして、ぱりっとした、意地の悪い光を放つたことを

そう・・・シャマルのターン！――

「うーん、」の人は血は繋がってないけれど

「・・・」

「『大切な家族』には違いないのよね~」

「・・・ツー? そ、それは

「世間一般的な呼び方は分からぬけれど・・・『血の繋がらない男女であり、一つ屋根の下で暮らす切つても切れぬ仲』としか言いようがないわね~」

「・・・ツー?」

この時、美由希に電流走る
とこづかにやにやと迂遠な言い回しをするシャマルに、完全に飲み込まれていた

しかしシャマルのターンはまだまだ終わらなかつた

「あら、そろそろお皿ねえ。大変、早く帰らないと、ヴィータちゃん達が帰つてきちゃうわ（棒読み）」

「いや、夕方まウツフ」

要らぬことを言つてになつたザフィーラにすかさずレバーブローをすが参謀は急所を狙うのが巧かつた

（喋るなどおっしゃるか）

急所破壊とはいえ、腐つても鍛え抜かれたザフィーラの腹筋
本来マッスル派ではないシャマルのパンチでは、無様にうずくまる
ほど痛くはない

が、いくら空氣の読めないザフィーラでも、さすがにこれには察しが付いたらしい

賢明なことに、彼は金たる沈黙を貫くことにした

そんな敗北主義の犬野郎に氣づかぬまま、美由希は更にシャマルの罠へと足を踏み入れてゆく

「あの・・・その、ヴィータちゃん、といひのは・・・」

「ああ、『うちの子』でね。甘いものが大好きだから、いいのケーキをお土産にと思つて。あ、写真見るかしら？はい、ビデオ

そう言ってハンドバックからひょいと取り出したのは、一枚の写真
何故持つているのか

ツツコンだとひるで更なる突き返し（急所的な意味で）が待つ
るので、ザフィーラは事態を静観するに止まっている

「・・・」
「これは！？」

と、写真を渡された美由希が、にわかに戦慄いた
彼女は今日、終日驚きっぱなしである

そこに『』されていたのはとある家族の団らんの姿

赤い髪の女の子（推定7、8歳）を肩車しながら朗らかに笑うザフ
イーラ

場所はおそらく「」かの公園か

明らかに休日に遊ぶ父娘の図であった

アハハ、ウフフ

そんな幻聴が聞こえてくる

あまりの衝撃に美由希は硬直している

故に、その赤い少女が見るからに抵抗していることや、ザフイーラの銀髪がむしり取られそうになっているさま、また、画面の端に写り込んでいる笑いをこらえたシャマルなどは田に入っていないらしい

実際の副音声は

イタタタタタ

下ろせこらあああああ

ブークスクス

である

これはひどい

「『うちの子』でね、ヴィータちゃんつて言つの。私たちもこの町に越してきたばかりのものですから、まだまだ新しいものが多いからはしゃいじゃつてね」

「あ、あ、あ……」

「あら、めでなさい。私ったら、これじゃただの『親バカ』みたいよね?」

「うう、うう、うう……」

「うう、それじゃあ、『つちの子達』が帰つてくる前にお買い物して帰らなきやいけないから、私たちはそろそろお暇させていただこうかしら」

「…………」

あながち、嘘は言つていのだけにタチが悪いシャマルクオリティー

美由希は最早言葉もないらしい

しかし、御神の剣士は伊達ではない
ギリギリとぎこちない笑みをなんとか頬に張り付けながら、美由希
は手にしていた写真をシャマルへと返し

「あ、はは、そう、ですか。あ、伝票おあずかりしまーす」

まずは眼前的業務をまつとうすることにしたらしい
プロ根性故なのか、現実逃避なのか判断しづらいが、この際どちら
でもいいかもしない

「はーい、計めて2700円になつまーす」

「はーい、これで。それじゃ、じきやうまでした」

「つむ、『ご馳走様。では、また、美由希姫』

そうして、お会計を済まし、土産を購入した二人は、翠屋の扉を潜つていった

「ありがとうございましたー」

この日、これより後は終始ポケーと停止し続けていた娘に、桃子はビリしたものかと首をかしげるのであった

翠屋からの帰り道、守護騎士一人はのんびりと歩を進める

後半からすっかりシャマルにペースを持つていかれ、まったく空氣に成り下がっていたザフィーラに、当のシャマルはじとじとした視線を送つていた

「あなたも、気がついてない訳じやないでしょ？あの娘も可哀想に。絶対勘違いしてたわよ、あれ

「しかしながら、『そう』なる程に親しい仲というわけでもないのだが。それに足る理由もなかろう

ザフィーラは思い返す

何も話さなかつた故によく見ていたのだが、シャマルが話し出した辺りから明らかに美由希は動搖していた
ザフィーラとて、鈍感の唐変木というわけではないので、シャマルの言つ『勘違い』が何を指しているかはわかる

美由希の中ではザフィーラ達一人はアレな関係として捉えられたのだろう

それはまだ良い

確かに、男と女が居ればそういう風に話が進みもするだろう

が、先ほどの少女とは進む以前に話すら殆どしていないのだ

美由希があからさまな動搖を示す根幹に至つた理由が、ザフィーラにはピンと来なかつた

それに、なんというか、原作キャラ云々を今さら言ひ出すつもりはないが、『ザフィーラ』というファクターに色恋は似合わない気がしてならない気がする

「大体、お前自身も敢えて煽るようなことを・・・と言つた、全部お前のせいだらう

「あら、知らないの？女の子の心に理屈は通用しないのよ。それに煽つてるなんて人聞きが悪いわね。私は少しかつてみただけよ。ウフフ」

ザフィーラの苦言もなんのその、年季を経た者のみが持ちつる、『スゴ味』みたいなものを感じさせる怪しげな笑みを、シャマルは言

葉に乗せて返して見せた

その時、ザフイーラに電流走る・・・！

（ま、まさか、うちのシャマルさん・・・コイツ、ただほやほやはしてるだけの脇役じやない・・・ッ！）

ウフフと妖しく笑うシャマルに、ザフイーラは驚愕した
これは、このシャマルは原作でフードマウトした様な無害な見守
りキャラではない

どじっ子であり、お医者さんでもあり、お母さんでもあり・・・そ
の上に更なる深みを隠していたのだ

ビューティー・アクジョか？

ドロジヨ様狙いなのか？

それではプレシアさんとキャラが被るんじや ないか？

（シャマルH・・・）

そこまでしてキャラを濃くしたいのか

（分かる、分かるよその気持ち）

御同類の悩みと試行錯誤に、ザフイーラは田頭が熱くなるのを感じた

まったくもって無礼千万な狼野郎である

「せういえば・・・」

「 どうした?」

ふと、シャマルが「ほす

「気のせいかしら、他の場所に比べてあのお店、妙に魔力素が濃かつたような気がするのだけれど・・・」

(ドックイン)――

頬に手を当て可憐らしく小首をかしげるシャマルさんの鋭い感知能力不意打ち気味な核心をついた言葉は、ザフィーラの心臓をまるで真珠湾攻撃の様に強襲した

彼はいつか不整脈で死ぬのではなかろうか

「え、気のせいだろ? 何故かは知らんが、魔法文明がない割には、この世界は比較的魔力素が多いからな」

守護騎士・・・特にヴィータなんかがなのはをつついてクロノを出す、もとい藪をつついて蛇を出す結果になりかねない

現時点でのザフィーラ達は特に悪事は働いていないのだが、管理局からすれば『闇の書』(存在するだけで)アウト――(テートン)らしいので、不用意な接触は避けたかった

やがて、「「へーん・・・・」と唸っていたシャマルもふと笑い

「やうよ、私の考えすぎかしら。立場柄疑り深くなつてしまつのが私のクセなのよね」

苦笑するシャマルの言葉に、ザフイーラはカヴァーが成功したこと

を知った

(アブねえ・・・何とかバレずに済んだかな)

騙していくよりついで悪い氣もするが、どうせ放つておこてもあと一月もしないうちに出会うことになるんだろう

主に血生臭い戦場とかで

今はそれを意識しなこうじながらザフイーラは口を開く

「お前はそれでいい。そうでなくては、我等がブレインは務まらないだろ?」

「あら、やうこいつくれるのかしら、盾の騎士さん?」

「ああ、頼りにじてこる、参謀殿

やう言ひてお互に口を合わせれば、どうともなく吹き出す

シャマルはスカートをふわりと揺らしながら、ザフイーラの前を歩いていった

「ふふ、わ、手早くお買い物して帰りましょっか。はやでちやん達もお腹すかせて帰つてくるでしょ、うし。頼りにしているわよ、荷物持ちさん?」

「むう」

なんとも言えない笑みを浮かべながら、翠屋印のお土産を手に、ザフィーラはシャマルに追い付くべく足を早めるのだった

平和な、晩夏の一時である

その晩、八神はやでは倒れ、病院へと担ぎ込まれた

やつして時は激流の、じとき速さをもつて、動き出していく

つづく

第十話　『A-sは一日にして成らず』

時刻は深夜一時。

とある一軒家にて、深刻な空氣を纏い顔を付き合わせる四人の人影
守護騎士達の姿があつた。

そこは八神家一階の居間。

はやてを新たなる主とし、彼らが今世に顯現してよりこれまで数ヶ月、この空間には穏やかな笑い声が満ち満ちていた。
しかし、最早ここにあるのは重々しき、夜の帳を下ろしてなお深い
絶望ばかり。

車座に座る彼らは、テーブルに乗せた一つの物体に目を落としながら、誰一人として言葉を発しない。

そこにあるは、闇の書。

彼ら四人の母体にして、所有者に絶大なる力をもたらす魔導書。
しかし、現在はか弱き少女の命をじわじわと喰らう悪魔でしかなかつた。

そう、今代の『夜天の主』八神はやてが、闇の書の侵食により倒れたのである。

その可能性は以前より存在した
故に、覚悟もしていた。

だが、あまりにも唐突な平穏の破壊は、戦無き世界に馴染み始めて

いた彼らの心に容赦なく焦燥の楔を打ち込むこととなる。

知略を巡らすべき口が、もつゞし早く氣づかていればと、湖の騎士は口の見地を嘆き。

何故優しいはやてがこんな目に遭わねばならぬのかと、紅き鉄騎は怒りに震え。

渦巻く感情の一切を制し、しかし微動だにすることなく、盾の守護獣はただただ瞑目して時を待つ。

力チリコチリと、秒針が時を刻む音のみが場を支配する。やがて、烈火の将が地を這うかのように低く、ポツリと呟いた。

「 今が、選択の時だ。座して朽ちるか、外道を往くか

力チ込め! ザフィーラさん 第十話『今がその時だ!』

「寝惚けたこと言つてんじゃねえよ」

鈴を転がしたように可憐らしい、しかし棘のある声が発せられる。シグナムの言葉に、そう言つてヴィータはぎろりと視線を送った。

そこには込められるのは、理不尽に対する怒りと、希望を掴み取ろうと固めた決意の気迫。

「ひつなつちやつたら、そんな選択肢なんて今さらだ。あたしはやる。例えはやてに嫌われたって、ぜつたいやってやる。はやてが死ぬなんて、ダメだ。それだけは、許せねえ やるしかないんだ、あたしは」

今一度、自分自身に確認し直すよつと、静かに、しかし激発寸前の意気が込められたヴィータの言葉。

それは最早、彼ら四人の共有した思いであつた。

是か、否か

実を言えば、主たるはやてを侵食より救つ手段は、ひとつだけ残されている。

魔法収集媒体としての側面を持つ闇の書に、力を吹き込んでやること。

つまり、他者の魔力を、リンクコード」と取り込ませることである。

ひたすらに優しく血が流れるような争いを好まないはやてからすれば、自らの命の危機だとしても誰かを傷つけることを良しとしないだろう。

守護騎士達にも、戦うなと命じることだらつ。

故に、決行は極秘裏に。

決してはやてに気取られてはいけない。

騎士たるもの生前に背くなど不義の証明に他ならない。

しかし、不忠の汚名を被りつゝ、彼ひたは引き下がれぬ理由があるのだ。

即ち、『是』一択。

何物にも代えがたき主のためならば、それこそ心命を捧げたとて惜しくはない。

主のためなら名誉は要らぬ。

異を論ずる者など、ここには居ない、居るはずはないのだ。

やがて、答えを受けたシグナムがふうと息を吐いた。
継がれた言葉には、どこか仲間への信頼が滲み出ている。

「ああ、お前ならそう答えると分かつていた。その答えは我らの総意だ。先ほどの問には、あくまで将としての確認だよ」

豊かな胸の前で組まれたままであった腕をぱくと、同時に張り詰めていた空気もどこか弛緩していく。

シグナムという武人は、そこに居るだけで人に感じさせれる凛とした存在感がある。

あるいはそれこそが、将器と呼ばれるものであるつか。

「でも、ヴィータちゃん」

ふと、車座の一角、これまで黙っていたシャマルが口を開く。
常よりの柔軟な笑みは浮かべておらず、今、彼女の顔にあるのは不安の念。

彼女の整った眉が、力無さげにひそめられていた。

「リンカーコアを集めると言つことは、つまり、はやてちゃんの人生を血に染めてしまうかもしねないということよ？」

「・・・言わねなくても、分かってる。分かってるよ」

シャマルの言葉は、ヴィータとて痛いほど理解していた。彼女らはこれまで、リンカーコアを求める数えきれぬ戦場を駆け抜けってきたのだ。それこそ、殺しの法度も何もない、血で血を洗う戦場を。

だからこそ、その惨たらしさは知つている。

守護騎士の狼藉は、それ即ち主の罪と断ぜられる。

この平和の世に生きるはやてに、殺人の罪禍を背負わせることはできないのだ。

「皆、その点だけは肝に命じておけ。主はやての道を血に染めないためにも、例え何を相手取つと、我らが命を刈り取ることはあってはならない」

「もう、私たちがはやてちゃんの未来を台無しにしてしまうわけには、いかないもの」

決然と言つシグナムに応じ、未だ不安は拭えずも、シャマルは精一杯の氣概でもつて決意を新たにした。

黙つていたヴィータも、外見不相応な真剣な光を目に宿し、力強く頷いた。

誰からともなく目線を交わせば、次第に心から沸き上がるは純粹なる頼もしさ。

我らが揃えば敗北は無し。
必ず成し遂げて見せよつや。

彼女達は、幾星霜を共に戦つてきた盟友である。
さればこそ、願いは四位一体、一蓮托生。

いつかまた、この家に心からの笑顔を取り戻すこと。

それだけを胸に、羽を休めていた戦士達は、久方ぶりの闘争の渦へ
と身を投じることを決意したのであつた。

?

お気づきだらうか。

ここに揃うは四人の騎士。

しかし語らうは三人の女達のみ。

明らかに一人欠けている。

「おい、ザファイーラ。なんか喋れよ」

そり、黒一点・守護獣ザフィーラが黙したままであった。
それ以前に、いまだ瞑目したままである。

この流れでノーリアクションとか、マイペースにも程がある。

「 む

「む、じゃねーよ。お前、話聞いてたよな？当たり前だよな？まさか聞いてなかつたとは言わせねーぞ？」

ぱちっと田を開けたザフィーラに、ヴィータのジト田が降り注ぐ。

「こりはふざけていい場面ではない」とぐりい、それこそ九歳児にだつて分かるだろ？
だからこそ、ヴィータの聲音には自然とドスが利いていた。

流石は歴戦の騎士なだけはあり、その響きは、たとえば子供の喧嘩で使おうものなら今後の学校生活は独りぼっち確定なほどに恐ろしいものである。

しかし、ザフィーラは特に気にした風もなく、言葉を続ける。
その視線の先にいるのは、烈火の将。

「シグナム」

「どうした？　まさかとは思つが、反対するか？」

「う、と。

シグナムの鷹の目が細められる。

「 蓄集の対象だがな、できうる限り人間は避けるべきだろう」

その口から放たれたのは、蓄集に踏み切ることを前提とし、そらに先を論ずる言葉。

そう語りかけられたシグナムは元より、ヴィータもシャマルも、ふと緊張を緩めた。

彼こそは、『盾の守護獣』。即ちもとも主と共にある存在。そんな彼には、主を助けないという選択肢など端から浮かぶはずもないのだろう。

それでこその守将であった。

だが、信頼は再確認できたからと言つても、彼の言葉には看過できないものも含まれていることにもシグナム達は気づいていた。

「 しかしそザフイーラ。それでは間に合わんのではないか?」

「ええ、確かに大型の原生生物なんかにはヒトと類似したリンカーノアもあるわ。けれど、『闇の書』は本来対人目的に作られたものだから、どうしても効率が悪くなる。はやてちゃんの容態が悪化する前に解決するならば、やっぱり人間から蓄集するのが一番なのよ」

継がれたシャマルの言葉は、現状の切迫感をよく表している。

命の危険から主を救うならば、一早くことを成すべきである。

闇の書をベースとする守護騎士ならば、それがわからないはずはない。

無論、ザフィーラとて例外ではないはずだ。

だが、三人は彼が何を考えそう言つたのかを薄々ながら理解できた。

「 命に貴賤があるとは言わん。だが、少しでも『被害者』は少ないほうが良いだろう? 」

結局は、そこに帰決するのだ。

『はやての未来を血に染めない』。これが四人の唯一の懸念であり、ザフィーラの提案はその可能性を少しでも減らしたいという彼なりの考え方なのだろう。

動物ならば死んでもいいのかと糾弾されるかもしれないが、もとより、彼らが行うのは法的見地からすれば悪行の類いである。万が一殺生沙汰になつたとしても、それが対人間であつた場合とそれ以外であつた場合では、己や他者に与える倫理的嫌悪感は格段の差があるはずだ。

万が一彼らが捕縛され“しかるべき組織”に裁かれることになつたとき、殺人罪があるかないかは大きく断罪に関与するだろう。

理想論では『命は平等である』と言えるが、大多数の人間は『殺人の有無』を問うだろう。

彼らとて百戦錬磨の騎士であるからには、やすやすと捕縛されるような真似にはなるまい。

だが、『万が一』の確率であるしが、起こつるからには考慮すべきなのだ。

突き詰めれば、今までの平和の時間すらも、『万が一』にもたらされた奇跡のようなものである。

万が一とは、決してゼロではないことを、彼らは知っていた。

それに思い至る騎士達は、しばし沈黙した。

騎士とは本来、戦場において何よりも相手との剣を交えた命の対話を重要とする。

このような命を秤にかけるような判断は、彼らにとっては遺憾に違いない。

だが、今は騎士道を語つてらわれるような時ではない。

「確かに、一理ある、か」

「その状況はあまり考えたくないわ。でも、そうね、考えないわけにはいかないわね」

主を免罪符にすることだけは赦されないが、彼らにとっては非情に徹すべき事態なのだから。

「……でもよ、だからってはやでが危険な目にあっちゃ意味ねーだら

う

ぶすりと顔をしかめながら、ヴィータはザフィーラに吐き捨てる。

彼女の言葉もまた真理。

万が一の可能性に囚われ、今に迫る危険で主が傷つく」とも、あり得てはならない。

だが、ザフィーラはそんな彼女の不満を一刀にして切り伏せた。

「挑みもせずして弱音を吐くな、鉄槌の騎士。……主の未来も守れずして、何が守護騎士か」

「……ひー。」

いつにない霸氣と堅い意思を含ませたその物言い、ヴィータは鼻白んだ。

彼の言葉は一見すれば、主の意思を盾にした責任逃れにも聞こえる。だが、彼の性格からすればそれはあり得ないはずだ。

そして、ヴィータは気づかれた。

最愛の主であるはやてが倒れたところ、自分は思ひ以上に焦つてこるのでないか？

拙速に甘んじ、急いたが為に仕損じるようなことがあれば、その時自分はどうするのか。

焦りが功を奏することはない。

それが戦場ならば尚更だ。

(……ひー)

ザフィーラは言った。

挑みもせずして諦めるのかと。

やつじやない。鉄槌の騎士ヴィータとは、やつではなこはずだ。

いかなる絶望にもいの一一番で切り込んで行き、主の障害をその鉄槌でもつて打破するのが彼女の役目だったのではないか。

「……そこまで言われいや、やるやしないだら……わかったよー。やつじやるー。」

「ヴィータひやん……」

心配するようなシャマルの言葉も、ヴィータの耳には届かない。実を言えば、ヴィータは何にも変えてはやてを助けてやりたい。だが、それは他の三人だって同じだろ？。

それでもなお、頭に血の昇った自分が考えるよりは、冷静な三人の出した答えに従うべきだろ？。ヴィータは過去の経験上、そうすることが総体的な痛手を減らすことに役立つと知っていた。

鉄火場での一寸の駆け引きならば自分の直感に従うのが最上だと自覚していたが、大局的な思考展開では、その限りではないのだ。

口では受け入れたが態度には不満が溢れているヴィータの様子に、シグナムは苦笑しながらも口を開く。
将として、今後の指針を定めなければならない。

「ザファイーラの言つように、魔導師を相手にすることは極力控えよう。しかし、ヴィータの懸念ももつともだ。我らを邪魔立てる存在があれば、例えそれがなんであれ一切の区別容赦はしない。それだけは心に刻め」

「無論だ」

「要するにーあたしらが死ぬ氣で頑張るつてだけだろーもちろんはやては死なせないーその上ではやてを哀しませないー両方やりやあいいだけだー！」

水を向けられたザファイーラは、しっかりと頷いて返し、継ぎ早に吐

かれたヴィータの気勢が、この場の結論を言い当ていた。

シグナムは一つ息を吐く。

それは小さな吐息であつたが、この話し合いで一段落がついたことを示していた。

「やつ言つわけだ、シャマル」

「ええ、任せで。リンクアーチアを保持する生物が棲息する世界をチエックするわね。移動時間も考えてなるべくこの世界から近いところが良いわよね？」

「無理を言つてすまんな」

何はともあれ方向が指示されたことで前向きになれたのか、朗らかに笑つて応えたシャマルに、ザフィーラは頭を下げる。

次元世界の搜索や、転移魔法の行使は必然的に参謀役のシャマルにお鉢が回つてしまつ。

後方支援の役目として、カートリッジの作成なども、大部分を彼女に頼ることにもなるだろ。

自分の発言が彼女の負担を増やしてしまつことを、ザフィーラは心苦しく思つていた。

「気にすることないわ。これは私達みんなの方針よ？一度決まったことに、誰その責任だなんてことはないわよ

それにね。

シャマルは続ける。

継がれた言葉に、残りの三人は誰からともなく顔を見合せた。

さあ、早速はじめましょう！

すっかり普段の空氣を取り戻し、そう言って机の上の闇の書を手に取るシャマル。

シグナムも、ザフィーラも、氣を吐いていたヴィータも、そしてシヤマルも、お互の目を見て、笑った。

「 私たちはヴォルケンリッター。四人揃えば、敵はない。でしょ？」

（ふい——。）

氣焰に満ちた車座の一角で内心の一息を吐きながら、ザフィーラは氣を抜いていた。

外面では場の空氣を読んで不適な笑みを浮かべながらも、実際にはご覧の有り様である。

ここまで流れ、即ち、『戦闘は基本的にNGの方向で大作戦』。

シグナムとの模擬戦という形で何度も戦いを経験している彼ではあるが、いかんせん、中身の臆病さは拭えていない。

模擬戦だと分かっているシグナムとの鍛練ですらも、腰が引ける。いくらザフィーラの戦闘記憶や新しいデバイスがあろうとも、戦うことはなるべく遠慮したい。

しかし、ザフィーラはたしかに臆病者ではあれど、かといって決して何も考えがないわけではない。

先程皆に語った『万が一』に備えるというのはもちろんのこと、ザフィーラが念頭に置いたのは、『アニメ本来の流れ』だった。

ザフィーラの記憶では、原作ではやてが倒れたのは十月半ば。主人公達との出会いは十一月初め。

つまり原作の騎士達はクリスマスまでの三ヶ月ちょっとしか時間がなかった。

しかし現在は残暑も厳しい九月初め。ゆうに一月強の時間差がある。この猶予は、かなり大きいだろう。

原作ではなりふり構つていられなかつただろうヴォルケンズだが、今の彼らなら少しは余裕を持った計画的略奪作戦が可能なのだ。

それを利用しない手はない。

（まあ・・・闇の書の一件については、残念ながら原作のまとまり方が一番だよなあ。都合のいい解決策なんで、俺のアタマじや思い付かん・・・）

ザフィーラ一番の懸念は、やはり『原作』という縛りだ。

下手に知つてゐるからこそ、それを頼みとする以外の方法は、なかなか見つからない。

現時間軸は、アニメ一期の寸前。一期が原作通りに終わっているな

らば、展開は変わらないだらつ・・・と希望的に見ていた。

そうなると、ザフィーラ達が魔導師を襲い管理局に存在を察知されるのは、来月以降でないと、予定が狂いかねない。

へたすりや地球がテストロイな案件だけに、ザフィーラはやうなることに恐怖を抱く。

考えれば考えるほど、アニメの世界は奇跡的なタイミングの重なりあいで構成されているのだと、痛感した。

（まあ、来月からまた方針にテコ入れを具申するとして・・・とりあえず今月は、リアルモンスターハンターで頑張ろつ）

良くも悪くも、来月からが本番に違いない。内心の憂鬱を女性陣に気付かれぬよう、表情にはおくびにも出でず。

ふと、いつかみた巨大ダンゴムシに手甲一つで挑みかかる自分を幻視して、ザフィーラはげんなりした。

明くる朝、八神家の食卓にて。

八神はやは寝起き一番に待っていた家族らの心配責めに、ほんわ

りとした笑みで応えていた。

「もお、皆心配しすぎやで。昨日のは、ちょっと疲れとつただけやから。我ながら、倒れたのは大げさやつたなあ」

昨晩、風呂から上がり自室へ戻ろうとした直後、いつになく強い体の痛みに襲われたはやはては卒倒し、家内を騒がせてしまった。すぐさま病院にかつき込まれたものの、精密検査には異常もなく、大事をとつて入院しようと勧める周りを押し切つて、夜遅くに帰宅したのだ。

実際、これまでにも発作的に痛みに襲われることは幾度かあったのだが、あくまでもそれは疼痛刺激的な弱いものだった。

今回のような事態は彼女としても初めてだつたのだが、病院に着いたときにはもう痛みもなく、結局ははやはての遠慮が勝つた。

それ故の今朝からの心配責めに、はやはては不謹慎ながら心に暖かいものを感じていた。

今までは、広い家でひとり痛みに耐えながら、彼女の心は寒さに震えていた。

今更ながらに、誰かに慮られるところとの面映ゆさ、暖かさにはやての頬は緩む。

今浮かべている「マーマ」とした笑みも、心底のものだった。

それだけに、彼女は申し訳なさも抱いていた。

とくに「ヴィーターの心配しよつは尋常ではなく、今日は一田中側にいるぞ」とばかりにはやてに刷りよつてくるのだ。

はやはてにはそれがどうにもいたたまれなく やはり、それ以上に

嬉しこと毎つてしまひのやつた。

やつひながら朝食を済ませると、また一日が始まつて行く。

膳を下げたシャマルは流し台に立ち、コビングではシグナムが仕事の支度を始めている。

廊下からは新聞を取りに歩くザフィーラの足音が響き、傍らを見やれば、ヴィータがここんと顔をかしづけさせてを見返してくれた。

「どうしたの、はやく？」

「ヴィータ

「うそ

「ヴィータはええ子やね」

「え？ えへへ、あつがと

きれいな赤髪を小さな手でわじわじと薰でてやるとい、かけがえのない妹分は顔をほこりばせた。

（つさ、やつせ、こいもんせ）

田常の暖かさを知つてしまつたはやく、このぬくもりをもつ一度と諂つてることはできなさうだと再確認するのであった。

□△△!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0734k/>

力チ込め！ザフィーラさん

2012年1月12日19時48分発行